

いて、唯、神の性質及び世界の創造に關する東洋的プラトンの作り話を猶太教や基督教に添加して而して辯神論及び哲學的道德を含めて主として寓意的名稱に於ける形而上學的哲學をば之から形成しようとする、粗雑なる試みを見るに過ぎない。人類史にとつて異端の名は未知であるが故に、この不成功に終つた企圖は何れも人類史にとつては價値ありまた注意すべきものである。尤もこの種の夢は基督教史にとつて好都合にも決して教會の重要な組織とはならなかつた。教會の掟に従ひ、是等の宗派に關して行はれた幾多の努力の後に、是等の宗派はその理念を何處から持つて來たか、是等はその理念を何と考へてゐたか、而してこの理念は如何なる結果を齎したかといふやうな純粹の哲學的研究は人間悟性の歴史にとつては決して無用なものではあるまい。専ら完全な基督教を打ち建てるといふ大目的を持つてゐた麻尼の教義は更にそれ以上に進んだが挫折した、而して其の數多の弟子達はあらゆる時代、あらゆる場所に於いて非常な迫害を受けた、それ故、麻尼教徒の名は、殊に、アウグスチヌスが彼等攻撃の筆陣を張つて以來と云ふものは、異教徒の最も恐ろしき名稱となるに至つた。吾人は今やかくの如き教會的迫害精神に戦慄し、而してこの狂熱的異教徒の大多數は、單に宗教、形而上學、倫理學及び自然哲學を結合するのみならず、是等を現實社會の目的、哲學的、政治的、宗教教團の目的と結合せしめようとする大膽なる試みをなせる企業的、思索的精神を有する人々であつたといふことを知る。彼等の中の或者は、學問を愛好したが、殘念な事には彼等はその境遇上何等精密な知識を持つことが出来なかつた。けれども、舊教徒は、もし是等の暴風雨が彼等を動搖せしめず、且少くとも彼等の文献的傳統をば擁護するやう彼等に強制したならば、

激める水溜となつたであらう。純粹理性の時代及び純粹理性に依る政治的進歩改善の時代は尙存在してゐなかつた。而して波斯に於いても、アルメニアに於いても、また後には、ブルガリア人やアルビゲン派の人々の間に於いても麻尼の宗教團體の這入るべき餘地はなかつた。

基督教の各宗派は、印度、西藏及び支那の方面にまで進んで行つた。尤もその徑路に至つては今なほ吾々に不明である。がそれにも拘らず基督紀元第一世紀頃亞細亞の最も遠隔なる地方に起つた衝突は基督教史上極めて著明なるものである。バクトラから來臨せられたと稱せられる佛陀、即ち佛の教はこの時代に新生命を勝ち得たのである。佛陀の教は錫蘭島、西藏及び支那に至るまで推し進んだ。この種の印度の書物は支那語に翻譯され、而して佛敎といふ大宗派が出来上つた。坊主のあらゆる殘忍なる所業或は喇嘛僧や印度の隱者の全修道院組織を基督教に歸せず、埃及から支那に至るまであらゆる民族の古き夢を新に醗酵せしめ、而して之を多少とも形式に於いて區別した所のは愚なる人であつたやうに思はれる。佛陀、クリシナ及び其他多くの物語には、基督教の概念が印度風に裝飾せられて這入つてゐるやうに思はれる。而して恐らく十五世紀に至つて始めてかの山嶽に起れる達賴喇嘛は、その人格的神聖、その嚴肅なる教、その鈴及び僧派を有する所よりすれば、チベル河の岸邊に住める喇嘛の遠い従兄弟であつたらしいが、唯異なるところは、前者に於いては、麻尼教と景教が亞細亞の理念と習俗とに接木され、同じく後者に於いては、正統基督教が羅馬の理念と習俗とに接木されてゐるといふ點だけである。然しこの二人の従兄弟は容易に認め合ふことは出来まい。それ程彼等はお互に訪問することが稀である。

殊に五世紀の初頭より深く亞細亞の奥地までに擴まり、而して幾多の善事をなした博學なる景教徒を瞥見すればなほ一層明かになるであらう。殆んど基督教發祥當初からエデッサの學校はシリア學問の心地として繁榮を極めた。基督自身と書翰の往復をした、アプガルス王は、その居所をネジビスから此處に移した時に、寺院に置かれてあつた書物の蒐集をエデッサに持つて來た。當時學者たらんと欲する者は誰でもあらゆる國々から遙る々々エデッサにやつて來た。といふのは、基督教の神學以外に、希臘語やシリア語で、何ものにも拘束されない自由な藝術に關して教授されたからである。されば恐らく、エデッサは世界に於ける基督教大學の嚆矢であらう。この大學は、かのネストリウスの教に關する論争の渦中に巻き込まれた結果、その教師が放逐され、而して該講堂が全く破毀せられてしまふに至るまで、四百年の間榮えてゐた。然し之がためにシリア文學は、單にメソポタミア、パレスチナ、シリア及びフェニキアに擴まつたのみならず、また、大いに歡迎され、而して遂にこの國の基督教、後には、亞刺比亞、印度、蒙古及び支那に於ける基督教をも支配した全然ネストリウス派の法王が生ずるに至つた波斯の方にまで擴がつて行つた。吾々は果して彼が中世に於いて幾多の物語に書き綴られたかの名僧、ヨハネス（世界の僧、ブレスタードシヤニ）であるかどうか、而してまた、教義が稀らしき混淆をなしてゐる處から遂に彼から、かの偉大なる喇嘛が出て來たのであるかどうかといふことに關しては、何れも斷定を下さず置きかう。波斯に於いては、世の寵兒たる景教徒は諸國の王に醫者として使者として及び大臣として十分登用せられた。基督教の經典は波斯語に翻譯せられ、而してシリア語は此の國の學術語となつた。モハメッド王國が旭日

昇天の勢を以つて興隆するに至るや、特にその後繼者、オミヤアデ王朝時代には、ネストリウス派の人々は最高の名譽ある位置を占め、而して征服せる地方の太守となつた。而して回教々主がバクダッドにその居所を定めて以來、彼等も亦その住居をサマアラに轉ぜねばならなかつたのでネストリウス派の長老は彼等を助けた。かの國民を學問的に教化し、而してバクダッドの大學に醫者、天文學者、物理學者、數學者、地理學者及び編年代歴史の作者の位置を與へたアル・マムンの下に於いてシリア人は亞刺比亞人の同窓でありまた教師であつた。兩國民は競争して希臘の書物を亞刺比亞語に翻譯した。がその多くは已にシリア語に翻譯されてゐた。而してもし爾後亞刺比亞語から學問の光が暗黒なる歐羅巴に發し始めたとすれば、亞刺比亞に於いては基督教を信奉するシリア人が本當にこのために助力したのであつた。この地方の東洋的方言の中で始めて母音を獲、而して最も古くして最も立派な新約書の翻譯を誇ることの出来る彼等の言葉は、謂はゞ希臘の學問を亞細亞に渡し、而して又之を亞刺比亞人を仲介として歐羅巴に渡す橋梁となつたのである。當時、他の基督教各派を壓迫し或は之を遠ざける手段を知つてゐたネストリウス派の傳道師はかくも好都合なる境遇のもとに遠くまた廣く進んで行つた。尙成吉思汗王朝の下に於いても彼等は重要なものであつた。彼等の長老は屢々汗と連れ立つてその遠征に趣き、而してその教をば蒙古人、イグリア人及び其他韃靼の諸民族の間に宣傳した。サマルカンドには管長が居り、カシガル及びその他の諸都市には監督が居つた。もし、有名な基督教の記念碑が支那に八つあるとすれば、人はこの記念碑にタアジンから移住せる僧侶の全年代記を發見するであらう。もし基督教が前に起つて、影響を及ぼさなかつ

たならば現在存するが如きモハメツド教は全然發生しなかつたであらうといふことを附け加へるならば、何等の争論もなく、多少早晩の差こそあれ、南部亞細亞全體並に北部亞細亞の一部の考へ方をも動かした釀母がその中に在ることが知れる。

それにも拘らず、誰もこの運動から、恐らく希臘人や羅馬人に見られるやうな人間精神の新しい特色のある花を期待しはしなかつた。かくの如き大なる活動をなしたネストリウス派の人々は決して民族を形成してゐた譯でもなく、生地に自生した種族でもなかつた。彼等は基督教徒であり、彼等は僧侶であつた。彼等は其の言葉を教へることが出来た。然し彼等は何を書くことが出来たか。彼等は實に、禮拜式、經典の註釋、修道院の祈念書、説教、討論書、年代記及び無味乾燥な詩を書いたのであつた。従つて、シリアの基督教文學には、魂から燃えあがつて心情を暖めるやうなかの詩人的天稟の閃光は全く存しない。憐む可き人工的物品、人名表、説教、年代記を詩に改作すること、これが彼等の作詩法である。彼等が加工した學問の何れにも、彼等は發明の精神を齎らさず、また其の何れをも何等獨特な取扱ひ方をしてはゐない。これは禁欲的、論争的僧侶の精神が政治的には如何にも賢明なるに拘らず、そのなす處如何に少なかつたかを語る悲しむべき證明である。この精神はあらゆる世界の部分にかくの如く何等の結果を齎らさずにはあらはれ、今なほ西藏の山嶽地方を支配してゐる。而して其處に於いては、僧侶の秩序は全く合法的に行はれてゐるに拘らず、何物にも拘束されず自由に工案工夫する天才の痕跡は、少しも見出すことが出来ない。修道院から生ずるものは、多くは修道院に適合するものに過ぎない。

従つて歴史は、基督教を信奉する亞細亞の各地方には、唯一寸立ち止まりさへすればよい。基督教はアルメニアには早く傳來し、而して此の注目するに足るべき古代の言語に、獨特な文字を與へ、それと同時に、二重三重の經典の翻譯やアルメニアの歴史を與へた。然しその文字を有せるミスロオプにせよ、尙歴史を持てるその學徒、コオレエネのモオゼにせよ彼等の國民に對して文學や制度を與へることは出来なかつた。昔からアルメニアは諸民族通行の十字路に當つてゐた。そは嘗て波斯人、希臘人、羅馬人の下にあつたやうに、今や亞刺比亞人、土人、韃靼人、クルド族の下に屈服してゐる。この住民は今なほその昔ながらの技術、商業を營んでゐる。學問上や政治上の建物は、基督教の有無に關せず、全然建設せられ得なかつたのである。

尙一層悲慘なのは、基督教を信奉したゲオルギンである、其處には教會や修道院があり又長老、僧正及び僧侶がある。婦人は美しく、男子は元氣潑刺としてゐる。而も兩親はその子を、夫はその妻を、王侯はその臣下を、信者は結局その僧侶を賣るのである。かくの如き快活にして不實なる賊徒の間に一風變つた基督教が擴まつて行つた。

福音書は夙に亞刺比亞語にも翻譯された、而して多數の基督教の宗派はこの美しき國土のために艱難辛苦を嘗めた。此處で猶太人や基督教徒は屢々互に迫害し合つた。假令彼等は時々國王をすらすら出したにもせよ、何れからも何等取り立て、云ふべき程のことが出来て來なかつた。一切のものはモハメツドの下に没入してしまつた。成程現在では亞刺比亞には猶太種族はあるが、基督教徒の組合は存在してはゐない。相互から派生せる三つの宗教

は、互に憎惡の念を抱きながら、その發祥地たる亞刺比亞荒原の聖地を警護してゐる。

もし吾々が、かの亞細亞地方に及ぼせる基督教の影響の結果を總括的に把握しようと欲するならば、吾々は先づ何等かの宗教及び基督教が或る地方に與へることの出來た利益の見地に關して比較を試みねばならぬであらう。

(一) 基督教は、内々、この世に天國を實現せんと活動したかも知れぬ、即ちあらゆる民族の爲に諸般の制度を更に一層完全ならしめんと活動したかも知れぬ。然しこの活動の花たる完全無缺の國家は、基督教によつて、亞細亞にも歐羅巴にも出現しなかつた。シリア人や亞刺比亞人、アルメニア人や波斯人、猶太人やグルウシ人は依然として舊態を保持してゐる。而してかの地方の如何なる國家組織も基督教の娘たることを誇ることは出來ない。假令人が隱遁生活及び僧侶の奉仕、或は倦むことなき活動をなしつゝあるあらゆる種類の教政を基督教國家の理想と考へようとしても、誇る譯には行かない。長老や僧正は彼等の宗派、その教區、その權力を擴めんがために多數の傳道師を諸處に送つた。彼等は僧職に於ける勢力或は修道院や教區を維持せんがために王侯の恩寵を求め、一黨派は他の黨派に反抗し、而して自ら最も有力なる黨派とならうと心懸ける。そこで猶太人や基督教徒、ネストリウス派の人々や耶蘇の神人兩性合一を主張する論者は互に驅逐し合ふ。而して何れの黨派を問はず、或る都市若しくは或る地方のために純粹にまた自由に活動することを思ひ當るものはないのである。常に稍や僧院の僧侶の如き風があつた東洋の僧侶階級は神に奉仕しようとして、人間には仕へようとしなかつた。

(二) 人間の上に働くには、人は教化、尊嚴及び神事的儀式といふ三つの方法を持つてゐた。教化はそれが正當な

るものである限り、確かに最も純な、最も効果ある方法である。老若を教へるといふことは、若しそれが人類の本質的關係や義務に關してゐるならば、有用なる知識の多數を運轉せしめ、或はその活動を繼續せしめることが出來たのである。かくの如きものを下等な民族にも一層明瞭ならしめた名譽と特權とは諸々の地方の基督教によつて絶対に獨特なものである。神や道德に關する知識は、問題、説教、讚美歌、信條及び祈誓によつて、すべての民族の間に擴つた。聖書や文學も亦聖書の翻譯と説教とによつてあらゆる民族の間に行はれるに至つた。而してすべての國民がまだやつと物語を理解することが出來たに過ぎない位幼稚な所に於いては、少くとも神聖な物語が復興した。然しこゝに於いては明かに問題はすべて教へる任務ある人が果して教へることが出來たか、而してまた彼が教へたものは何であつたかといふことに歸着するのである。この二問に對する解答は、個人、民族、時代及び地方に應じて甚だその趣きを異にするが故に、結局人は彼が教へねばならぬものにのみ執着せねばならぬ譯になるのである。然らば、有力な教會は何を固守してゐたか。この教會はその多くの教師の無能と大膽とを恐れた、従つて其の意見を簡單に述べて而して狹隘なる範圍に止まつてゐた。さればこの教會は勿論その教の内容がすぐに盡きて之を繰り返さねばならぬ危険數代のうちに此の傳統的宗教は殆んどそのあらゆる新鮮味の光輝を失ひ、而して思想の貧弱なる教師は、その古い信條の上に安眠を貪るといふ危険に陥つた。されば主として基督教の傳道師の最初の衝突のみがまさしく生氣澆刺としてゐた。やがてあらゆる緩漫なる波は更に緩やかなる波を驅り立て、而して結局、あらゆる波は古代基督教的儀式の慣例の平穩な表面に靜かに消え失せてしまふに至つた。

即ち人は儀式によつて典儀や教義の精神の亡佚せるものを補はうとした。かくして遂に古い華美の姿で、手に取れない、動かすに立つてゐた精神のない人形にまで成り下つた儀式の制度が現はれた。此の人形は教師や聽講者の便宜のために案出されたのである。蓋し教師や聽講者は、もし考へようとするれば、何か考へることが出来たのである。尤も考へないにした處で、人が言つたやうに、宗教といふ運搬機は決して亡びて仕舞ひはしなかつた。而して最初から教會は非常に統一を重んじてゐたのであるから信者達の四散しないやうな儀式が、確に無思慮な統一を保持するに最善のものであつた。就中、亞細亞の教會は其の完全なる證據である。是等の教會は尙、殆んど二千年以前に出来たまゝの死せる、魂の無い形骸である。異端すらこの儀式のうちに亡びてしまつた。何となれば、異端に對しても最早何等の力がないからである。

然し僧侶の聲望は、死せる教義若しくは消滅した運動に缺けてゐる所のものを補ふことが出来るであらうか。幾分は出来るかも知れぬが、全部は出来やしない。確に老齡の聖者は父たる經驗、成熟せる賢明、及び激情なき平靜なる魂の和な微光をあたり有してゐる。従つてあのやうに多數の旅行者が東方の老齡なる長老、僧侶及び僧正の前で感じた崇敬の念を説いてゐる。態度、衣服、行動、生活方法に於ける崇高なる質朴が、それに與つて力があつたのである。而して多數の尊敬すべき隱者が、世界に對してその教、その警告、その慰藉を拒まなかつたならば、市井の喧騒裡の幾百の饒舌なる有閑者よりも一層善良なるものを樹立することが出来たであらう。が然しその最も貴き聲望であつても唯教であり、經驗と洞察の上に基づく模範である。で若し淺慮と偏見とが眞理

に代るとしたならば、最も敬重すべき人物の聲望は、危険にして有害のものとなる。

(三) 人間のすべての生活は共同の社會の職業に關係してゐるが故に、基督教に於いても、それから離れたものはすべて早晩亡びねばならぬし、或は亡びるであらう。あらゆる死せる手は死んでゐる。そは生ける肉體が己れの生命とその死せる手の不要なる負擔とを感ずるや否や切斷されてしまふ。亞細亞に於けるすべての傳道師は活動せる間は生命を分ち與へ又生命を受け容れたけれども亞刺比亞人、韃靼人及び土耳其人の俗權が彼等の活動を奪つて了つたので、彼等はそれ以上擴がらなかつた。彼等の修道院や僧正の居所は過ぎ去れる時代の廢墟として一局部に悲惨なる殘骸を止めてゐる。多くのものは、唯、賜物、税及び奴隸的使役のために黙許されてゐるに過ぎない。

(四) 基督教は主として教義によつて活動してゐるが故に、そが教へる言葉や、信仰的にそれと結合する所の已に言葉の中に含まれてゐる文化に多くのものが基因するのである。それで基督教は洗煉された言葉や或は一般的な言葉を用ゐて教を宣傳したばかりでなく、言葉に依つて特有な文化と尊敬とを保存したのである。然しながら基督教は神的起原の神聖なる言葉として他の潑刺たる言葉の背後に取り殘され、若しくは恰も荒れ果てた城の中に追放されたやうに排他的の粗野な方言の狭い限界に閉ぢ込められるや否や、そはこの荒れ果てた城の中でやがて憐れな暴君として、或は無知な囚人として味氣ない生活を送らなければならぬのである。亞細亞に於ける希臘語や、後にはシリア語は、かの優勢なる亞刺比亞語に依つて壓倒せられるや、是等兩國語のうちに存する知識

も一般に行はれなくなつた。是等の知識は唯禮拜式として、信條として、僧侶の神學として傳播したに止まる。従つて若し人が本來は唯それが依つて以つて活動せる補助手段に屬してゐるものをすべて宗教の内容に歸するとすれば、その主張は非常な偽りである。印度に於けるトオマズ派、かのゲオルグ人、アルメニア人、アビシニア人及びコプト人を見よ、彼等は何であるか。彼等はその基督教によつて如何なるものになつたか。コプト人やアビシニア人は彼等自身には理解出来ないが恐らく歐羅巴人に役に立つたであらうやうな古代の書籍を蒐藏せる圖書館を持つてゐる。彼等は之を使用しないし、また使用することが出来ないものである。彼等の基督教は最も悲惨なる迷信にまで墮落してしまつてゐる。

(五) 其故私は茲に於いても亦希臘語に對し、そが人類史上、特に受くべき價值ある讚辭をば與へねばならない。といふのは、希臘語によつてすべてのものは光明を與へられ、而もこの光明を以つて基督教も亦我が歐羅巴を照し、或は此の大陸の上に微かなる光を與へたのである。もし此の言語がアレキサンダアの征服に依つて、彼の後繼者の王國によつて、更にまた羅馬帝國の領土によつて、かくも廣く普及せられず、かくも永らく維持されなかつたならば、亞細亞に於いては何等の啓蒙も基督教によつては起らなかつたであらう。蓋し正教信奉者や異端者は何れも直接なり間接なりに此の希臘語に依つてその光明若くは鬼火を點じたのである。アルメニア語、シリア語、及び亞刺比亞語に於いてもその耀光の火花は希臘語から來たのである。而してもし基督教の最初の聖典が希臘語でなく、當時の猶太の方言で著はされたならば、福音書は希臘語で説教されることも出來ず、また普及され

ることも出來なかつたであらう。恐らく現今幾多の國民の上に漲り亘れる流れは、その源泉の近くで濁れてしまつたであらう。嘗てはエビオニト人であり、而して今ではヨハネスの弟子やトオマス派の信者である基督教徒は國民の精神に何等の影響を及さぬ憐れにも輕蔑された集團となつたであらう。其故吾々はこの東方の發祥地から離れて基督教がその最初の大なる役前を演じた舞臺に向つて行かう。

三二 希臘諸邦に於ける基督教の發達

吾々は希臘主義、即ち猶太人の自由な、已に他の民族の概念と混じた考へ方が、基督教の發生の道を開いたといふことを述べた。其故かくして發生せる基督教はその道程を何處までも進んで行つたからして、間もなく希臘語を話す猶太人の住居せる廣大なる地域は新しい使命によつて充たされた。基督教徒の名は希臘の一都市に始めて生れた。基督教の最初の聖典が最も廣く流布されたのは希臘語に於いてであつた。といふのは殆んど印度から大西洋に至り、リビヤからツウルに至るまで多少なりとも希臘語が普及してゐたからである。幸か不幸か猶太國は特に基督教の原始的形態に少なからぬ寄與をなした埃及地方に接近してゐた。もしエルサレムがその搖籃であつたとすれば、アレキサンドリアはその學校となつた。

埃及にはブトレメエルの時代以來、多數の猶太人が商賣のために住んで居た。彼等は此處に全く独自の猶太國

を建設しようとし、寺院を建立し、その聖書を漸次希臘語に翻譯し、而して新しい經典を加へてその數を増した。同様にプロレメウス、フィラデルブス時代以來アレキサンドリアには學問のために立派な施設が存してゐた。之はアテンをもこめて何處にも見當らぬやうなものであつた。四萬の學生は國家の恩恵によつて此處に何不足なく住居し生活することが出來た。此處には有名な博物館あり、宏大な圖書館あり、古代の詩人やあらゆる種類の學者の榮譽を語る作品もあつた。従つて諸民族の尨大なる學校はこの世界貿易の中心地にあつた。まさしくこれら民族の集合により、また希臘や羅馬帝國のあらゆる國民の考へ方が漸次混淆せることによつて、所謂「新プラトン哲學」並に一般にあらゆる黨派の原理を結合しようとした、かの特異なる「混合説」なるものが生じた。やがて印度、波斯、猶太、エチオピア、埃及、希臘、羅馬及び諸々の野蠻國はその考へ方に於いて相接近した。この精神は、不思議にも羅馬帝國の殆んどあらゆる處に行はれるに至つた。といふのは己が郷國の理念を多くの概念のうちに把持せる哲學者が到る處に現はれたからである。然しこれが最も繁榮するに至つたのはアレキサンドリアに於いてであつた。而して基督教の點滴も亦この大洋の中に落ち込み、而して自らの中に組入れることが出來ると思つたものを己れに引きつけた。プラトンの理念は己にヨハネやパウロの書に於いて基督教に同化された。最古の教父達は哲學の領域に這入ると一般に認められてゐた思想表現の様式を用ゐない譯には行かなかつた。譬へばその或るものは彼等の用ゐてゐるロゴスといふ語を遙か基督教發祥以前のあらゆる哲學者の魂のうちに見出した。もし基督教の體系がユスチヌス、アレキサンドリアのクレメンス及び其の他の人々の考へに従つて、ある

べき筈のもの、即ち徳や眞理思慕の念を如何なる時代、如何なる民族の間に於いても決して排斥せず、また後に法則として運用するに至つた限定的言語方式には全然關知するところなき自由な哲學として止まつてゐたならば恐らくは不幸はなかつたであらう。アレキサンドリアで教養を受けた初期の教父達は確に最悪のものではない。唯一人のオリゲネスでも萬と數ふる程の僧正や長老達よりも更に多くのことをなした。蓋し基督はもし彼がその原典に向けた博學多識なる批判的努力なくんばその起原に關しては殆んど全く取るに足らぬ童話の中に没落してしまつたであらうから。彼の精神はその若干の學徒にも移つて行き、而してアレキサンドリアの學校出身の多くの教父達は少くとも他の幾多の無知な、狂信的な人々よりは一層巧妙に且精緻に思惟し論争した。

然しながら勿論他の點から考察すれば、埃及並に當時一般に流布せる哲學は基督教に對して有害なる學派であつた。といふのは爾後殆んど二千年の永きに亘つて論争、激論、紛擾、迫害、全土の擾亂を惹き起し、而して基督教一般にそれとは全く縁のない詭辯的形態を與へたのは、すべて懸つて、人がそれに於いて希臘的織細を以つて精微な區別を立てたかの目慣れないプラトンの理念に在つたからである。吾々の心の中に存するロゴス、即ち健全なる理性が今なほ戰慄するところの異端と暴力活動はこのロゴスといふ語から生じて來たのである。唯この希臘語に於いてのみ是等多くの論争が引き續いて行はれ得たのである。而して是等の論争は永遠に希臘語に限局さるべきものであつて、斷じて普遍的のあらゆる言語の教授法式にせらるべきものではないのである。また是等の論争のうちには人間の知識を増加せしめ、悟性に新しい力を與へ、人間の意志に高貴なる動機を賦與するが如

き如何なる真理も、如何なる認識も存在してゐない。寧ろ人はアリアン人、ホテイニア人、マケドニア人、ネストリウス教徒、エウテイケス教徒、基督單性論者、三位一體論者、基督單位論者其他に對して加へられた基督教徒のあらゆる駁論を基督教若しくは吾々の理性に些少の損害をも與へずに直ちに粉碎することが出来る。人が基督教の原典をば再び原始的な純粹性を以つて考察し、而してそれらの公平にして素直な解釋をなし得んがためには、是非共是等一切の論争及び其等の結果たる無数の朝廷會議や群盜會議の亂暴なる教令を度外視し、且忘却せねばならなかつた。否、更に是等は屢々多くの恐るべき或は是等のために迫害された魂を妨げ且苦しめるのである。此等の宗派のあらゆる思辨上のがらくた、かのレルナ沼の蛇或は極く小部分でも再び生長し而して時ならず分離し死を致す處の蛆虫の鏈環にも等しい。永い間かくの如き無益にして人間に害になる織物は幾世紀かの歴史のうちに滿ち充ちてゐる。而して碧血の流はその上を漲り流れた。無数の人々時には最も尊敬すべき人々も無知朦昧を極むる愚漢によつて財寶や名譽を、友、住所並に安穩を、健康及び生命を、奪はれてしまつた。正直なる野蠻人、ブルグンド人、ゴート人、ロンバルド人、フランク人及びサクソン人も徹底なる正教信者たるアリアン人、ボゴミル人、カタアル人、アルビゲンズ人、ヴルデンズ人の味方となり、また敵となり、熱心なる異教徒の眞面目さを以つてこの殺人運動に参加し而して眞の教會の闘士は純粹の洗禮式のために戰士として有意義にも劍を執つて立つたのである。恐らく文學の領域には此の基督教の言葉と劍の練習の歴史程荒蕪の原野はあるまいと思ふ。而してかゝる練習は人間の悟りからはその特有の思考力を、基督教の原典からはその透徹せる見解を市民

制度からはその根本原理と規準とを奪つてしまつたので、結局吾々は他の野蠻人やサラセン人が亂暴にも闖入して人間理性の恥辱をば破壊し去つた事を彼等に感謝せねばならぬことに立ち至つた。かやうな論争の動機、アタナシウス、キリル、テオヒル、コンスタンチン及びイレイネーをば、吾々に、その眞正なる形態に於いて示してくれた總ての人々に感謝すべきである。何故かといふと人が基督教に於いて教父やその會議の名を奴隸の如き畏怖の念を以つて呼ぶ間は、人はその經典をも、尙又彼自らの悟性をも支配するものではないからである。

基督教の道德論も埃及や其他希臘帝國の諸々の地方に於いても何等優れた地盤を見出さなかつた。そは恐るべき濫用によつて其處にツエノビイテンや僧侶の老なる軍隊をば作るに至つた。彼等はテベエド沙漠に於ける法悦の状態だけに決して満足せず傭兵として屢々諸國に侵入し、僧正の選舉や長老會議を妨害し、而して聖靈を強制して俗靈の欲するが如き要求を行はしめたのである。私はかの沈思冥想する姉妹たる孤獨を尊敬する。社會の立法家者たる彼女は屢また多忙なる人生の經驗を化して根本原理となしその熱情を變じて營養液となすのである。他人の束縛や迫害に倦怠を感じ、己れ自ら中に休息と天國とを見出す所に人に慰安を與へるかの孤獨は同情に値する。確に原始基督教徒の多くのものは上述せるが如き種類の孤獨な人々であつた。而も彼等は老なる軍國主義的帝國の壓政や都市の暴虐から驅りたてられて荒野の中へ放逐されたが、彼等は其處で温和な風土の恩恵に浴して何不足なく生活した。けれども活動的な生活を厭ひ默想と懺悔とを尊重し、幻想を以つて身を養ひ、而して情熱を鎮める代りに、最も兇暴なる感情たる我儘な、測り知るべからざる傲慢を助長するかの傲然たる利己的な

隠遁の如きは吾々の益々輕蔑するところのものである。悲しい哉、基督教は人が唯少數者の爲にのみあるべき筈の彼の教則を化して普遍的法則となし或は天國に入るの條件に高め、而してまた基督をば沙漠の中に求めて以來といふものは之に對する眩惑的遁辭となつた。天は地上の市民たることを輕蔑し而してそれと共に我人類の最も價値ある天恵、即ち理性、道義、才能、親の愛、友の愛、夫婦の愛、及び小供の愛等を放棄してしまつた人間に依つて此處に發見さるべきであつた。人が聖書を誤解せる所からこの怠惰な默想的獨身生活に對して時折り無分別にも與へた大仰なる讚辭はけしからぬ。情熱的雄辯を以つて青年の心に深く銘せしめ、かくして長年の間、人間の悟性を驅逐し、また之を麻痺せしめた誤れる印象は呪はしきものである。教父達の典籍のうちには、純粹なる道徳がかくも少く且時折りは最良なるものが最悪なるものと混じ、金が塵埃と混じてゐるといふのは何處から來てゐるのであるか。この時代に而もあのやうに多數の希臘の著述家を意の儘に驅使することが出來た最も卓越せる人物に於いてすら文の結構や叙述を差置いて單に道徳や作品を一貫せる精神について言つて見ても、ソクラテス學派の一冊の著書にも比肩せらるべき程の書籍が見當らないといふのは何處に基因するのであらうか。教父達の選拔せる格言すらも、もし之を希臘人の道徳と比較するならば、非常に誇張されたものであり、且僧侶らしきものであるといふのは如何なる原因に共くのであらうか。人間の頭は地上に生活せず、天空の中を逍遙ふことを教へるこの新哲學によつて發狂せしめられた。而してこれ程の大病は他に有り得ないが故に、もし人間が教義、尊嚴、制度によつて導かれ、而して道徳の眞純なる源泉が、これによつて幾世紀かの長い間混濁せしめられ

たとすれば、これは確かに慨歎すべき弊害である。

最後に基督教が高められ、而して帝王の旌旗に依つて羅馬帝國の最高の宗教として今なほ地上のあらゆる名前を風靡せる名稱が與へられた時、突然其處に人生の如何なる問題にも殆ど最早正統なる見物が残存せぬ程に、稀有の國家問題と教會問題とは奇妙に混淆せしめた不純なるものが明瞭となつた。人は寛容とを説いたが長年の間苦んだ人々自身は峻嚴なるものとなつた。國家に對する義務が人間の神に對する純粹の關係と混同されたがために、半猶太的僧侶宗教は知らぬ間にビザンチン基督教的帝國の基礎となるに至つた。さればその結果として犯罪と刑罰、義務と權利、否最後に、帝國憲法の各段階の眞の關係が不法にも失はれてしまはねばならなかつた。宗教的階級は國家に導入せられたが、之は羅馬人の場合とは異り、直接に國家のために協力したのである。この階級は僧侶階級及び乞食階級となつた。而してこの階級のために、凡百の命令が發せられたのであるが、その命令は、他の階級の煩累となり、且自家撞着を爲し、而も、依然國家の形式の存するがためには十度も改變せられねばならなかつた。吾々は、かの兩頭の怪物を、密かに偉大ではあるが而も弱なコンスタンチンの罪に歸する。此の怪物は、世俗的權力や宗教的權力の名のもとに己れ及び其他の民族を翻弄し、壓迫した。而して二千年後の今日、なほ宗教や統制が何が爲に人類のうちに存在してゐるのであるかといふ思想に關しては、何等圓滿なる一致を見ることが出來ないのである。吾々は、掟に於けるかの敬虔なる皇帝の專恣、及びそれと共に、やがて最も恐るべき專制主義とならねばならなかつたかの基督教徒たる王侯の非帝王的温順の罪を彼の責に歸するので

ある。従つてかの厭ふべきビザンチンの歴史に於ける悪徳と暴虐、最も賤しき基督教的皇帝への欲得づくの追従、宗教的問題と世俗的問題、異端と正教、野蠻人と羅馬人、將軍と宦官、婦女子と僧侶、教長と皇帝とを混淆せしめたかの悲惨なる混乱も等しく彼に歸せられるのである。國家は原理を失ひ、動搖してゐる舟は槳と舵とを失つた。權力を握ることが出来た人は、他人が其の地位を奪ふまで其の柄を執つた。汝等古の羅馬人、セクストス、カトオ、キケロ、ブルトス、チトス及びアントニネよ、汝等その創業から没落に至るまでのコンスタンチノブルの朝廷たる此の新しき羅馬に對して何と云つたであらうか。

従つて、この基督教的帝國の支配する羅馬に發生することが出来た雄辯も亦、かの古代の希臘人や羅馬人の雄辯とは決して比較することは出来なかつた。この新しい羅馬に於いて雄辯を振ふものは、勿論宗教家、即ち教長、僧正及び僧侶である。然しながら彼等は何人に向つて、且如何なることを語つたのであるか。而して彼等の最も優秀なる雄辯は如何なる効果を得ることが出来たか、又得ねばならなかつたか。彼等は愚かな、腐敗せる、放縱な群集に、神の國、及び當時已に孤立的生活をなし、而かもこれらの群集に斷じて屬せざる道徳家の洗煉された格言を説明してやらねばならなかつた。説教家が朝廷の破廉恥な所業、異端、僧正、僧侶、及び修道僧の陰謀に、或は劇場、競技、娯樂及び婦人の服裝等の下品なる豪奢に言及した場合には、かくの如き群集に對して更に大いに喜ばれた。汝黄金の口たるクリソストムスよ、私は汝の溢るる許りの雄辯家としての才能が一層よい時代に現はれなかつたことを汝のためにどんなに悲しむ、汝は、汝が最も得意の日を送つたあの孤獨を出でたのである

が輝かしき首都に於ける生活は汝には更に陰暗となつたのだ。汝の牧師としての熱心はその牧師領域から踏み迷ひ出たのである。汝は宮中の陰謀や僧侶の陰謀の暴風の爲に倒れ、而して放逐され、また許され、而も結局不幸の中に死ななければならなかつた。多くの潔白なる人々はかくの如き逸樂を事とせる宮廷に於いては皆かやうな憂目にあつた。而して最も悲しむべきことは彼等の熱心が常に失敗を免れなかつたことである。何となれば傳染病に取りまかれつゝ穢れた空氣の中に生活してゐる人は假令腫物に罹らぬよう警戒しても、蒼白の顔と病的な四肢とを得るが如く、こゝに於いても亦この兩階級には餘りに多くの危険と誘惑とがあつたから、普通の用心を以つてしては到底之から遁れることは出来なかつた。將軍や皇帝として、或は僧正、教長及び宮臣として、この硫黄様の陰暗なる天空に於いて散在せる星晨の如く燦然たる光を發つてゐる少數者の名は之れによつて更に大いなる榮譽を荷ふものである。然し彼等の容姿すら雲霧に依つて吾々から隠くされてしまふのである。

最後に、もし吾々がこの最初にして最大なる基督教帝國によつて傳播された學問、道徳、及び藝術の趣味を考察するならば、吾々は之を憐れな、變的な虚飾に過ぎぬものであるといふことが出来やう。テオドシウスの時代に羅馬の元老院に於いて勝利の女神の面前で、ジュピタアと基督とが羅馬帝國の所有權を争ひ、而してジュピタアが敗訴となつて以來、古代の老大な趣味の記念碑、神々の寺院、及び圓柱は、世界到る處に於いて漸次若しくは強制的に没落するに至つた。或る國土が基督教化すればする程、古代の鬼神信仰の遺物は益々熱心に廢棄せられてしまつた。基督教々會の目的と起原とは古代の偶像崇拜の寺院の建設をば禁じた。かくして裁判所、集會

所、バジリカがその模範となつた。而して、コンスタンチン時代のその最古の建物に於いても、確に高尚なる質素が著しく認められる、これは、一部は異教徒の遺物から運び集められたものであり、一部は、最大なる記念碑の眞只中に建設せられたからであるが、しかしこの質素すらも已に基督教のものである。此處彼處から掠奪せるこの圓柱は何の趣味もなく無難作に組み立てられ、而してコンスタンチノオブルに於ける基督教の藝術の驚異たるかの壯麗比類なきセント・ソフィヤの教會は蠻的裝飾を施されてゐる。古代の財寶が如何に多くこのパベルに積集されやうとも、希臘の藝術又は希臘の詩歌は所詮此處に榮えることは出来なかつた。人はその皇子として生れた奴隸が親しく書いてゐるやうに、十世紀に於てすら尙戦時や平時に於いて、家庭に於いてまた神事に於いて王の附物であつたその堂々たる威儀に對して驚異の眼をみはり、而してこの種の帝國は思つたよりは早く没落しなかつたといふことを怪むのである。この責は單に基督教の弊害にのみ歸する譯には行かない。何故かといふに、ビザンツは抑々の始めから華美淫佚なる乞食國家として建立されたのである。かやうな國を以つてしては、壓迫、争闘、危険の中に育まれ遂に世界の首都となつた羅馬は生れはしなかつた。この新しき都は羅馬とその諸地方とを犠牲にして建設せられ、而して直ぐに、僞善と安逸、稱號及び阿諛の下に帝王の寛仁と恩恵、即ち帝國の眞髓を喰つてゐた賤民共を以て充された。この新しき都は三大陸の中央に位して、氣候風物共に最も優れたる逸樂の中心地に横つてゐた。かの數多の奢侈逸樂の物品は、亞細亞、波斯、印度、及び埃及から輸入されたが、それには自國內で消費したり、又西北地方へも供給された。その港はあらゆる國民の船舶で充たされてゐた。而して亞

刺比亞人が希臘帝國から埃及や亞細亞を奪取せる後に於いてすら、世界の通商貿易は古代の逸樂品を供給するが爲に黒海及び裏海を越えて行はれた。アレキサンドリア、スミルナ、アンティオケ、その資本、都市及び藝術を有し港灣曲浦に富める希臘、無数の島嶼を有する地中海、就中希臘國民の輕快なる性格、是等一切が基督的皇帝の居所をば惡徳と愚鈍の會合所となすに與つて力があつたのである。而して嘗て古代希臘に最も役に立つたものは、今や彼にとつて最も危険なものとなつたのである。

然しながらそれだからと言つて、吾々は、希臘帝國がかゝる性質を具備し、かゝる位置を占むるところから世界に與へた利益をば些少なりともこの帝國から奪はうとは思はない。希臘帝國は頗る脆弱なるものではあつたが、兎も角永い間野蠻人を防ぐ堤となつてゐた。是等の野蠻人の多くはこの帝國と隣接してゐるところから、又は使役や商業に依つてその粗野な性質を脱却し、而して道徳や藝術に對する趣味を獲得した。譬へば、ゴット王國の英明並びなき君主テオドリクはコンスタンチノオブルで教育を受けた、而して彼が伊太利のために行つた善事はまた東方帝國の御蔭でなければならぬ。コンスタンチノオブルは多くの野蠻民族に文化の種子と文字と基督教とを與へた。かくしてウルヒラス僧正は黒海沿岸のゴット族のために希臘語の字母を改造し、新約聖書をその國語に翻譯した。露西亞人、ブルガリア人、及び其他のスラブ民族は、西方の同胞がフランク人やサクソン人から獲たよりも遙かに穩和なる手段に依つて、文字、基督教及び道徳をコンスタンチノオブルから獲たのである。ユスチニアスの命令によつて行はれたる羅馬法の編纂は如何に缺點あり、如何に支離滅裂であらうとも、また如何に濫

用されたにしても、而かも依然として古代の真正なる羅馬精神の不滅の記念碑であり、活動的な悟性の論理であり、且更に優秀なる一切の立法を検討する規範である。希臘語や希臘文學が此の帝國に於いては悪用されたにせよ、兎に角それが、西歐のコンスタンチノオブルの逃亡者の手からは等のものを受け取ることが出来るまで保存されてゐたといふことは、全文化世界にとつて幸恵である。中世紀の巡禮や十字軍が、聖堂に至る途上コンスタンチノオブルを見出したといふことは、西歐に取つて少くとも遠方から別の時代を準備するものであつた。といふのは、彼等はこのコンスタンチノオブルから幾多の欺瞞的行爲の代償として、少くとも豪華、文化及び生活法に關する新しき印象を彼等の洞窟、彼等の城廓、彼等の修道院に持ち歸つて來たのである。ヴェネチア人やゼヌア人は、彼等の富を主としてこの帝國の没落の結果獲得したのではあるが、その老成なる商業は之をアレキサンドリアやコンスタチノオブルで學んだのである。而して其處から幾多の必需品をば歐羅巴に輸入したのである。養蠶はコンスタンチノオブルを通して波斯から我が歐洲に傳來したのである。法王は羅馬の御蔭を蒙ること頗る多大にして、法王に對する均衡としての歐羅巴は東方帝國の御蔭を蒙ること頗る多大である。

この傲慢、祐富にして且豪華の極を盡せるバベルは遂に没落した。それはあらゆる榮光と財寶と共に、かの野蠻なる征服者の襲撃する儘に委せた。バベルは餘程前からその領土を保護することが出来なかつた、既に五世紀には全希臘國土はアラリックの掠奪するところとなつた。絶えず野蠻人が東、西、南、北から押し寄せて益々近づいて來た。而して更に兇暴なる野蠻人が屢々群をなして市中を猛り狂ふた。寺院は荒され、塑像や圖書館は

焼かれた。此の帝國はその忠誠無比の従僕に對して彼等の眼を刺り、耳や鼻を削ぎ、或は生き埋めにするより外には何等の報酬をも與へなかつたからして、到る處に於いて賣國行爲や裏切が行はれた。蓋しこのすべて基督教的正教を以つて装された王座を支配してゐたものは、残酷と逸樂、阿諛と卑賤極まる傲慢不遜、陰謀と不忠實とであつたのである。徐々として死の道を歩むその歴史は、皇帝の誇りと富とを有し、且つ學問や藝術上に於いては、あらゆる豪華を極めてゐたにも拘らず、宦官、僧侶及び婦人政治のすべてに對して恐ろしく警戒となる所の例證である。此處にかのバベルの廢頽が横はつてゐる。地上に於いて最も聰明なる民族たる希臘人は、最も輕蔑すべき民族となつた。譎詐的で、無智蒙昧で、迷信深く、憐れにも僧侶や修道僧の奴隸となり、古代の希臘精神の能力を欲如せる民族となつた。かくして、最初の華美壯麗を極めた國家基督教は、終焉を告げた。かくの如きものは、再び出現せざらんことを祈る。

四 羅匈諸國に於ける基督教の發達

(一) 羅馬は世界の首都であつた。羅馬から基督教徒の默許若くは壓迫に對する命令が發せられた。其故既に蚤くから此の權力の威望の中心點に働きかけてその意向を動かすといふことが、必然的に基督教全體の重要な活動でなければならなかつた。

被征服民族のすべての宗教に對する羅馬人の寛容は少しの議論も許さない所である。もしこの寛容と羅馬統治の制度の全状態が當時ありしが如きものでなかつたならば、基督教はかくも急速にまたかくも普遍的に傳播されはしなかつたであらう。基督教は人々の輕蔑的となり、而して迷信の謔とまでなつてゐた遠方の一民族の間に起つた。ところが羅馬に於いては悪い、愚かな、無力な皇帝が支配してゐたからして、この國家には全體を概観して統括する力が缺如してゐた。永らくの間基督教徒は唯羅馬並にその全領土に多数住んでゐた猶太人の名の下に包含されてゐた。恐らく追放された基督教徒を羅馬人に始めて知らしめたものは猶太人其の物の嫌忌の念であつたらう。従つて、羅馬人の考へ方では基督教徒は祖先の宗教の背教者として無神論者か然らざれば秘密會合を爲すがために、他の秘密信仰を有する者と等しく、迷信と兇行とを以つて汚染された埃及人と見做されてゐたのである。彼等はネロに依つて始めて愚かなる殺人放火犯の罪を宣告せられた不逞團であると思はれた。彼等がかくの如き極端なる誤解を受けたるがために人々によつて示された同情は、不正當にも苦められてゐる奴隸に示された憐憫の情に過ぎなかつたやうである。それ故彼等の教義は何等深くも研究されなかつた。而かも最等の教義は他のすべてのものが羅馬帝國に於いて傳播することが出来たと同じやうに自由に傳播したのである。

彼等の禮拜や信仰の原理が一層明かになつた時、次ぎのやうな事はたゞ政治的宗教にのみ慣れてゐた羅馬人には特に不愉快に思はれた。即ちこの憐れなる人々が該國家の神々をば惡魔的鬼神であると罵詈訾し而して帝國の保護者に對して拂へる信仰をば平氣で惡魔の養成所であると言つたといふこと之である。また彼等が自己の名譽と

もなるべき崇敬の念をば皇帝の彫像に對して捧ぐるを拒否し、而して祖國の義務や禮拜をも全然行はなかつたといふことがいたく羅馬人の機嫌を損じたのである。従つて彼等は當然祖國の敵と考へられ、他の人々から嫌厭され憎惡された。皇帝が考を廻らし、新しい風評が彼等を和らけ或は彼等を怒らせて後、基督教徒に有利な或は不利益な命令が發布された。此の命令は總督の意向に従ひ或は彼等自身の振舞に從つて、多少の程度の差こそあれあらゆる地方に施行せられたのである。それにも拘らず、後世に至つて、例へば、サクソン人、アルビ宗徒、ワルドス信奉者、佛國新教徒、プロシヤ人及びリヴ人に對して加へられたやうな迫害は決して彼等に對して行はれなかつた。此の種の宗教戦争は羅馬人の考へ方の中には存在してゐなかつた。其故基督教迫害の最初の三世紀は基督教信仰の殉教者の勝利に輝く時代であつた。

道德の廉潔と人格の天真とによつて死に至るまでも彼等を守るといふ確信に對する忠誠の念程高貴なるものは決してあり得ない。従つて基督教徒は彼等が思慮深き善良なる人間としてかくの如き清廉潔白や確乎不拔の信念を實證せる處に於いては、これによつて、奇蹟的才能や奇蹟の物語に依るよりも更に多数の歸依者を獲ることが出来たのである。彼等の迫害者の多くのものは何故基督教徒は危險に身を曝らして迫害されるに至るのであるか、その理由を解し得なかつた時ですら、彼等基督教徒の勇氣に驚嘆したのである。兎も角人間は唯心の奥底から眞になさうと欲することのみを成就するのである。而して多数の人々が生死を度外視して斷乎として保持する所のものは容易に壓迫されないものである。彼等の熱心は燃え、彼等の實例は、光りを發し得ざる時と雖も物を暖め

るのである。かくして教會が異常に擴張しつゝ幾千年の永い間持續し得たこの建物の深奥なる根柢は、實にその信者の確乎不拔なる信念のお蔭であつた。穩和なる道德や寛容なる原理は、恰も穀を有せざる液汁が溶けるやうに最初からすべてのものを溶解せしめたのであろう。

然しながら個々の場合に於いては實に人間は何がために争ひ、何が爲に生命を捨てるのであるか、といふことが問題になつてくる。若しそれが彼の内的確信のために、その報酬が墓の上にまで及ぶところの眞理と忠實との結合のためであるならば、即ち、人が自ら體驗し、而して吾々に打明けられた其の眞理は吾々なくしては没落してしまふであらうと云ふ、缺くべからざる重大なる歴史を證明するためであるならば、さう云ふ處に於いては、殉教者は英雄の如く從容として死につき、彼はその確信に依つて苦痛や苛責に會ひつゝも神氣の爽やかなるを覚え、而して彼の眼前には天國が開かれるのである。かくしてかの基督教の最初の事件の目撃者は彼等が已むを得ざる場合に遭遇せることを知つた時には死を以つてその眞理を證明することが出来たであらう。彼等が之を拒絶することはやがて、自ら經驗せる歴史の拒絶となるであらう。されば誠實なる人は必要なる場合には之を拒否するよりも、寧ろその犠牲となるのである。然しかくの如き眞の意味の信者や殉教者をば、唯原始基督教が有し得たに止まるのであつて、これ非常に多くはなかつたのである。而して吾々は彼等の最後や生活については知る所多からざるか、然らずば知るところがないのである。

その後幾百年を経、幾百里を隔てて見證し、基督教の歴史を唯噂として、傳統として、又は書かれた報告と

して受け入れた證人の見るところは之とその趣きを異にしてゐた。是等は證據になる證人として認められる譯には行かない。といふのは、唯他人の證據か然らざれば寧ろこれに對する彼等の信仰を血を以て捺印したに止まるからである。扱てこれは猶太以外のあらゆる基督教改宗者の場合でも同様であつたからして吾人はまさしくこの最も隔絶せる地方、即ち羅匈諸邦に於いてこれらの證人の血の證明の上に、従つて彼等が遙以前から持つてはいたが而かも檢覈することが出来なかつたところの傳統の上に、かくも非常に多くのものが打ち建てられたといふことを怪まざるを得ない。かの東洋に於いて起草された經典が第一世紀の末葉に隔絶した地に傳來せる後ですら誰一人として之をその原語で理會したものはなく、その教師の證明を頼りに翻譯の引用を以つて満足せねばならなかつた。而して東洋の教師達はその長老會議に於いてすら經典に據るよりも寧ろ以前の教父達の總括的見解に據つて決定したからして、西洋の教師達は一般にこの經典に對しては如何に關係が薄かつたことであらう。従つて人の生死の的となつた傳統と信仰とはやがて基督教の最も優れた有力なる議論となつた。民衆が益々貧しくなり、益々隔絶し而して益々無智蒙昧となればなる程、益々彼等の僧正や教師に依つて與へられたかのやうな傳統及び殉死者の信仰が、教會に證明せられ、謂はゞ言葉通りに取られねばならなかつた。

而かも基督教の起原に於いては、これとは別箇の傳播の方法は考へられない。何となれば基督教は歴史の上に建設され、而して歴史は物語、傳統、信仰を要求するからである。歴史は口から口へと傳達され、遂に書物に纂述せられ、かくして確乎不動の傳統となり、而して今や始めて多くの人々によつて検討せられ、或は多くの傳統

と比較せられるに至る。然し見證人は最早大概は生存してゐない。それでもし彼等が傳説上、彼等がよつて植付けられた證明をば死を以て確證するならば結構なことである。此處に人間の信仰は落付くのである。

かくして最初の基督教の祭壇は斷然墳墓の上に建てられた。基督教徒は塋域に集合した。祭壇は此の塋窟そのものの中に設置された、而して此の祭壇の上で、彼等は聖餐を喫し、基督教の信條を告白し、而して埋葬せられてゐる者のやうに其の信條に忠誠ならむことを誓つた。最初の教會は墓上に建立されたが、殉教者の屍は此の建立された祭壇の下に埋葬せられ、遂に唯その遺骨を以つてのみ祭壇は神聖にされるに至つた。嘗て事の根源、基督教信者組合の起原及び證印であつたものが様々な祭式や典儀に移つて行つた。信條告白の象徴とせられてゐる洗禮は信條告白者の墓上に於いて行はれたが、後には遂にその塋域の上に洗禮教會堂が建てられたが、信仰ありし者は洗禮的信條告白を獲て死んだといふことを示すために、洗禮教會堂に埋葬せられるに至つた。或るものは他のものから發生して來た。而して西洋の基督教會の典儀の殆んどすべての様式と形態とはこの信條告白と墳墓神事とに由來したのである。

この墳墓の上で行はれた忠誠と從順のこの結合に於いては、確に多くの人を感激せしむるものが存在してゐた。プリニウスが言つてゐるやうに基督教徒が早曉參集して神としての彼等の基督のために讚美歌を歌ひ、道徳を純化し、道徳的義務を遂行するために、彼等自身をば誓約と結合するやうに聖餐とも結合したならば、彼等の同胞の靜寂なる墳墓は死に至るまで動かざる信仰を雄辯に物語る象徴とならねばならなかつた、否、彼等の主にして教

師たるものがまた殉教者として始めて達した、かの復活に對する信仰式とならねばならなかつた。彼等にとつてはこの世の生活は儂なきものでありその生活の終結の引續としての死は榮光に輝き且快適なるものであり、來世の生活は現世の生活よりも一層確乎たるものであると思はれたに違ひなかつた。而して此の種の確信は確に原始基督教聖典の精神に由來するものである。が然しかゝる施設によつてやがて殉教に對する愛慕の念が喚起せられざるを得なかつた。而して人は儂なきこの世の生活に倦き果てて、基督の英雄花冠としての血の洗禮及び火の洗禮に徒らなる熱心を以つて向つて行つたのである。また死人の遺骨に、時の經過するにつれて殆んど神的名譽が與へられ、而して此の遺骨は贖罪、治療其他の奇蹟のために迷信的に盛んに濫用せられざるを得なかつた。最後に此の基督教の英雄の群がやがて全祭壇の天井を占領し、而して彼等の屍が教會の中室へ崇めて運び込まれたやうに、彼等の靈も亦人間の他のあらゆる善行者をその席から放逐してしまつたと云ふことに殆んごならざるを得なかつた。がこれと共に『新しい基督教神話』が生れた。如何なる神話であつたか。それは吾々が祭壇の上で見たり、聖徒物語で讀んだりするところのものであつたのである。

(二) 基督教に於いてはすべてのことは信條告白に、而もこの信條告白は一個の象徴に、而してこの象徴は傳統に基づけるが故に、監督及び秩序を維持せんがためには奇蹟を行ふべき才能か、若しくは嚴格なる『教會の訓練』が、殊に必要であつた。この施設と共に『僧正の尊嚴』なるものが生じて來た。而して信仰の統一、即ち多くの集團の聯合を保持するがために、『長老會議』並に『寺院會議』が必要となつた。もし人が其等に於いて一致

しないか或はそれらが他の地方で反對に遭遇するかすると、人は『仲裁者』として尊敬せられてゐる僧正に援助を仰ぐのであつた。而して遂に、これらの多くの使徒の貴族の間に一人の『首席貴族』が擡頭せざるを得なかつた。然らばかゝる貴族は如何なるものであらねばならなかつたか。何人がかゝる貴族となることが出来たか。エルサレム僧正は余りに遠隔の地に住し、且余りに貧乏であつた。彼の都は甚だしく災難に苦んでゐた。彼の教區は他の同じく使徒である僧正達によつて余りに狭められ過ぎた。彼は謂はゞ世界統治圏外のゴルガタに座を占めてゐたのである。アンテイオケ、アレキサンドリア、羅馬、最後にまたコンスタンチノオブルの僧正が現はれて來た。而して羅馬の僧正が是等一切のもの、従つてその熱烈なる競争者たるコンスタンチノオブルの僧正をも支配するに至つたのは諸般の情勢の然らしむるところであつた。即ちコンスタンチノオブルの僧正は、己れをば意の儘に黜陟することが出来る皇帝の王座に余りに接近してゐた、それ故彼は華やかな宮中の僧正になることが出来たに過ぎなかつた。之に反して皇帝が羅馬を捨てて歐羅巴の國境に居を移してからは、幾百千の事情が相俟つてこの古代世界の首都の教會の地位をば優越ならしめたのである。すべての民族は幾百年來、羅馬の名を崇拜することに慣れてゐた、而して羅馬に於いてかの七つの小丘の上に世界統治の久遠の精神が漂うてゐると思はれた。教會の記録に據れば此處で幾多の殉教者が證をなし、而して最大の使徒、ペトウルス及びパウルスはその冠を此處で受けたのである。かくして此の古代使徒教會に於ける『ペトウルスの監督職』に關する傳説は既に早く創られ、而して彼の後繼者達の確乎たる證據はやがて證明されるに至つた。扱て此の使徒には特に天國に入るの鍵が傳授

され、而して彼の信條告白の上には教會の堅牢なる石造建築が建設されたるが故に、羅馬がアンテイオケ又はエルサレムの代理を務め、而して勢力ある基督教の母教會と見做さるべきものとなつたといふことは如何にも自然なことであつた。羅馬の僧正は夙に他の一層博學多識にして有力なる僧正に優つて、長老會議に於いて名譽を享有し又議長ともなつた。彼は論争が生じた場合には平和なる仲裁者となり、而して永い間議員の勝手な氣晴しのやうな發言であつたものはやがて權利の要求と思はれ彼の忠告は決定的のものと考へられるに至つた。世界的羅馬帝國の中心點に存する羅馬の位置は、その僧正に對して、西方、南方及び北方に向つて忠告や編制の十分な餘地を與へた。殊に希臘皇帝の玉座はあまりに隔つて居り、またあまりに微力なるがために、羅馬の僧正を著しく壓迫することは不可能であつた。羅馬帝國の山紫水明なる地方、幾多の島嶼を包括する伊太利、阿弗利加、西班牙、ガリア及び基督教が夙に傳來してゐた獨逸の一部は、忠告や補助を要する庭園として、この周圍に存在してゐた。之より更に北方に位する地域には、野蠻人が住んでゐたが、その荒廢せる土地は間もなく開拓せられて、基督教の豊饒なる土地とならねばならなかつた。茲に於いては、到る處、左程太した競争もないので、かの古代の監督職が澤山配置されてゐた東方諸邦に於けるよりも、多くのことが實現され、且獲得せられた。此の東方地方は、投機、反抗、及び確執に由りて、やがて又皇帝の放逸なる專制に由り、最後に亞刺比亞回教徒及びそれより更に野蠻なる民族の侵入によつて、滅茶苦茶に荒され、殆んご不毛の地と化してしまつた。基督教にとつては、歐羅巴人の野蠻的な卒直は、上品な希臘人の不忠實乃至亞細亞人の狂信よりも、遙かに有利であつた。従つ

て、彼處に於いて亢奮し、又時折りは人間悟性の發疹チブスの如き状態を呈せる基督教は、西歐の更に温暖なる氣候に於いては、その規則と處方とによつて冷却された。而して、もし是等の配慮がなかつたならば、此處に於いても亦、すべてのものは、結局徒らな努力を愚かにも行ふてゐる東洋に於いて既に吾々が認めたとやうな、無力な状態に沈んでしまつたであらう。

實際羅馬の僧正は、基督教的世界に對して非常な貢獻をなした。彼は、その都、羅馬の名を絶えず念頭に置き、單に改宗によつて世界を征服せるのみならず、法律、道德及び儀式に依つて、古代羅馬がなせるよりも、遙に長く、遙に強く、而して遙に密接に、世界を支配したのである。羅馬法王は、決して博學多識の榮養を獲ようとは思はなかつた。彼はこの特權を他のものに、譬へばアレキサンドリアの僧正に、ミランの僧正に、ビツボネスの僧正にすら、また誰にでも欲する人に譲つたのである。然し、最も博學なる僧正を服従せしめ、而して哲學によらずして政策、傳統、教會の掟及び典儀によつて、世界を統制すること、これが彼の仕事であり、而してさうあらねばならなかつた。といふのは、彼自身は、唯典儀と傳統とに基づいてゐたからである。かくして羅馬から西洋の教會の無数の儀式が産れたのである。是等は皆、祭典、僧侶の分類、聖餐式の制度、死者に對する祈禱と供物、若しくは祭壇、聖餐用の杯、燈明、斷食、聖母の禮拜、僧侶及び修道僧の獨身階級、聖者の祈禱、偶像の崇拜行列、法會、鐘、聖者の列に加へること、靈化、聖餅の崇拜等に關したものである。即ち、是等の典儀は、一部分は古代の起原から、また屢々東洋の狂信的の考へ方から生じ、一部分は西洋の、主として羅馬の地方的状態に、謂は

與へられたもので、唯次第々に併合されて大教會の儀禮となつたに過ぎないのである。今やかくの如き武器が世界を征服するに至つた。これが天國や地上の王國を開くべき鍵であつた。一向劍を恐れなかつた民族も是等の前には身を屈した。彼等には、羅馬の典儀が、かの東洋的な思辯よりも一層適してゐた。勿論この教會法は、古代羅馬の政策とは、恐るべき對立をなしてゐる。けれども是等の教會法は、結局、重い王節を滑らかな僧正の杖に、異教國民の野蠻な因襲を、益々穩健なる基督教的法律に化するに役立つたのである。羅馬は異常の努力を費して最高權を獲得せる後、不本意ながら、西洋の事件に對して、彼の同僚が東方や西方に於いて行ふことが出来たよりも、一層干渉配慮を加へねばならなかつた。而しても基督教そのものの傳播が効績であるとすれば、彼はかかる方面に於いて偉勳を立てたことになる。英國、獨逸の大部分、北方の王國、波蘭、匈牙利は、かの聖使や設備によつて基督教的王國となつた。然り、歐羅巴が、フン人、サラセン人、韃靼人、土耳古人、蒙古人によつて恐らく永遠に蠶食せられなかつたといふことも亦、一部分は彼の業績である。もしすべての基督教的帝國、王國、公爵、伯爵及び勳爵士の子孫が、依つて以つて彼等が嘗て諸民族を統治することが出来た効績を誇示すべきであるとすれば、羅馬に於ける三重の王冠を戴ける大達賴喇嘛は、戰を好まざる僧侶の兩肩に擔はれて、彼等すべてを神聖なる十字架を以つて祝福し、而して「余なかりせば、汝等は現在の如きものたるを得なかつたであらう。」と言ふことが出来やう。また、古代の救はれたのも彼の働きであり、而して羅馬は、この救れた財寶の閑寂なる寺院として存するに値打してゐる。

(二)『かくして教會は、西洋に於いては、東洋に於けると同様に、地方的に形成せられた。』西洋に於いては東洋に於けると同じやうに、多くの阿弗利加の教が生じた羅匈語的埃及、基督教的阿弗利加であつた。満足に關してテロトリアンに、罪人の懺悔に關してシブリアンに、人間の恩恵と意志に關してアウグスチンに、夫々用ひられた方強い表現は、教會の組織の中に流れ込んだ。而して羅馬の僧正は、假令命令を執行するに當つて、常に中庸を得た道を歩んでゐたにせよ、而も教義といふ茫漠たる大洋に於いて、教會といふ船の舵をとるには學問或は權威といふものを缺いてゐた。例へば博學多識にして而も敬虔なるベラギウスは、アウクスチンやヒロニムスによつて餘りに酷しく敵對された。アウガスチンは、唯より洗煉された麻尼教を以つて、麻尼教徒に對して戰を挑み、而して此の非凡なる人物に於いては屢々爭論と想像力の火であつたものが、烈しき焔となつて教會の組織に移つて行つた。さあれ汝等大論爭者よ、汝等が信仰の統一と稱せるものに對しては意を安んぜよ。汝等の困難なる事業は完成した。而して汝等の影響は恐らく基督教の時代の全系列を通じて既にあまりに長く、且あまりに強く及び過ぎた。

尙私は、西洋に輸入せられた唯一の、而して最初の教團、ベネディクト派に就いて些か考慮を拂はねばならぬ。東洋の修道院の僧侶生活を西洋の風土に適合せしめようとするあらゆる試みは、歐羅巴には幸にもその風土に適應せぬところから、遂にその穩健なる教團は羅馬の擁護のもとに、カシノ山に根據を定めるに至つた。この教團は斷食―且著しい東洋に於けるよりも一層營養分を取り、また立派な衣を纏ふた。この場合、本來俗人に依つて俗人の爲めに作られたかの規則は活動を始めたのである。而して此の教團は之に依つて歐羅巴の幾多の未開な、荒涼たる地方に、特に有用なるものとなつた。ベネディクト派の人にはあらゆる國家に於いてどんなに多くの風光絶佳の地方を所有してゐた事であらう。而して彼等は該地方の一部分を開拓したのである。彼等はまた、修道僧の努力が成就することの出来たあらゆる種類の文學に貢獻した。各個人は一文庫を著はした。而してあらゆる信者は特に中世の多數の著作を註釋し、且出版することに依つて文學上の荒野を耕作し、開發することを義務としたのである。若しベネディクト教團が存在しなかつたならば、古代の典籍の大部分は恐らく吾々の手に渡らなかつたことであらう。而して吾々が聖僧、僧正、大僧正及び法王について言ふならば、此の教團から生じた多數のものは、彼等が整理したものと相俟つて俗に一つの圖書館を構成することが出来たであらう。ベネディクト派のグレゴリ大法王は、僅に一人で、世俗的並に宗教的統治者の十人分よりも遙に大いなることを成就した。吾々は、人間の心情に多大の影響を及ぼした古代教會音樂の保存についても亦、教團に負ふところのものである。

吾々は最早これだけで止めて置かう。而して基督教が野蠻人に對して及ぼせる影響を論述するに當つては、吾は先づ、野蠻人そのものを拉し來つて、彼等が相次いで大舉羅馬帝國に侵入し、其處に王國を建設し、主として羅馬から堅信式を施された模様をば、少しく考察しなければならぬ。而も之から生じ得る一切は人類史の進んで述べねばならぬ事柄である。

第十八卷

恰も大洪水、即ち強大なる山津浪の集りが、一層深い谷の中に、永らくの間堰止められ、或は弱い堤防を以つて、此處彼處に導かれ、遂に止め度なく之れを破つて低き平野に汎濫するやうに、即ち大波に次ぐに大波、大河に次ぐに大河を以つてし、遂にこれらすべては大洋となり、大洋はやがて徐ろに他の一切のものを壓して、到る處に荒廢の痕跡を印するが、而も結局は、亦、豊饒なる沃野を残して行くやうに、北方民族の羅馬帝國の諸々の地方への有名な移住は、相續いて行はれた。長らくの間、かの國民達は、相戦ひ、抑壓せられ、同盟國民又は借家民族として、此處彼處に導かれ、屢々欺かれ又悪用されたのである、が遂に彼等は、自から權利を主張し、財産を要求し、或は之を掠奪し、而して或る程度迄では互に排斥し合ふたのである。其故、吾人は、是等の各民族が已れに指定せられ、或は征服せる國土に對して有せる法律上の要求に關しては、左程注意を拂はなくとも差支ない。反之、吾々はたゞ、各民族が爲した該國土の實用及びそれに由つて生じた歐羅巴の新制度に注意を拂ひさへすれば足るのである。到る處に各民族の新しき混淆が行はれた。この新しき混淆は、人類に對して、如何なる萌芽と果實とを生じたであらうか。

一 西ゴート、スエエヴ、アラン、及びヴンダルの諸王國

西ゴート人は、東方帝國及び西方帝國の不實なる二人の國務大臣、ルウフィンとヒステリコによつて、東方帝國に於いてはトラキア及び希臘、西方帝國に於いては伊太利を掠奪し、以つて帝國を擴張するやうに命ぜられた。アラアリツクは、羅馬を攻圍した。而してホノリウスは、その約束を守らなかつたので、再び討征せられ、而して結局掠奪された。西ゴート王は、戦利品を積んでシシリア海峽まで退却し、而して伊太利の穀倉たる阿弗利加を征服せんと企てたが、然し戦勝の道はその死によつて妨げられた。即ちこの勇敢なる掠奪者は、多數の財寶と共に江流の中に葬られた。此の帝王は、彼の後繼者、アドルフ(アタウルフ)を伊太利から遠ざける爲に、ガリアやイスパニアに闖入せるヴンダル、アラン及びスエエヴの討伐を彼に命じた。此處に於いて彼は、再び欺かれたが、遂にテオドシウス皇帝の息女ブラキディアと結婚して、最初の西ゴート王國の基礎を確立したのである。ナルボンヌ、トロサ、ボルドオの如き立派な都市が之に屬してゐた。而して、彼の後繼者の中には、ガリアに於けるその領域を擴めたものもあつた。然し茲に於いては、フランク人は、彼等に餘りに接近してゐ、またこの國の舊教の僧正達はアリアン・ゴート人に向つて敵對的行動をなし、且不實であつたからして、彼等は更に有效にその武器をばビレネイ山の彼方に揮ひ、而してアラン、スエエヴ及びヴンダルとの永き戦の後に、又、この

地方から羅馬人を全く驅逐してしまつた後に、彼等は遂に南部ガリア及び亞弗利加海岸の一部と共に、スペイン及びポルトガルの風光明媚なる半島を所有するに至つた。

百七十八年間に亘るスペインのヌエヴ王國に關しては、吾々は何等語るべきものがない。それは、掠奪に次ぐに掠奪、不幸に次ぐに不幸を以つて、痕跡もなく没落し、而してスペイン・ゴート王國の中に陥没してしまつた。西ゴート人は、この地方に達するや否や、非常に有名になつた。未だ王宮がトロサにあつた時分、既にガリアに於いて、エリツクは、法律書を編纂せしめ、而して彼の後繼者アラアリツクは、羅馬の法律學者の法律や著述から、法典を編纂した、これは既にユスチニアン法典に先だつて、云はゞ最初の粗野な法律全書となつたのである。それは多くの獨逸民族、即ちブルグンド人、アングロ人、フランク人及びロンゴバルド人の間には、羅馬法の拔粹と考へられ、而してそこにテオドシウスの法典の一部を保存してくれたのである。尤もゴート人自身は、寧ろ彼等特有の法律を遵奉するを以つて甘んじてゐた。が彼等は、ピレネイの彼方、羅馬帝國の中で、多くの都市を含み、完全なる制度を有し又盛んに商業を營める、繁榮なる地方であつた地域にやつて來た。羅馬に於いて、すべてのものが既に豪奢のもとに没落せる時、スペイン人は、此の世界の首府に幾多の著名なる人物を與へた、而して彼等の著述は、當時に於いてすら、スペイン人の或る性格をば、明かに現はしてゐるものであつて、他方に於いて、基督教も亦、早くよりスペインに傳來した。而してこの國民の精神は、他國との交渉を絶つて、孤立せる地方に住せる多くの國民が、稀らしく混淆せるが爲めに、異常なること及び冒險的なることに、非常に適して

ゐたからして、奇談、贈罪、禁慾、隱遁、正教、殉教及び神聖なる聖域に對する尊崇の念が、彼等一般の趣味となつた。其故、スペインは、その位置からしても、間もなく眞の基督教の宮居となつたのである。こゝから人は、羅馬に、ヒツポに、アレキサンドリアに、或はエルサレムに住する僧正達に質問したり、又は教へることが出來た。人は、外國の異教徒をさへも探し求めて、パレスチナの邊までも追求して行つた。従つて、スペイン人は、ずつと以前から、異教徒の公然の敵であつた、而してプリスチリアニス人、麻尼教徒、アリアン人、猶太人、バラギユウス人、ネストリウス教徒等に對しては、かたくその正教を指示して之を守らしめた。この使徒の傳へた半島に住する僧正達の古代の教政は、その類々たる、而して嚴格なる會議によつて、羅馬の王位そのものに模範を與へたのである。而して、もしフランク王國が、この管長を後に、世俗的權力を以つて幫助したならば、スペインは、既に早くこの管長を宗教的權力を以つて援助したものと云へるであらう。古代文化及び確立された教會組織の行はれる、かやうな王國に、誠實なるアリアン人なるゴート人がやがて來たが、彼等はカトリック教の僧正の壓制には、到底反抗することが出來なかつた。勿論彼等は永らくの間、項を屈しなかつた。彼等は親切に迫害とを以つて武装し、而して、兩教會の結合をなさんと努めた。然し、それは無益の業であつた。何となれば有力なるロオマ・カトリック教會は、決して譲歩せず、而して結局、トレドオに於ける幾多の長老會議に於いて、アリアン人は、恰もスペイン王がこの宗派には決して歸依しなかつたかの如く、手ひどく罰せられたのである。ゴオトの勢力の最後たるレオヴィギルド王が崩御し、而してその王子レツカルドが、カトリック教會の意に従へ

る後は、此の王國の法律も、當然、僧正の會議に於いて定められ、僧正や僧侶の性格を帯びるに至つた。其他、獨逸人の非常に嫌忌せる體罰が、彼等の間に行はれ始めた。然し、宗教裁判所の精神は、異端審問所といふ名が知られるすつと以前に、既に彼等の心の中に現はれてゐたのである。

従つて、ゴウト人の制度は、此の山紫水明の國土に於いては、不完全にして強制的のものとなつたが、もし彼等がこれに對する理解と勇氣とを有つて居り、而して氣候にも教會にも屈しなかつたならば、彼等は幾多の山嶽や海洋を以つて圍まれてゐるこの土地に於いて、悠久、壯嚴なる王國を建設することが出来たであらう。嘗て、アラアリツク治世に、希臘や伊太利を貫流してゐたかの激流は、今やその力を失つてしまつた。羅馬を破壊して、その廢墟の上に、世界の首府たる、新しきゴウトの都を建設することを誓つたアドルフの精神は、彼が王國の邊陲の地に貶謫され、而して、ブラツイデアと共に、新床に就いた時から、既に拘束せられてしまつた。侵略は徐に進んで行つた。何となれば獨逸人は、様々な地方を、幾多の獨逸民族から、血を以つて購はねばならなかつたからである。而して、教會、僧正達及び王國の偉人達との永年に亘る確執の後、かくも激しき兩極端が最後に一致融合せる時、スペインに牢乎たるゴウト王國の基礎が、確立されるに至つた。從來、該國民の王者は、國民によつて選舉されたのであるが、今や僧正達が、此の國王の尊嚴を世襲的のものとなし、且國王の人格を神聖なるものとなすに至つたのである。従つて、教會の集會は、帝國議會となつた。其故、僧正の階級は、王國に於いて最高のものとなつた。宮廷の貴族は、豪奢に耽り、柔弱に流れて、その忠誠を失ひ、嘗ては土地の分配を受け

た勇敢なる軍人は、その豊饒なる領地のうちに勇氣を失ひ、國王はその宗教に基礎を置いてゐる優越なる地位を誇つて道義と徳とを失ふに至つた。かくして、この王國は、全く無防禦の儘四方八方の敵に對して、曝されるに至つた。されど、敵が阿弗利加から襲來せる時、次ぎのやうな非常な驚愕に打たれた、即ち熱狂せる亞刺比亞人は、僅か一勝戦の後、二年を出でずして、スペインの最大にして、風光絶佳の地を領有するに至つた。幾多の僧正は忠誠を失ひ、豪奢飽くなき數多の貴族は服従し、或は逃亡し、或は滅亡した。國內制度を有せずして、個人の勇氣やゴウト人の熱心なる奉公の念に基礎を置くやうな王國は、この勇氣とこの忠誠の念とが亡びてしまふや否や、直ちに防禦力を失つてしまふものである。それにも拘らず、戒律や禮拜は、スペインの長老會議から幾多學ぶべきものがあらう。國家制度に就いては、トレドは、昔から墳墓であり、且永い間、依然としてさうであつた。

蓋しかの撃破せられ、瞞着されたゴウト人の勇敢なる殘黨が、山間から再び現はれ出で、而して七八百年間三千七百回の戦争によつて、二年と一回の勝戦が、彼等から奪つた所のものを、再び獲ることの殆んど出来なかつた時に、特異な混淆をなせる基督教徒の精神とゴウト人の精神とは今や唯墓場からの幽霊として現れ出づることが出来たに過ぎなかつた。古代基督教徒は、異端邪宗のサラセン人に依つて、かくも永い間神聖を冒瀆されてゐた國土を、再び征服するに至つた。彼等が新に神聖にすることが出来たあらゆる教會は、彼等にとつては、高價なる戦利品となつた。かくして僧正の職及び修道院は、數限りなく復活され、建設され、基督教徒の名譽及び騎

士の名譽の王冠として宣誓された、而してこの征服は、徐ろに繼續したので、時代が神聖にされ、而して祈願されねばならなかつた。この爲めに、克服は大部分、騎士氣質及び法王權の最も盛んなる時代にあらはれた。國王は、マウル人から奪取せる若干の王國をば、領地として法王に提供し、かくして其等の國々に、古代教會の實子として支配することが出来たのである。到る處に於いて、僧正達は、國王の共治者となり、而して國王と共に該王國を征服した基督教の騎士は、國王と共に新しい基督教王國を分配せる位グランドセイクリエツム高き貴族となつた。嘗て猶太人やアリアン人が、かの古代正教徒に依つて放逐せられた如く、今や猶太人やマウル人は、近代の正教徒に依つて驅逐せられてしまつた。其故、嘗て幾多の民族の下で繁榮を極めた風光明媚なる國土は、漸次見る影もなき荒蕪の地となつてしまつた。今なほ、此の古代及び近代ゴオトの基督教國家組織の記念柱が、スペインの到る處に存在してゐる。此の兩者の間には、時代が非常に經過してゐるけれども、而も建物の設計や礎には少しも變りがない。成程、カトリックの國王は、最早、トレドオに於ける僧正の位と並列して王座につきはしない、而して、かの神聖なる宗教審判所は、その設立以來、盲目的な祈念の機械といふよりも、寧ろ專制政治の機械であつた。然し、反之、この熱狂的信仰のロマンティックな邊陲の國土に於いては、恒久的な騎士の城砦が無數に建設せられたるが故に、コムボステルに在る聖ヤコブの骨は、羅馬の聖ペトルスの骨よりも、確かに、安らかに眠つてゐるやうに思はれる。五十有餘人の大僧正や僧正、及び三千以上の、大部分は裕福なる修道院は、火、劍、欺瞞及び探偵犬を以つて、その正しい信仰を世界の他の二大陸に宣傳した王國の犠牲を享樂するのである。僅か西班牙

領の亞米利加だけに於いてすら、是と殆んど同數の大僧正や僧正が、あらゆる教會の豪華のうちに位についてゐる。學藝の方面に於いては、スペイン人は、直ちに羅馬人の後を襲うて基督教的詩人、論争者及び宗制裁判官となるに至つた。之に續いて、聖書の註釋者や物語作者が非常に多數輩出したので、彼等の喜劇や滑稽劇、舞踏や闘牛さへも、基督教と混淆せざるを得ぬ破目に立ち至つたのである。僧正のゴオト的法律は、羅馬宗制法律と密接に組み合はされた。而してあらゆる國民の聰明は、これに關して非常に細心に磨きすまされたるが故に、茲に於いても亦、果實の代りに棘を有する荒野が横はつてゐる。最後に、他の獨逸民族に於けるが如く、ゴオト人の間に於いても、最初は、單に個人的職務に過ぎなかつたものが、後には、王國の貴顯として、五百年の間、國家そのものの心髓を喰ひ荒した所の高位高官に就いては、一部分唯、陰影の存するだけであるにしても、——といふのは、王權は、こゝに於いては、法王と和解し、彼處に於いては、高位高官の人々の橋段を屈服し而してその權力を制御することが出来たからである——而も此の種の脈ふべき原理が、一度國家の基礎に横はり、而して國民の性格そのものに織込まれてゐるが故に、此の美しき土地は、恐らく尙永い間、更に溫和なる歐羅巴的阿弗利加、ゴオチツク・ムウアリツシュ・基督教國として殘存するであらう。

西ゴオト人に依つて西班牙から放逐せられたヴァンダル族は、アラン族の殘餘と共に阿弗利加に渡つた。こゝに於いて、彼等は、最初の基督教的盜賊の巢窟を作つた、而して後にはモハメット教徒の如何なる後繼者よりも、更に富裕にして且有力なるものとなつた。古今未曾有の剛毅活達なる野蠻人の一人なる、彼等の王、ガイゼリヒ

は、あまり多からぬ軍隊を以つて、數年ならずして、ジブラルタル海峡から、リビア沙漠に至るまでの風光明媚なる阿弗利加海岸一帯を掠取し、而して海軍を創設し、之を以つて、このスミティアの獅子は、五十年間に亘つて、ヘルクレスの圓柱を越えて、希臘及びイリリアからガリシアに至るまでの地中海一帯の沿岸を劫掠し、パレアル島、サルデニア及びシシリイの一部を占領し、而して、世界の首都、羅馬をば僅か十日間に、而も徐ろに且何一つ餘すところなく、すつかり掠奪してしまつた。其故彼は、ユビタアの黄金の屋根、古代の猶太寺院の分捕品及び藝術品や貴重品の無数の財寶（是等のうちの一部は海中に没した）を携へ、彼には如何に處分してよいか分らないやうな、多數の捕虜や掠奪した皇后及びその二人の王女を伴うて、幸運にも、恙なくカルタゴに到着した。彼は年上の皇女オイドキシアを自分の息子と結婚させ、その妹は、その母たる皇后と共に送り還へした。而して、更に彼は、伶俐にして且勇敢なる巨人であつたからして、亞細亞のレナ川からライン川の先きまでも征服し、之に税を課し、而して之を震駭せしめた、大アツチラの女にして黨類たるの資格を具備してゐた。臣下に對しては公平に、風習を守ること嚴に、よく節約し、中庸を得、唯、疑念を有し或は憤怒せる場合に於いてのみ残酷となり、而して、常に活動し、常に細心の注意を怠らずして、ガイゼリヒは、幸福にその長い生涯を送つた、而してガイゼリヒは其の二人の子息に西洋の財寶が蒐められてゐる此の繁榮なる王國を残して行つた。彼の最後の意思は、王國の全運命を決定した。是に依ると彼の全家門の最年長者が、常にその國を支配すべき筈であつた。といふのは、此の最年長者は、最大の經驗を以つて支配することが出来るからである。而して、正しくこれに依

つて、永遠の不和と謀殺の林檎が彼の子孫の間に投ぜられることになつた。すべての幼年者は、皆悉く最年長者にならうと欲したので、爾來その家族の最年長者は、一人も、その生を確かに保つたものとはなかつた。かくして兄弟及び従兄弟は、互に殺戮し合ふに至つた。各人は、皆他のものを恐れ、或は嫉んだ。而して、創業者の精神は、彼の子孫の何人にも存してゐなかつたからして、ヴァンタル人は阿弗利加地方のあらゆる豪奢と懶惰の中に没落してしまつた。古代の勇氣が支持されてゐる筈の永遠の陣營は、遊戯や歡樂の場所となり、而して、ガイゼリヒ自身が統治したと同じ位の時を経て、全王國は一回の會戰に依つて没落してしまつた。第八世、ゲリメル王は、掠奪した財寶と共に、野蠻な戰勝の誇に酔うてゐるコンスタンチノオブルに送られ、而して、田舎人として死んだ。彼の捕へられた部下は、波斯の國境の城塞に移され、國民の殘餘は消え失せてしまつた。かくして此の不思議な王國は、金銀に充ちてゐる妖魔の城の如く消え失せてしまつた。而も此の國の貨幣は、今なほ阿弗利加地方に發見されるのである。ガイゼリヒが、羅馬から奪取して來た猶太の寺院の什器は、コンスタンチノオブルに、三度、戰勝の中に運ばれた。是等の什器は、エルサレムに、贈物として基督教會に返還された。而して、後には、恐らく亞刺比亞の箴言を印された貨幣として、世界到る處に擴まつたらしい。かくして、靈場は移り、王國は消え失せ、民族や時代は移り變る。もし阿弗利加に於いて、このヴァンダル王國が維持され得たならば、それは重大なる事であつたらう。何となれば、歐羅巴、亞細亞及び阿弗利加の歴史の大部分、否、歐羅巴文化の全過程は、これによつて大なる變化を受けたであらうから。今や、この民族の思出は、あるスペインの地方の名のうちに辛ふじて知らるゝに過ぎない。

二 東ゴット及びロンゴルバルド王國

吾々は是等の諸國を考察する前に、先づ歐羅巴の天空に現はれたる流星、神の刑杖、世界の恐怖、「匈奴族の國王アツチラ」に注意の眼を向けなければならぬ。匈奴の韃靼への撤退は、全獨逸民族をして、羅馬帝國を終末に導いた最後の大運動を起さしめた原動力であつたことは、既に吾々の考察せるところである。歐羅巴に於ける匈奴の勢力は、アツチラの下に於いて、最も恐るべき強大なものとなつた。東洋の幾多の帝王は、彼に歸服してゐた。彼は、これらの帝王を、その従僕の奴隸として蔑視し、年々二千百磅の黄金を納入せしめ、而も自分は、亞麻の着物を纏うてゐた。ゴット族、ゲビイド族、アラン族、ヘルウル族、アカチイル族、チュウリング族、及びスラブ族は、皆彼に仕へた。彼は、北部パノニアの沙漠の中央に位する、一寒村の木造家屋に住んでゐた。彼の仲間や訪客は、黄金の器から飲むのに、彼は、木製の杯から飲み、身には一片の黄金の裝飾も、寶石も着けなかつた。否、彼の劍や乗馬の手綱にすら、斷じてかゝるものを付けなかつた。公平にして且正直であり、臣下に對しては殊更に親切であつた。然し、敵に對しては決して信を置かず、傲慢なる羅馬人に對しては、傲慢なる態度を以つて向つた。彼は恐らくヴァンダル族の王、ガイゼリヒに刺激されたのであらう。全國民の五十萬乃至七十萬の軍隊を率ゐて突然出發し、進路を西方にとり、獨逸を通過し、ライン川を越え、ガリアの中部に至るまでも劫掠し

た。すべてのものは、彼の前に戰慄し、遂に全西方民族からアツチラ討伐軍が編成せられ、彼に向つて進出するに至つた。アツチラは、戰術に巧みなるところから、自由に通過の出来るカタラウの平野に撤退した。羅馬人、ゴット人、ラテン人、アルモリク人、ブレオン人、ブルグンド人、ザクセン人、アラン人及びフランク人は、皆共に彼に對抗した。彼自ら戰鬥命令を下した。戰は慘憺たるものであつて、西ゴット國王が生き残り數多の軍人は戰死した。而して、瑣細なことが當日の運命を決定した。アツチラは、追撃を受けることなく、恙なくライン川を越えて退却し、翌年、元氣を恢復して、アルプスを越えた。といふのは、彼は伊太利に侵入し、アツキリアを蹂躪し、マイランドを掠奪し、パウイアを焼拂ひ、而して一舉全羅馬帝國を亡ぼさんがために、羅馬に突進したのである。是に於いて羅馬の僧正レオは、彼のもとを訪ひ、羅馬の救助を歎願した。また僧正は、マンツアの陣營にまで歩を運んで、而して彼に切願して、伊太利をして自由ならしむることが出来た。匈奴の王アツチラは、アルプスを越えて撤退し、而して、正しく、かのガリアに於ける敗北戰の復讐をなさんとする考へを抱いてゐた。然し、これはその死によつて成就しなかつた。かの部下は、聲を限りに悲しみつゝ、彼を葬つた。彼と共に、その恐るべき權勢は沈んでしまつた。彼の王子エラツクは、彼の後を追うて間もなく没し、帝國は四分五裂し、國民の殘餘は、亞細亞に歸り、或は消え失せてしまつた。此のアツチラは、多くの獨逸民族の詩の中に詠はれてゐるエツツエル王であり、その肖像の前で、各國の詩人がその祖先の行爲を詠つた英雄である。同様に彼は、貨幣や繪畫に於いて、角が生えてゐるやうに描かれてゐる怪物である。否、その全民族は、森の靈や妖魔化さ

れてゐる。幸にも、レオは、如何なる軍隊もなすことが出来なかつたことを成し遂げた、而して、歐羅巴をカルミユツク族に服従しないで済むやうにした。蓋しアツチラの軍隊は、教養、生活様式及び風俗習慣に於いて、明かに蒙古人であつたことが看取せられる。

吾々はまたヘルウル王國に就いても、考慮を回らさなければならぬ。といふのは、この王國は、全西歐帝國を終末に導いたものであるからである。ヘルウル人は、他の獨逸民族と共に永らくの間、羅馬の俸給で生活して居つたが、羅馬帝國が漸次窮乏に瀕するに及んで、彼等は最早俸給を支拂はれず、自分から之を支拂つた。伊太利の國土の三分の一は、耕作の地として彼等に與へられた、而して、幸福なる冒險家にして、スキイル、ルウゲル、及びヘルウル人の指導者たるオドアケルは、伊太利の最初の國王となつた。最後の皇帝たるロムルスは、彼の手中に歸したが、此の帝王の若々しさと容姿の美しさとは彼の同情を引いたので、彼は、この皇帝を、年金をつけて、カンパニアのルクルスに送つた。七年にして、オドアケルは、シシリアに至るまでの伊太利を、最大なる國難の下に於いてではあつたが、統配して少なからぬ成績を挙げ、遂に、かゝる美しき土地の掠奪は、東ゴット王、テオデリックの野心を刺激するに至つた。この年若き英雄は、コンスタンチノオブルの宮廷から伊太利王國の贈與を受け、オドアケルを征服した。而して、オドアケルは屈從的條約を締結しようとして欲しなかつたので、殺されてしまつた。かくして、東ゴット族の支配が始まつた。

此の王國の建設者にして、諸國物語では、ベルンのデイトリツヒといふ名で知られてゐるテオデリックは、教養のある、仁愛の念の篤い人物であつた。彼は、コンスタンチノオブルに於いて、人質として養育せられ、東方帝國に少なからず奉仕した。其處で彼は、既に貴族や執政官の威嚴を具備した。而して彼の名譽のために、彼の彫像は、宮殿の前に建てられた。然しながら、伊太利は、その一層美しき名譽、公正にして平和なる統制の地となつた。マアク・アントニウスの時代以來、羅馬的世界のこの部分は、彼が伊太利、イリリクウム、獨逸及びガリアの一部分を支配した時程、否、攝政としてスペインをさへ支配して、西ゴット人とフランク人との間に、永らく統配權を揮つてゐた時程、賢明に且立派に支配されたことはなかつたのである。彼は、羅馬に於いて勝利を博せるにも拘らず、帝王の稱號を敢て僭することせず、フラウイウスの名を以つて満足してゐた。然し彼は、帝王としてこのあらゆる權力を揮ひ、羅馬國民を養ひ、此の都市には再び昔日の如き競技を行はしむるに至つた、而して彼は、アリウス教徒であつたので、アリウス教の用務に於いてすら、羅馬の僧正をば己れの使節としてコンスタンチノオブルに派遣した。彼が統御してゐた間は、野蠻人の間にも平和があつた。何となれば、西ゴット王國、フランク王國、ヴァンダル王國、チュウリンゲン王國は、同盟或は血縁によつて、彼と結合してゐたからである。彼は、農業や諸々の技藝を助成し且あらゆる民族に彼の法典や法律が残存するが故に、伊太利は彼の下に於いて復活するに至つた。彼は、古代の記念物を保存し、且尊敬し、たとへ全くは羅馬趣味に於いてではなかつたにせ

よ、壯麗なる建物を建立したのであるが、恐らくゴチック建築の名聲も是れから高まつたものであらう。而して彼の宮廷は、すべての野蠻人に尊ばれるに至つた。諸々の科學の淡い微光すら、彼の下から立ちのほつた。彼の國家の元勳、カツシオドル、ボエチウス、シムマコスの名は、今尙多大の尊敬を拂はれてゐる。尤もボエチウスとシムマコスの兩人は、羅馬の自由を復興せしめんと思つたといふ嫌疑を受けて、哀れなる最後を遂げた。恐らくかゝる疑は、年老いたる國王には恕すべきであつたらう。といふのは、彼は、唯、若き孫を後任として認めただのみであつて、永續的の確固たる基礎を得る爲には、己れの王國に何が缺けてゐるかをよく知つてゐたからである。多くのものは此のゴット王國が存立して、カロー大帝の代りに、テオデリックが宗教的並に世俗的事柄に於ける歐羅巴の制度を、規定することが出来ればよいと念つたのであつた。

然しながら、此の偉大なる國王は、三十四年間の賢明にして、活動的な統制の後、没してしまつた。やがてあらゆる獨逸民族の政治組織に存してゐた弊害が、爆發した。年若きアデルリックの高貴なる後見人アマラスヴィンデは、彼を教養するに當つて、王國の貴族達によつて妨害された。而して、彼女が彼の死後、彼女に死を以つて酬つた憎むべきテオダートをば、王國の輔弼の任に登用した時、革命の旗はゴット人の間に樹てられた。多數の貴族は、統治權を得ようと欲した。貪欲なるユスチニアンは、正しく身をその鬭争の渦中に投じ、而して彼の將軍、ベリザアルは伊太利を救援するといふ口實を以つて、海を渡つた。内部の不統一なゴット人は、閉塞され、欺かれた。彼等の王城ラヴェンナは、詭計に依つて巧みに奪取せられ、而してバリガアルはテオドリックの

寶物や捕虜とせる國王を引き具して家に歸つた、やがて戦は再び開始された。ゴット人の勇敢なる國王、トオチラスは、羅馬を再度征服したが、然し之を赦してたゞ城壁を壊ち、以つて之を開放せしむるに止めた。第二世テオドリックは、このトオチラスであつた。彼は、その統治の十一年の間、不實なるギリシヤを手ひきくやつつけた。彼が戰闘に加はつて斃れ、彼の帽子が血塗れの衣服と共に、虚榮の心強きユスチニアンの下下に置かれた後に、最後の七千人に至るまで勇敢に維持したけれども、結局、ゴット王國は滅亡してしまつた。此の戦の歴史は、非常に人心を憤激せしむるものである。といふのは、之は、一面に於いては、大膽なる公正と、他面に於いては、希臘の欺瞞、貪欲及び伊太利のあらゆる卑賤なる心との争であるからである。其故、結局、宦官、ナルゼスは、テオドリックが伊太利の安寧幸福のために嘗て建設した王國を根絶し、而して伊太利の長い苦痛の種にして、かくも多くの混亂と弊害の根源たる、狡猾にして纖弱なる太守の職を導入するに成功した。茲に於いても、スペインに於けると同様、ゴット王國の宗教や國內の制度は、遺憾ながら、その頽廢の根源となつた。羅馬法王は、アリアン・ゴット人に對して、かくも接近して座を占め、否彼等を己れの君主として認容することは到底堪へられぬことであつた。かくして、コンスタンチノオブルの衝突以來、而もそれ自身危険を伴ふが、あらゆる手段や方法を以つて、彼等の没落が促進された。加之、ゴット人の性格は、未だ伊太利人の性格と同化してゐなかつた。其故、彼等は、異邦人や征服者と見做されたのである。而して、不實なる希臘人が、彼等に向つてやつて來た。而して彼等のために、既に伊太利は、この解放戰爭に際して、言語に絶せる困難を嘗めたのであるが、もし伊太

利の意思に反して、ロンゴバルド人が救援に來なかつたならば、伊太利は、なほ一層困難したことであらう。ゴット人は離散し、而してその殘餘は、アルプスを越えて行つた。

伊太利の上部に、ロンバルデイといふ名がついたのは、ロンゴバルド人のお蔭である。といふのは、伊太利の上部は、遙かに立派なゴット人の名を持つことが出来なかつたからである。ゴット人に對して、ユスチニアンは、ロンゴバルド人をバノニアから招還した、するとロンゴバルド人は、遂に占領せる土地に住居するに至つた。幾多の獨逸國民の間に、嘖々たる名聲を馳せてゐたアルポイン侯は、妻子、家畜及び世帯道具を携帶せる多くの種族から或は軍隊を率ゐてアルプスを越え、ゴット人から奪取せる土地を荒さずして、これに來住したのである。彼はロンバルデイを占領し、而して、マイランドに於いて、彼の部下に依つて戦の楯に乗せられ、伊太利の王と宣言されたが、然し間もなく不歸の客となつた。彼の刺客は、彼の妻、ロオゼムンデに依頼された。彼女は刺客と結婚し、而して逐電せねばならなかつた。ロンゴバルド人に依つて選ばれた王は、性、傲慢にして殘酷であつた。其故、此の國の貴族達は、如何なる王も選舉することなく、彼等の間に王國を分割することに一決した。かくして、三十六人の公爵が生ずるに至つた。而して、是と俱に、伊太利に於ける最初のロンゴバルド・ドイツ制度が確立した。蓋し此の國民が、必要に迫られて、再び國王を選舉するに至つても、なほ、あらゆる有力なる封臣達は、大抵我儘勝手な振舞をするに過ぎなかつた。時折り王は、その選舉すら行ふことが出来ないことがあつた

が、結局、王が臣下を指揮し、使用することが出来るかどうかは、一つに王の不安定なる人格的威嚴に依つて決まつた。かくして、フリアウル、スポレトオ、ベネヴェントの公爵が生じ、やがて是等に次いで他の公爵が生じて來た。といふのは、此の國には、此處では公爵が、彼處では伯爵が夫々暮して行くことの出来るやうな都會が數多存在してゐたからである。然しながら、之がためにロンゴバルド王國は、勢力を失つてしまつた、それ故、もしコンスタンチノオブルが、ユスチニアン、ペリザアル及びナルゼスを有してゐたならば、ゴット王國よりも一層容易に、撲滅されてしまつたであらう。けれども、彼は、その無力の状態に於いてすら、殘存せる太守の職を蹂躪することが出来たのである。然しこの歩武と共に、その没落も亦準備された。伊太利に於いては、唯、僅かに纖弱な、分離統治のみを希求せる羅馬の僧正は、ロンゴバルド人をあまりに近く、且力強きものと見過ごした。即ち、彼ステファヌスは、最初コンスタンチノオブルからは何等の援助をも期待することが出来なかつたので、かの山脈を越え、フランク王國の横領者、ビピンに阿ねるに教會の保護者たる名譽を以つてし、彼をフランク王國の正統なる國王に任命した、而してこの報酬として、尙、征服戦そのものに先つて、五つの都市とロンゴバルド人から受くべき太守の職とを受け取つた。ビピンの子、カロロ大帝は、その父の業を完成し、勝ち誇れる力を以つて、ロンゴバルド王國を壓殺し、而してそれに對する報酬として、羅馬法王によつて、羅馬の貴族に、教會の保護者に、否、遂には、精靈の靈感に依れるが如く、羅馬の皇帝たることを宣言せられ、而して其の宣言が如何なる影響を全歐羅巴に及ぼしたかは、其の結果で分かるであらう。伊太利にとつては、アルプスの彼方へ

トルスのこの堂々たる一網打盡に依り、伊太利には懸けがへのないロンゴバルド王國は没落した。その存続二百年に亘つて、それは、荒廢し、消盡された國土の殖民のために力を用いた。それは、獨逸の公正と秩序によつて、國內一般に安定と幸福を與へた。然るに、各國人は、ロンゴバルドの掟に従つて生活しようと、自己の掟に従つて生活しようと、全く自由であつた。ロンゴバルド人の法律手続きは、簡單にして形式的、且義務的であつた。その法律は、該王國が既に亡んでしまつた後も、尙長く効力を持つてゐた。王國の壓殺者、カロロすら、この法律を通用せしめ、而して唯自分の法律をこれに添加せるに過ぎなかつた。此の法律は、伊太利の多くの地方に於いて、羅馬法と相並んで、なほ引き續いて一般法として用ゐられ、而して、後世、皇帝の命令に基いて、ユスチニアンの法律が用ひられるに至つてすら、多くの尊敬者と多くの註釋者を見出した。

それにも拘らず、幾多の歐羅巴國民が採用せるロンゴバルド人の封建制度は、特に當大陸に不幸なる結果を齎らしたといふことは、決して否定する譯に行かぬ。國家の權力が自己の領地に於いては絶対權を有してゐる幾多の家臣に分割せられ、而して纖弱なる結合によつて、その君主に結び付いてゐるに過ぎないといふことは、羅馬の僧正の愉快に思ふところである。といふのは、『分割して支配せよ』といふ古代の規則に従ふと、あらゆる混亂から利益を得ることが出来るからである。公爵、伯爵及び男爵は煽動されてその君主に反旗を翻し、而して教會は粗野なる臣下や軍人の罪惡を許すことによつて、莫大なる収益を得ることが出来た。封建制度は、貴族に取つては

古い支柱であり、否、官吏に取つては依つて以て世襲財産所有者となり、而して、もし無政府の無力が欲するならば、主權者そのものの上進すべき階段であつた。是等すべては、伊太利にとつて、さまで有害ともならなかつたといつていい。何となれば、この古から文明開化せる國に於いては、都會、藝術、製造工業及び商業は、希臘人、亞細亞人及び亞弗利加人と接近するに當つても、決して全然破壞された譯ではなかつた、而して、尙殘存せる羅馬人の性格は、全く壓殺されてしまつた譯でなかつたからである。尤も、伊太利に於いてすら、封土分割は、筆舌に盡しがたき攪亂の火絨、否、これと同時に、羅馬人時代以來、此の秀麗なる國土が、決して確乎たる永續的狀態に達することの出来なかつた原因を成してゐた。吾々は、その他の諸國に於いては、ロンゴバルドの形式的封建制度の更に有害なる適用を見るのである。而して此の法律に類似せる萌芽は、あらゆる獨逸民族のうちに存してゐるのである。ロンバルデイが彼の所有に歸し、而して相續分としてその息子達に與へたカロロ大帝以來、不幸にも羅馬皇帝の稱號も亦獨逸に這入つて來て、而して、一般に記憶せらるゝに至らなかつたこの憐れなる國土は、伊太利と俱に、種々雑多な封建的結合の危うけな聯盟をなして以來、而して皇帝がロンゴバルドの成文律を推稱し、而してユスチニアンの法律に附加せぬ時代には、その基礎をなす制度は、都會の少ない、藝術の盛ならざる幾多の地方には確かに役に立つてゐなかつた。當時の無智と偏見とから、ロンゴバルドの法律は、遂に帝國一般の封建律法として通用するに至つた。されば、この民族は、今尙、本來唯その法律の殘骸から掻き集められた習慣のうちに生活してゐる。

教會の狀態に於いても亦、多くのものは、この制度から移つて行つた。先づロンゴバルド人やゴット人は、アリウス教徒であつたことは事實だ。然し、グレゴリイ大法王が、この民族のミュウズの神テオドリンド女王を、正教教會に引き入れるに成功せる際、新歸依者の信仰の熱心は、やがて美事壯舉となつて現はれた。幾多の王、公、伯及び男は、お互に先を争つて、修道院を建て、而して教會に莫大なる世襲財産を贈るに至つた。羅馬の教會は、シシリイからコツト・アルベンに亘るまでの世襲財産を持つてゐた。蓋し世俗的君主にしてその封土を獲得してゐる以上、宗教界の君主は、未來永劫後繼者の配慮をせねばならないからして、之を持つてゐてはならない理由はあるまいではないか。あらゆる教會は、その世襲財産を以つて、聖者をその守護者となすことが出来た。而して、人は、神の仲介者としてのこの後援者の恩恵を絶えず受けねばならなかつた。その肖像や遺骸、その祭典や祈禱は、奇蹟を生じた。この奇蹟は、更に新しい資を生むだ。其故、一方に於いては聖者達、他方封臣とその妻子等の永續的交互感謝に於いては、何等豫想に反するやうなことはなかつた。封建制度そのものは、ある程度まで、教會に移つて行つた。何とならば、公爵が伯爵より優れてゐるやうに、公爵の側に座を占めてゐる僧正も亦、伯爵の僧正に對して、優越なる地位を得ようとしたのである。従つて世俗的の公爵領は、大僧正の教區に、その支配下にある都會の僧正は、宗教的公爵の副僧正に該當した。宗教界の男爵としての、富裕なる住職達は、その僧正の裁判權から脱却し、而して獨立しようと努めた。かくの如くして、宗教界の帝王となつた、羅馬の僧

正は、喜んでこの獨立を認容し、而して、僞イジドオル(法王の教令集)が、後に、全カトリック教會に對して、公に提出した原則を準備した。多くの祭典、祈禱、供養及び法會は、多數の僧侶を必要とした。野蠻人の趣味なる教會の手に入れる寶物と法衣とは、その寶物保護者を要求し、世襲財産はその長官を要求した。これらすべては、結局、宗教的並に世俗的保護者、即ち、法王と皇帝とに歸するが故に、國家と教會とは、封建制度に於いて互に競争するに至つた。ロンゴバルド王國の没落は法王の誕生となり、而して、法王と共に、歐羅巴の制度全體に新しい形を與ふるに至つた新皇帝の誕生となつた。蓋し、世界は獨り征服に依つて變ぜられるのみならず、更に一層、事象、秩序、法律及び權利の新しい見解に依つて改更せられるものである。

三 アレマン、ブルグンド及びフランク王國

アレマン人は、粗野な一獨逸民族であつて、最初は、羅馬國境の盜賊であり、その城塞や都會の荒廢者であつた。羅馬帝國が滅亡した時に、彼等はガリアの東部を占領し、而して立派な制度を與へることが出来たかも知れない美しき土地を、その古い領土と共に所有するに至つた。然しアレマン人は、さう云ふ制度をその土地に與へなかつた。といふのは、アレマン人は、フランク人の權力によつて壓迫されてしまつたからである。アレマンの國王は戰死し、その國民は降伏して奴隸となり、或は離散してしまつた。遂に彼等は、フランク人の主權の下に

於いて公爵を獲、やがてまた、基督教、最後にまた成文律を獲たのである。是等は今なほ残存し、此の民族の單純にして粗野な性格を示してゐる。最後のメロビンガ王朝のもとに於いて、彼等はその公爵を奪はれ、而してフランク民族の集團の中に没入してしまつた。もしアレマン人が獨逸的瑞西人の祖先であるとすれば、彼等はアルプスの森を二度までも截り透かし、而して徐々に、小家、場所、城堡、塔、教會、修道院及び都會を以て飾つたことを、彼等に感謝せねばならない。そこで吾々は、彼等を改宗せしめたる聖コルンパンやその同僚を忘れる譯には行かない。その同僚の一人たる聖ガアルは、その修道院を建設したことによつて、全歐洲の恩人と稱せられるに至つた。吾々は、此のアイerland僧侶の學院のお蔭を以つて、多くの古典作家を保存することが出来たのである。而して野蠻民族の眞只中に於ける彼の隠棲は、博學の座ではないにしても、而も風俗改良の源泉となり、而して星辰の如く、この暗黒の地方に燦然たる光輝を放つてゐるのであつた。

ブルグンド人は、羅馬人と同盟を締結して以來といふものは、溫良なる民族となつた。彼等は、城塞の地に移り住んだが、さりとて農業、藝術及び手工業を嫌ひはしなかつた。羅馬人が彼等にガリアの一地方を讓渡したので、彼等は、農業を營み葡萄栽培を行ひ、森を伐採して、平和な生活を送つた。而して、もし、北部に於いて、傲慢不遜にして侵掠的なフランク人が、彼等に活動の餘地を與へたならば、彼等は、プロバンスやレマン湖にまでも擴つてゐるこの美しき地に、必ずや繁榮なる王國を建設したことであつたらう。然し、フランク王國にキリ

スト教の信仰を齎らしたかのクロオチルデは、不幸にも、その家の二三の罪惡行爲を罰するが爲めに、その祖國そのものと共に其の家をも亡ぼしたブルグンドの王女であつた。此の王國は辛ふじて百年ばかり繼續したのであるが、その時代のブルグンド人の法律は、教會會議の若干の決議と共に、今尙残存してゐる。然し特に、彼等は、レマン湖沿岸及びガリア地方に於ける土地の開拓によつて、その名は永遠に残存してゐる。彼等は、他の土地が未だ荒涼たる荒野であつた時代に、己に蚤くこの地方を化して、樂國となしたのである。その立法者、グンデバルドは、毀られたゼネヴァを再建し、その城壁は、歐羅巴に對して廣大なる地域よりも更に大なる影響を及ぼした都會を、千年以上も守つてゐた。彼等によつて開拓された地方に於いては、一再ならず、人間の精神は燃え上り、而して、その構想は天空高く舞ひ上つた。フランク人のもとに於いてすら、ブルグンド人はその古い制度を維持してゐた。従つて、カルリング族が滅亡するに及んで、彼等は始めて自ら國王を選んだのであつた。この新しい國家は、二百年以上持續し、而して、自國の獨立を計る諸民族に對して、立派な模範となつた。

今やかくも多數の國家を滅亡せしめた王國、即ちフランク王國に就いて語るべき時が來た。フランク人は再三種々の試みを行つた後、遂に些細な發端から、ガリアにその國家を建設することが出來た。即ち彼等は、先づアレマン人を征服し、次いで西ゴット人を徐ろにスペインまで壓迫し、アルモリカのブリテン人を押へ付け、ブルグンド王國を己れの脚下に屈伏せしめ、而してチュウリングデンの國家を殘酷にも蹂躪したのである。亡び行くメ

ルヴィツヒやクロドウィツヒの王家が大膽なる家^{マヨレスドオムス}老を得た時、カアル・マルテルは亞刺比亞人を追ひ、而してフリイズ人を屈伏せしめた。而して、家老が王となるや、直ちにカロロ大帝が立ち、ロンゴバルド王國を蹂躪し、マヨルカ及びミノルカと共に、エゴロに至るまでのスペインを征服し、南部獨逸をバノニエンに、北部獨逸をエルベ河及びアイデル河に至るまで壓迫し、羅馬から皇帝の稱號を己れの國に受け継ぎ、而してその王國の邊境民族たる匈奴及びスラブ人を震慄せしめ、而して之を歸服せしむるに至つた。この王國は、羅馬人の時代以來、嘗てその比を見ぬ程有力な國家であつて、それが興起するに際しては、没落の際と同じやうに、全歐羅巴に對して等しく著しきものがあつた。どうして、フランク王國のみ、ひとり、あらゆるその同時代の人々の間に在つて、かくの如き著しき結果を及ぼすに至つたのであらうか。

(一)「フランク人の國土の位置は、彼等の漂泊する同胞の領土の夫よりも、遙かに確乎たるものである。蓋し、彼等がガリアに移つて行つた時には、既に羅馬帝國が没落してゐたのみならず、また、彼等の以前の最も大膽不敵なる同胞も、或は離散し、或は扶助せられてゐた。彼等は、既に無力なるガリア人に對しては、容易に勝利を得ることが出来た。ガリア人は、幾多不幸によつて疲れ果て、喜んで腕に身を託した、而して羅馬人の殘餘は、影の如く消えてしまつた。クロドウィツヒは、暴力を以つて、その新領土の周圍を切り開き、而して、危険な隣人の生命は彼には少しも神聖ではなかつたからして、彼は間もなく前後に敵を有せざるに至り、而して彼のフランク王國は、島嶼の如く壓服された民族の山嶽、江流、海洋、荒野によつて圍繞されてゐた。アレマン人やチュ

ウリング人が征服された後には、最早漂泊を好む國民は居らなかつた。彼等は、やがてサクソン人やフリイズ人から、恐ろしい方法を以つて、漂泊に對する慾望を奪ふに至つた。幸にも、フランク王國は、羅馬からもコンスタンチノブルからも等しく遠ざかつてゐた。蓋し、フランク人が、伊太利に於いて、その役前を演ぜねばならなかつたとしたならば、恐らく家^{マヨレスドオムス}老の現はれる前に於ける、彼等の國王の邪惡なる道徳、その大官の不誠實王國の粗漏なる制度、すべて是等は、彼等に對して、更に品位ある國民、即ちゴオト人やロンゴバルド人が經驗せるよりも、一層優れた運命を保證しはしなかつた。

(二)「クロドウィツヒは、野蠻人中、正教信仰の最初の國王であつた。この正統なる信仰は、彼にとつて、あらゆる徳よりも遙かに有益であつた。この教會の總領は、これがために聖者の仲間入をしたのである。又會議にも列席したが、この會議は、全西歐基督教國に影響を及ぼしたのである。ガリアや羅馬的獨逸には、數多の僧正がゐた。彼等はライン河やドノオ河の沿岸に、整然たる序列をなして住んでゐた。即ちマインツ、トリイル、ケルン、ベザンソン、ウオルムス、シュバイエル、ストラスブルグ、コンストニツツ、メツツ、ツウル、ヴェダン、トンゲルン、ロルク、トリデント、ブリキゼン、バアゼル、クウル等、古い基督教の座は、異端邪宗の徒に對する外壁として、正教を信奉する國王を利用した。ガリアに於いて、クロドウィツヒが主宰せる最初の長老會議には、三十二人の僧正が出席した、而してその中に、五人の大僧正が居た。これは、緊密なる宗教的國家であつて、之がために大勢力を振ふことが出来たのである。これによつて、ブルグンド人のアリアン王國は、フランク

人に分與せられるに至つた。家^{マヨリスドオムス}老は、彼等の機嫌をとつてゐた。マインツの僧正ボニハアツエウスは、フランク人の僭王に王冠を與へ、而して既にカアル・マルテルの時代には、羅馬の貴族、従つて教會の後見職について論議されるに至つた。而も是等の教會の後見人は、その被後見者に對して、不實にして不親切なることを非難せられる譯には行かぬ。彼等は荒された僧正の都會を再建し、寺領を正當に維持し、僧正を帝國會議に召集した。而して獨逸に於ける教會は、幾多の國民を犠牲にせるフランク國王の恩恵を少なからず蒙つてゐる。ザルツブルグ、ヴュルツブルグ、アイヒシュテット、アウグスブルグ、フライジンゲン、レイゲンスブルグ、パッサウ、オスナブルック、ブレエメン、ハムブルグ、ハルベルシュタット、ミンデン、エルデン、バアデルボオン、ヒルデスハイム、ミュンステルの大僧正及び僧正、フルダ、ヒルシュフェルト、ケンプトン、コルウエイ、エルヴァケン、サンクト・エメラン等の修道院は、彼等に依つて設置されたのである。此等の教界の主人公は、土地や人民と俱に、その座を帝國會議に占めることが出来たことを、彼等に感謝せねばならぬ。佛蘭西國王は、教會の神生兒であり、其の義兄弟なる獨逸皇帝は教會の宗主權を彼から繼承したに過ぎないのである。

(三)「かゝる事情であるから、獨逸民族の最初の國家制度は、伊太利、西班牙若しくは獨逸本國に於けるよりもガリアに於いて、更に著しき發展を遂げたのである。四隣を統配する君主政體への抑々の第一歩は、クロオドウィツヒに依つて行はれ、而して、その模範は隱約の間に國家の規則となつたのである。王國が屢々分裂したに拘らず、即ち宮廷に於ける悪行や高位高官の士の放縱なる振舞によつて、王國の内政が紊亂したに拘らず、而も

王國は滅亡しなかつた。その所以は、國家を君主政體として支持せんとすることが、教會の責任であつたからである。大膽にして賢明なる王冠保護官吏は、無力な國王の代理をなし、征服は續いて行はれ、而して、全羅馬基督教にとつて必要缺くべからざる國家を没落せしむるよりも、寧ろクロオドウィツヒの一族を没落せしむる方がよいと思はれた。何となれば、獨逸民族の制度は、到る處に於いて、本來、唯、國王及び王冠保護官吏の人格のみ基き、而して、亞刺比亞人と異教徒との間に介在するこの王國に於いては、特に、この人格に基かねばならなかつたからして、すべてのものは、この邊陲王國に於いては、幸にも、ヘリスタアルのビビン家が造築せる堤防を彼等に對して設けんが爲に聯合した。吾々は亞刺比亞人の征服並に北方民族及び東方民族の發展に目標が置かれ、且アルプス山の此方に、少くとも、學問の微光が保持され、而して歐羅巴に於いて遂に、獨逸風の政治組織——これに向つて他の諸民族は、結局自發的若しくは強制的に結合せねばならなかつた——が達成せられたといふことを、彼及び彼の後繼者に感謝せねばならない。カロロ大帝は、是等全歐羅巴のために貢獻せる子孫の頂巔なるが故に、彼の像は吾々に取ては一切のものに代るであらうよ。

カロロ大王は、王冠保護官吏の出身であつた。彼の父は、成りあがりの王に過ぎなかつた。従つて彼は、僅かに父の家庭やその王國の制度の教へる思想を持つことが出来たに過ぎなかつた。彼はその制度の中に教養せられ、而して之を最善のものと考へたからして、之を發達せしめた。蓋し、あらゆる樹木は、その土壤から發育するもの

である。カロロは、フランク人のやうな服装をして歩き、且その心持ちもフランク人であつた。従つて吾々は、彼の民族の制度をよく理解するには、彼の是に對する取り扱ひ方、及び見方に依る外致方はあるまい。彼は王國議會を招集し、而してこれに依つて己れの欲するがままに種々の事を行ひ、國家に對して最も有益なる法律や法令を發布した。然し、王國の贊同を経たことは、勿論である。彼は、彼一流のやり方で王國のあらゆる階級を尊重し、而して、事情の許す限り、征服された國民にも彼等自身の法律を用ゐることを許した。彼は是等一切を打つて一丸となし、而してその一體に潑刺たる生氣を與へるに足るだけの精神を有してゐた。彼は危険なる公爵を廢しそれに代へる官職を有する伯爵を以つてした。而して委員を任命して伯爵や僧正達を出席せしめ、かくして掠奪を事とする暴代官、尊大倨傲なる貴族及び腐敗せる僧侶の専制主義を防止せんがために、あらゆる手段を盡した。彼は王冠の領地の上に坐する帝王でなくして寧ろ全王國に於いて、喜んであらゆる怠惰なる人々を鼓舞して秩序正しき勤勉なるものたらしめんと欲する家長であつた。然しこの場合、特にフランク人の教會精神やその戰爭精神といふやうな、當時の人々の野蠻性が、屢々彼の邪魔をしたことは勿論である。彼は、儂なき人間のよくなし能はぬ程端正に身を保つた。尤も教會や國家の利害が彼を驅つて壓制的な行爲や不正行爲を行はしめた場合は、例外である。彼は職務を執行するに當つて、活動と忠實を愛した、而して、もし彼が再び、此の世に生れ來て、最も生氣なき、名ばかりの制度の人形を眼前に目撃したとすれば、彼は憤激の眼を以つて之を眺めたであらう。けれども運命が支配する。彼の先祖の氏族は、王冠保護官吏の出身であつた。劣悪なる官吏達は彼の死後、彼の

王冠、彼の王國、否、彼の精神及び生涯の全努力を無殘にも蹂躪してしまつた。後世の人々は、彼が出来る限り壓迫し或は改善しようとしたもの、即ち家來、階級及びフランク風の豪華を極めた裝飾の贅的華美を、彼から承け繼いだのである。彼は名望あるものをば官職に就けたが、彼の死後には、官職が程なくまた下らない名望となつてしまつた。

カロロは、征服をもその先祖から承け繼いだのである。蓋し彼の祖先は、フリイズ人、アレマン人、アラビア人及びロンゴバルド人に對して決定的に勝利を得、而して征服する王國をば、隣邦を壓迫することに依つて確立しようとすることは、クロオドウイツヒに依つて殆んど國家の格率となつたので、彼は大なる歩武を以つて、この途を進んで行つたのである。個人的動機が戰爭を惹き起す根據となつた。その戰爭の中、一回は他の原因から起つたものであるが、彼の殆んど五十年に亘る統治の大部分を占めた。このフランク人の戰爭の精神を感ぜるものは、ロンゴバルド人、アラビア人、バビロン人、ウングアル人、スラヴ人、就中サクソン人であつた。彼は此のサクソン人に對して三十三年戰爭の結局に際して、非常に狂暴なる手段を用ゐるに至つた。彼は、自國の、全歐羅巴を通じて、最初の確乎たる君主政體を建設したことに依つて、先づ目的を達成した譯である。何となれば、後年ノルマン人、スラヴ人及びウングアル人がその後繼者に如何なる困難を與へようとも、亦分裂や内的紊亂によつて如何にこの大王國が力を失ひ、四分五裂し、混亂されたにせよ、エルベ河やパノニエンまでの遙かなる地方への韃靼人の民族移動には、或る限界が置かれたからである。嘗てフン人及びアラビア人のそれに類した

彼の建設にかかるフランク王國は、其の越え難き境界石となつた。

カロロは、その宗教に於いても、學問を愛好する點に於いても、亦共にフランク人であつた。クロオドウィツヒ以來、政治的原因から、カトリック教の信仰が、國王には世襲的のものとなつた。而してカロロ家の祖先が勢力を有するやうになつて以來、彼等は益々この點に於いて、王の代理をなすに至つた。といふのは、教會のみが彼等の王位に即くことを援け、而して羅馬の僧正が彼等を信仰的に神聖にしたが爲めであつた。カロロは、十二歳の時父の家で羅馬法王に接見し、而して法王から未來の帝王たるべき塗油式を受けた。永らくの間、獨逸の改宗事業は、フランク主權者の保護のもとに行はれた、而して時折りは彼等の自發的の援助を受けたのである。といふのは、一方に於いては、基督教は、確かに、異教を信奉する野蠻人に對して、最も堅固なる稜堡であつたからである。従つてカロロは、今や北方に於いても、かかる途を歩み続け、而してザクセン人を、結局劍を以つて改宗せしめざるを得なかつた。正教を信奉するフランク人たる彼は、かくして彼が、彼等の間に於いて破毀せる制度に關しては、何とも思はなかつた。彼は、教會の敬神的事業をば、己が帝國の安固を計るために行ひ、而して、法王及び僧正に對して彼の祖先の功績ある懇懇なる事業を行つたのである。特に世界の覇者たる國家が、獨逸に建設された當時の彼の後繼者は、彼の足跡を辿つて行つたのである。かくしてスラヴ人、ウンド人、ポオレン人、プロシヤ人、リヴィア人及びエストニア人は、改宗せしめられたので、この洗禮を受けた民族は、何れも、神聖獨逸帝國に敢て闖入せんとするものはなかつた。それにも拘らず、神聖にして多幸なるカロルス——法王の

諭告は彼を永久にかくよんでゐる——が、彼の宗教や學問のために設立せる設備、その富裕なる僧正の職、教習、本山及び修道院がどうなつたかを見るであらうならば、神聖にして多幸なるカロルスよ、汝は、汝のフランク人の劍と笏とを以つて、其の多くを不機嫌にあしらふであらう。

(四) 最後に、『羅馬の僧正は、これらすべてに捺印し、而して、謂はば、フランク王國に王冠を被らしめた。』といふことは、否定する譯には行かない。彼は、クロオドウィツヒ時代から、フランク人の友であつた。彼はビンのもとに逃れ、而してビンから、贈物として當時征服したロンゴバルドの土地全體の掠奪物を受けた。其後彼は、カロロの下に逃れた。而してカロロは、勝に乗じて、彼を羅馬に復職せしめたので、彼は、その代償としてかの有名なクリスマスの前夜に、新しい贈物、即ち羅馬皇帝の王冠をカロロに與へた。カロロは驚き且恥ぢてゐるやうに見えた。けれども、國民の歡喜に滿ちた稱讃は、彼をして新しい名譽を心地よく受けしむるに至つた。而して、これは、全歐羅巴民族の考へによれば、世界に於ける最高の譽であつたからして、このフランク人が之を受くるに最もふさはしきものであつたのである。西洋の最大の君主たる彼は、佛蘭西、伊太利、獨逸及び西班牙に於ける王であり、基督教の保護者であり、又布教者であり、羅馬法王の眞の保護者であり、歐羅巴のあらゆる國王から、否、バクダットの皇帝からすらも尊敬された。そこで、間もなく、彼は、コンスタンチノオブルの皇帝と和睦し、羅馬皇帝と稱せられた。尤も彼は、アアヘンに住居し、或は廣大なる王國を到る處巡遊した

りした。彼は王冠を贏ち得るだけの値打があつた。而も、嗚呼、王冠は、少くとも獨逸にとつては、彼と共に埋めらるることが願はしい。

蓋し、彼が逝去するや、何が善良にして彫弱なルドウイツクの頭上に王冠を載せたであらうか。或は、ルドウイツクがこの王國をやがて強制されて分割した時、彼のあらゆる後繼者の頭上の王冠は、如何に壓迫的なものとなつたのであらう。王國は崩壊した。之に刺激された隣邦ノルマン人、スラヴ人、フン人が襲ひ來つて、此の土地を蹂躪した。腕力の権利が流行し、王國議會は没落して行つた。兄は弟と、弟は兄と、父は子と、子は父と最も醜惡なる確執をなし、牧師は、羅馬の僧正と俱に彼等の相應しからぬ裁判官となつた。僧正達は成功して公爵となり、アラビア人の侵掠は、あるゆるものをば城塞に住む者の権力の下に追ひやつた。獨逸、佛蘭西及び伊太利に於ける總督や官吏は、昇進して領主となつた。無政府、詐欺、殘虐及び不和が到る處に行はれた。カロロ皇帝の戴冠後八十八年、彼の正系は、最も悲惨なる運命のもとに絶滅してしまつた。而して彼の最終の傍系の子孫は、彼の死後、百年にして尙生きてゐた。唯、彼の如き人物のみが、かくも方外な擴がりと、かくも人爲的な制度とを有し、かくも相反する幾多の部分から結合されて居り、而して、かかる要求を與へられてゐる王國を管理することが出來たのである。魂がかやうな巨大な肉體から離れるや否や、肉體は分解し始め、而して幾世紀かの長い間、腐敗せる屍となつてゐた。

されば、偉大なる國王よ、安らかに息はれよ、永年の間汝の後繼者にとつては餘りに偉大すぎる。十世紀は經過した。而も尙、汝敏捷なる男子が、極めてささやかなる目的の爲に、既に手を下せるにも拘らず、かのライン川とドナウ川は結合しないのである。汝は、教育と學問の爲に、その野蠻なる時代に設備を整へた。後世之を濫用し、現に尙濫用してゐる。汝の法令は、後世幾多の國法に比すれば神の掟である。汝は太古の詩人を集めた。ところが汝の息子、ルドウイツヒは、之を輕蔑し、而して之を賣り拂つてしまつた。かくして彼は、汝の記念を永遠に破壊してしまつた。汝は獨逸語を愛好し、而して之を自ら出來るだけ完成した。その周圍に、遙るばる遠隔の地から學者を狩り集めた。汝の哲學者アルクイン、汝の宮廷の學院に於けるホメロスたるアンギルベルト及び汝の秀拔なる秘書官エギンハルトは、汝にとつて價值あるものであつた。無智、飽滿せる野蠻並に怠惰なる傲慢程、汝にとつて排斥すべきものはなかつた。恐らく汝は、十九世紀の初頭に再び現れ、而して、九世紀に始まつた機械を變更するであらう。その時まで吾々は、汝の遺骸を尊敬し、汝の施設を合法的に妄用し、而してそれによつて、汝の古フランク人の精勵格勤を輕蔑しようとする。偉大なるカロロよ、汝の死後、やがて滅亡せる王國は、汝の墓碑である。佛蘭西、獨逸及びロンバルデイはその廢墟である。

四 ザクセン人、ノルマン人及びデエン人の王國

大陸の中央に住居せる獨逸民族の歴史は、稍や千編一律の性質を具備してゐる。ところが今や吾々は獨逸的

洋國民に到達する。此の國民の侵入は、遙かに迅速を極め、その奪掠は更に残酷であり、その領地は常に不定であつた。けれども吾々は、その代りまた、海上の暴風雨の中に於けるやうに、豪毅闊達を極むる人々、最も成功せる企業及びその天才が今尙新鮮な海洋の空氣を呼吸してゐる王國を認めるであらう。

既に五世紀の中葉に、海に陸に、永らくの間、戦争や盜賊の商賣を營んでゐたアングロサクソン人が、ブリテン人救援のために、獨逸人の北方海岸からやつて來た。ヘンギストとホオルズ（種馬と牝馬）が、その指導者であつた。而して彼等は、ブリテン人の敵たるピクテン人やカレドニア人をば、容易に征服することが出來た。而して、その土地が氣に入つたので、彼等は、幾多の同胞を遙る／＼呼び寄せた。けれども彼等は、百五十年に亘る慘虐非道の限りを盡した戦争や最も厭ふべき劫掠の後、コオンヨルやウエルスを除いて、ブリタニアの土地が隅から隅まで彼等のものとなるまでは、決して落ち付かなかつた。該地方に壓迫されたウエイルス人は、スペインに於ける西ゴット人が行つたやうに、山間から起つて、再びその古い國土を征服せんとすることは出來なかつた。何故かといふに、野蠻民族たるサクソン人は、略取した領土に間もなく、カトリック教徒として安定を得、而して確信式を施されたからである。

即ち、最初のサクソンの王國たるケントが建設されて後、間もなく正教を信奉するパリの王の息女は、かの異教を信奉する夫、エイテルヘルト（アアデルベルト）をキリスト教に改宗せしめた、而して此の基督教は併アウグステンが手に銀の十字架を持つて、嚴かに英國に導き入れたのである。當時の羅馬法王にして、特に正教を信

奉する王女と邪宗の國王とを結婚せしめて、基督教を傳播せしめようといふ熾烈なる野心を抱いてゐたグレゴリオ大法王は、彼を其處に遣はし、彼の良心の問題を決定し、而して彼を、イナ王時代から、聖ペトルスに、その福音的寄進を豊富になせる、此の幸福なる島民國の最初の大神正に任命した。歐羅巴の如何なる國土と雖も、英國のやうに、數多の修道院や宗教上の設備を有してゐるところは、ありはしない。而も、彼等からは、一般に期待され得る程の文學は、現はれて來なかつた。即ち、この地方の基督教は、西班牙、佛蘭西、伊太利、否、愛蘭土に於けるが如く、古代使徒的教會の根から發芽したのではなかつた。新しい形の福音をば、粗野なサクソン人に齎らしたものは、新羅馬の新來者であつた。もしこの英國の僧侶達が、丁抹人の劫掠を免かれたであらうならば、その後、外國の改宗に對して益々多くの貢獻をなし、而して、また、少くとも修道院の記録に於いて、該國土の歴史に多大の貢獻をなしたであらう。

余り大きくない半島に、夫々領土の大きさを異にして相連なり、而して異教徒と基督教徒とが互に争ふてゐるサクソン蠻族の七王國は、何等喜ばしい光景を呈してゐなかつた。而も、この混沌たる状態は、三百年以上も繼續した。而してかかる状態からは、唯、此處彼處に、教會の建物や法令、若しくはアアデルベルトやイナのそれの如き、成文律法の端緒が微かに光を發したに過ぎなかつた。遂に七王國は、エグベルト王の治世に至つて併合された。もし新たなる掠奪の慾望を以つて、海上を横行せるノルマン人やデンマアク人が、佛蘭西並に英吉利の海岸に侵入して、二百有余年の永きに亘つて、あらゆる永續的善事を妨害しなかつたならば、是等幾多の王侯は、

彼等の行政制度をも、榮えしめる勇氣と力とを持つてゐたであらう。彼等のために蒙つた損害は、言語に絶し、彼等の行ひたる慘虐非道の振舞は、筆舌に盡し難い。而して、もしカコロがサクソン人を、アングロ人がブリテン人やウエルス人を慘酷に取扱つたならば、彼等が是等の民族に加へた不正不義は、謂はゞ好戰的北方民族の全憤怒が盡き果ててしまふまでも、彼等の子孫に復讐されたことであらう。然し、國歩艱難の極に於いて最も偉大なる人物が現はれるやうに、英國は、亂世の王者の模範、人類史上の星辰たるアルフレッドを生んだ。

子供の時分、既に法王レオ四世から王者たるべき塗油の禮を施されたが、サクソンの英雄讚美の歌を讀まんとする慾望に驅られて奮勵し、それから進んでラテン作家を讀むに至るまで、何等教育されずにゐた。そのやうな状態で、彼は二十二歳まで平和な生活を送つてゐたが、その年、兄が死んだので、王位に——王位の周圍には危険百出の有様であるにも拘らず——即くことになつたのである。而して、彼等が此の年少なる國王の幸運と勇氣とに氣がついた時、彼等は、力を集中して再三再四攻撃をして來たので一年に八回も彼等と戦火を交へたアルフレッドは、屢々神聖なる長老會議に於いて、彼等に平和を誓はしめ、而して征服者として、戰に於いて先見の明があり又大膽であつたと同様に、善良にして公正であつたが、而も彼は、遂に百姓の衣を身に纏ひ、密かに牛飼の妻の奴僕となつて一身の安全を計らねばならなかつた。然しながら、尙彼の勇氣は、彼を見捨てなかつた。少數の従者と共に、彼は沼地の眞中に住居を建てた。而して彼は、之を貴人の島と名づけ、今やこれが彼の王國となつた。茲に彼は、茫然自失したやうに無爲の日を送つたのは、約一年位に過ぎなかつた。彼は恰も眼に見えぬ

城からのやうに、神變自在に敵を攻撃し、而して掠奪品に依つて己れ及び従者の生計を立ててゐたが、遂に彼の従者の一人は、丁抹と戦つて、彼が幸運の旗印と見做してゐた魔法鴉を奪ひ取るに至つた。扱て、彼は、堅琴彈奏者のやうな風を裝うて、丁抹人の陣營に至り、而して面白い歌をうたつて彼等を恍惚させた。彼は、皇子の天幕に導かれて行つた。そこで彼は、到る處に、彼等の深い安心の態と盜賊的驕奢とを見たのである。そこで彼は、歸つて來て友人のもとへ密使を遣はし、自分は生きてゐる、而して貴君方には森の一隅に集つて戴き度いと云つてやつた。一小軍隊が集まつて來た。この小軍隊は、彼を歡呼の聲を以つて迎へた。其處で彼は、すぐさまこの軍隊を引きつれて、油斷してゐたので恐慌を惹起せる丁抹人を襲撃して、彼等を打ち敗り、彼等を包圍し、而して、多數の捕虜をば同盟者や植民となして荒涼たるノオサンバルランド及びオストアングルンに住はせた。彼の王は、洗禮を受けて、アルフレッドの息子とせられた。而して直ぐに平和の最初の微光は、夥しき群をなして國土を悩ました他の諸々の敵に對して地歩を占めんことに向けられた。アルフレッドは、殆んど信すべからざる程の迅速さを以て、混亂せる國家の秩序を恢復し、破毀された都市を再建し、陸軍を整へ、すぐ又海上の軍備を設けた。その結果、やがて百二十隻の船が沿岸を監視するに至つた。初めて襲撃の風評が傳はるや彼は、直ちに救援の準備を整へた。而して全土は、その危急存亡の秋に際しては、各人が自分の就くべき位置を知つてゐた軍營にも比せらるべきものであつた。かくして彼は、その生涯を終るまで、敵のあらゆる盜賊的所業を妨害し、而して國家に、陸海軍、學問、藝術、都會、法律及び秩序を興へたのであつた。彼は多くの書物を書き、而して

彼の保護下に在る國民の教師となつた。家庭的生活に於いても公的生活に於いても、俱に偉大であつた彼は、仕事と所得といふやうに一日の時間を分ち、而して、休養と王者たる慈善とに、等しく餘裕を得たのである。カロロ大王以後百年にして出現せる彼は、幸ひにも、ある限られた範圍に於いては、カロロよりも遙かに偉大であつた。而して、その後繼者の下に於いては、大體に於いて、第二のアルフレッドが出現しなかつたからして、丁抹人の侵寇並に僧侶の不安に依つて、幾多の混亂が惹き起されたとは云へ、而も英國は、古代からの善良なる組織の基礎を有するところからして、決して英邁なる王者を缺いてはゐなかつた。彼等は海賊の襲撃すら、油断なく警戒し、何時たりとも戦ひをする準備をしてゐた。アデルスタン、エドガア、エドムンド・アイゼンザイテは、これらの王者に屬してゐた。而して英國がエドムンド・アイゼンザイテの治世に於いて、丁抹人と臣屬的關係を結ぶに至つたのは、全く國家の大官達が不實なるがためであつたのである。成程クヌスト大王は、王者として知られてゐた。けれどもこの北方の勝利者は、唯二人の後繼者を持つたに過ぎなかつた。英國は自由となり、而して丁抹人が平和を好むエドワアドに靜穩な生活を送らしむるに至つたといふことは、恐らく、英國にとつては不幸であつたであらう。彼は法律を編纂し、他のものをして統治せしめた。ノルマン人の風習は、佛蘭西の海岸から英國に傳來し、而して征服者なるウイリアムは、その時期の來るを窺つてゐた。唯一戦にして彼は王位に上り、而して此の國に新しい制度を與へた。其故吾々は、ノルマン人を一層精密に知らねばならぬ。何とならば、彼等の風習は、實に英國のみならず、又、歐羅巴の大部分の赫々たる騎士的精神に寄與するところ甚だ大であつたからである。

既に最も蚤き時代より、北方獨逸民族たる、サクソン人、フリイスマ人及びフランク人は、海上に於いて活動してゐた。丁抹人、ノルウェイ人及びスカンデナヴィア人は、様々な名の下に、彼等よりも尙一層大膽に振舞つてゐた。アングロサクソン及びユトランド人は、遙々英國にやつて來た。幾多のフランク國王、就中カロロ大帝が、北方に向つて征服を進めた時、更に剛膽なる群集は海上に乗り出し、遂に、ノルマン人の海上に於ける名聲はかの同盟軍たるマルコマン人、フランク人、アレマン人等が、嘗て陸上に於けるよりも遙かに戦慄すべきものとなつた。もし私が北方の詩歌や傳説から、彼等の稱讃して止まざる海上の勇者を數へ挙げようと欲すれば、百人の有名なる冒険家を呼びあねばならぬであらう。陸地の發見、又は王國の建設によつて有名になつた人々の名は、看過する譯にはいかない。而して人は、彼等が輾轉反側せる廣茫たる平野を見て驚くであらう。東方に於いては、ロオリツク(ロオデリツク)は、ノヴゴロドに王國を建設し、かくして、露西亞國家の基礎を置いた多くの兄弟達と共にすんでゐた。即ち、後にかのノヴゴロド國と聯盟した國家をキイエヴに建設したオスコルド及びデイル、それに、リクウエン大公爵の先祖にして、デユウナのボロツクに定住せるラングンヴルドである。北方に於いては、ナツドオドは、暴風雨のために、氷洲に漂着し、而して、この島を發見した。此の島は、間もなく、諸威の最も高貴な氏族(確かに、歐羅巴に於ける最も純粹なる貴族)の避難所となつた、而して其處には北方の

歌謡や傳説が保存せられ、且新に附加せられた、否三百有餘年に亘つて、美しい、洗煉せられた自由の存する處であつた。西方に於いては、フアロア島、オルクナイス島、シエツトランド島及び西方の諸島は、屢々ノルマン人によつて足を踏み入れられ、一部分は殖民され、而してその大部分は、北方の伯爵達によつて長らく支配された。其故、その最も遠き邊陲に於いてすら、壓迫されたガアル人は、獨逸民族に對して安全とは云へなかつた。彼等は、已にカロロ大王の時代に、アイルランドに定住してゐた。其處に於いては、ダブリンはオロオフに、ウオタアフォルドはジトリツクに、リメリツクはイヴァルに屬してゐた。イングランドに於いては、彼等は、丁抹人の名で恐れられてゐた。彼等はノルサムバルランドをば、サクソンの伯爵と交雜して、二百年間も、一部分は自力で、一部分は臣屬的關係で占領してゐたのみならず、全イングランドは、クヌウト、ハロルド及びハルデクヌウトの下に歸順したのであつた。彼等は、六世紀以來、佛蘭西海岸を脅した。而してその國は、彼等によつて、多くの危険に襲はれんとしてゐるといふカロロ大王の不安なる豫感は、彼の死後間もなく、殆んどあまり十分過ぎる程的中したのである。彼等が單に海岸のみならず、江流にまで溯つて來て、佛蘭西や獨逸の中部地方に於いて行つた掠奪は、言語同斷である。従つて、ノルマン人やカロロ大王に依つて建設せられた建物や都會の大部分は、彼等によつて憐れなる終末を遂ぐるに至つた。遂に、洗禮名では、ロバートと稱せられたロルフは、ノルマンデイの最初の公爵となり、而して幾多の王家の祖先となつた。イングランドに新制度を與へた征服者ウイリアムは、彼の子孫である。彼の素質を受け繼いだ結果、英國と佛蘭西とは、四百年の永きに亘つて矛を交へ、この

戦によつて兩國民は、互に驚くべき威力を發揮した。殆んど信すべからざる程の幸運と勇氣とを以つて、アラビア人、アブリエン人、カラブリエン人、シンリイ人、否、或る時代には、エルサレム及びアンテオケ人を驅逐したかのノルマン人は、ロルフによつて建設せられた公爵領の冒險家であり、且遂にシンリイやアブリエンの王冠を擔ふに至つたタンクレイドの後裔は、彼から出て來たものである。もし、コンスタンチノオブルへの奉仕として、巡禮や靈場廻りに際し、又殆んどあらゆる陸地や海洋の、即ちグリーンランドや亞米利加に至る旅行に於いて、ノルマン人によつて行はれたる大膽なる所業が物語られるであらうならば、この物語そのものは、一つの小説のやうに思はれるであらう。かくして吾々は、吾々の目的としては、唯、彼等の性格から起つて來る、その主なる結果を注意しさへすれば足りる。

かくして、北方海岸の住民は、その氣候や土地、その制度や生活方法のために、長らくの間、依然として粗野な状態に止まつてゐなければならなかつたとは言へ、而も彼等のうちには、その海上生活には、更に溫暖なる地方ならば、直ぐに非常に華かな苗裔を生み出し得る萌芽が横はつてゐた。大膽と體力、あらゆる技術に於ける熟練と巧妙——後世是等は騎士的と稱せられた——名譽と高貴なる血統に對する熾烈なる感情、最も大膽な、最も美しい而して最も高尚な人の名譽としての、女性に對する北方民族の有名な尊敬、こうしたものは、南方に於いて北方の海賊を少なからず愛好せしめねば置かなかつた特性であつた。法律は、大陸に於いて勢力を得た。あらゆる粗野な自家活動性は、彼等の間に在つては、或は法律とすらなり、或は死せる力として消滅してしまはねばなら

なかつた。陸上の王者の支配權の及ばない暴れ狂ふ海上に於いて、精神は新たなる活力を得る。この精神は、戰爭又は分捕品を求めて徘徊するのである。而して、此の分捕品を、かの若者は家に残せる花嫁に、此の夫はその妻や子に、力量の印として、家に持ち歸らうと欲したのである。又他の者は、遙か彼方の國土に於いて、永久の分捕品をすら求めた。北方に於いては、此處に輕蔑を以つて、彼處に地獄の苦難を以つて罰せられた大なる惡業はあらずもがなのものであつた。然るに勇敢と名譽、死に至るまでも變らぬ友情、婦人に對する騎士的精神は、幾多の時代の情勢が相合して生ぜるところから、所謂中世紀の艶事に少なからず貢獻せる徳であつた。ノルマン人は、フランス地方に定住し、而してその指導者たるロルフは、王女と結婚した。それ故、多くの戰友達は、この例にならつてその國の最も高貴なる家庭と姻戚關係を結んだ。そこでノルマンデイの宮庭は、全く間もなく西方諸國の中で、最も光輝燦然たる家庭となつた。彼等は基督教徒となつてからは、最早基督教國民の間にあつては海賊的行爲をなさなかつた。然し彼等は、彼等に隨行する同胞を導き、而して教化した。そこで都合よき位置を占めてゐる此の海岸は、航海するノルマン人の中心點となり、修養場となるに至つた。扱て丁抹人に迫害されたアングロサクソンの王族は、彼等の下に逃れ、而して、彼等の下にあつて教育されたエドワード告白王は、ノルマン人に、イングランドの王位に即かせんとする希望をすら與へた。ウイリアム征服王は、唯一戰によつて此の王國を獲得し、その後この王國の政治上及び宗教上の最高職に、ノルマン人を任命した。そこで、間もなく、ノルマン人の風俗や言語は、イングランドの上品な風俗や慣習や宮中語となるに至つた。この嘗ては、粗暴な征服者

が、佛蘭西に於いて學び、而して同化して彼等の性質となつたものは、やがて英國まで傳はつて來た、否頑迷なる封建制度や山林法にまで移つて行つた。而して將來如何に征服者の幾多の法律が廢止され、而して古代の穩健なるアングロサクソン人の法律が復活されやうとも、而もなほノルマン民族に依つて、國民に植えつけられた精神は、最早言語や風習から排除することは出来なかつた。其故、ラテン語の接種された萌芽は、英語に於いてすら今なほ榮えてゐる。英國民は、若し古い殘滓に相變らず悠然と止まつてゐたならば、他國民に卓越せるが如きものとは容易になることが出来なかつたであらう。扱て彼等は、丁抹人を長らくの間悩ました。ノルマン人は、彼等のうちに確乎たる地歩を占め、而して彼等をば、海を越えて、遙かに佛蘭西に於ける戰に従事せしめた。其處に於いて彼等の練達は煉磨された。被征服者が征服者となり、而して遂に多くの革命の後に、恐らくアングロサクソンの僧院制度からしては出て來たものとは思はれない國家組織が現はれて來た。エドモンド及びエドカアの如き人物は、ウイヘルムが反抗したやうに、法王ヒルデブランドに抵抗しはしなかつた。而して、もしその國民がノルマン人に依つて、云はゞ内部から憤激せしめられ且様々な事情によつて、強制的に陶冶されなかつたらば、十字軍に於いて、英國の騎士は、佛蘭西の夫と決して競争しなかつたであらう。適當な季節に於ける民族の接種は、土地の産物を移植し、或は野生の樹木に改良を施すと一般、人類の發展に缺くべからざるものである。最善のもので、同一の場所では、結局死滅してしまふ。

ノルマン人は、その後久しからずして、而も巧に、ナポリ及びシシリーを占領した。その獲得は、個人的勇氣

と冒險的精神の眞の物語である。彼等は、エルサレムへの巡禮に於いて、其の美しい國家を知り、而して四十人乃至百人の騎士は、壓迫せられてゐる者を救護して一層廣大な領土を獲得する基礎を置いた。ライノルフは、アヴェルザの最初の伯爵であり、而して幸ひにも海を越えて來たタンクレイドの大膽なる三人の息子達は、アラビア人に對する多大の効績のために、その報償として、伯爵となり、後にアブリエン及びカラブリエンの公爵になることが出來た。タンクレイドの多くの息子達、鐵腕を有せるウイルヘルム、ドロゴオ、フムフリイドが従つた。ロバート・グイスカルド及びロオゲルは、アラビア人からシシリイを奪ひ取り、而してロバートは、その兄弟に、占領した美しい王國を與へた。ロバートの息子、ボオエムシドは、東洋に於いて其の幸福を見出した。而して父が彼に彼處までついで行つた時、ロオゲルは宗教的並に世俗的權力を與へられた兩シシリイの最初の王となつた。學問は彼及び彼の後繼者達の治世に、この歐羅巴の邊隅に於いてその若き芽を出した。ザレルノの學校は、謂はゞアラビア人及びカツシノの僧侶の間に興隆した。法學、醫學及び哲學は、歐州の此處に於いて、長き冬枯の後緑の葉や枝を伸ばすに至つた。ノルマンの王侯は、法王の座所と隣接して、危險にも拘らず、而も大膽に振舞つた。彼等は法王の權力範圍内に落ちた時、二人の法王と和解し、かくして彼等は、多くの獨逸皇帝よりも遙かに聰明にして且細心なる注意を以つて活躍した。彼等が法王と縁組をなし、而してそれによつて彼等に相續權を與へたことは遺憾である。更にそれ以上の遺憾なることは、この地方に實行しようと考へた、後のシュヴァアベンの最後の王たるフリイドリツヒの意圖が、無慘にも敗られたといふことである。此の時以來、此の二王國は、各國民の

狂暴なる争闘の目標となり、外國征服者や代官、就中今日に至るまで、嘗ては非常に繁榮を極めた此の國のすべての優良なる組織の障礙物となつてゐる貴族の餌食となつたのである。

五 北方諸王國及び獨逸

第八世紀に至るまで暗黒なる北方諸王國の歴史は、主なる歐羅巴諸國の歴史に比して、其の歴史哲學たり得る歌謡と物語とを有する神話が、根柢に横はつてゐるといふ特徴を持つてゐる。何んとなれば、吾々はこのうちに、民族の精神、即ち神々や人間に關する彼等の見解、愛と憎、瑩城の彼岸と此岸の期待に於けるその傾向や熱情の方向を知ることが出来るからである。即ちそれは、エツタの哲學を除いては、僅かに希臘の神話だけが與へることが出来るやうな歴史哲學である。而して、北方諸王國は、波蘭土民族が壓迫され、或は屈伏せしめられるや否や、如何なる異民族に依つても敵對的行動をされなかつたからして、——といふのは、如何なる國民も、此の南部地方への大軍に従つて、この地方に入らうとしなかつたであらう——かくて彼等の歴史は、他の民族に比しても亦、非常に單純で、且自然的なものとなる。窮乏の支配する處に於いては、人はそれに従つて長い間生活するものである。かくて北方獨逸民族は、その同胞よりも遙かに長く、不羈自由の狀態に止まつてゐたのである。山嶽や沙漠は、幾多の部族を互に分離した、沼湖、江流、森林、牧場及び平野は、魚類の豊富な海岸と共に、彼等

を養育し、而して、陸上に世計を立て得ない人は、海に走つて、他所に食物と獲物とを求めた。北方の瑞西に於けるが如く、この地方に於いても亦、獨逸の原始的風習の單純性は、長く保存されたし、又それが獨逸そのものに於いてもやはり、古い傳説となれば、保存されるであらう。

此處に於いても、各所に於けると同じく、自由民が貴族のもとに服従するに至り、幾多の貴族が田野や、沙漠の王となり、幾多の小王から遂に一大王が出現するに至つた時、丁抹、諾威及びスカンデナヴィアの海岸は、更にまた都合がよかつたので、仕へたくないものは誰でも、他の土地を求めることが出来たのであつた。されば已に吾々が考察したやうに、長い間、あらゆる海岸を經廻つて、掠奪を恣にする冒険家があらはれた。彼等には掠奪は鯨の漁獵又は鯨の漁獵の如く、許可された地方的職業と思はれた。遂に國王も亦、この家族的職業に仲間入した。國王達は互に領土を征服し合ひ、或は隣人の領土を征服した。けれども、彼等の國外の征服地は、大抵はまもなく失はれてしまつた。この爲に塗炭の苦を嘗めたのは、バルチック海岸地方であつた。殆んど言語同斷なる劫掠を恣にせる後、丁抹人は、サクソン遊牧民群より遙か先きに、プロシヤ人、クウランド人、リボニア人及びエストニア人に對して征服税法及び貢賦賦課の権利を行つたやうに、スラヴ人の商業や富裕なる海港たるヴィネタ及びユウリンをして憐れなる最後を遂けしむるに至るまで、休息しなかつた。

かやうな北國民の生活にとつて、基督教程障礙になつたものはなかつた。基督教のために、かのオオデンの英雄宗教は全く行はれぬやうになつてしまはなければならなかつた。嚮にカロロ大王は、丁抹人やサクソン人を改

宗せしむる方法に苦心したが、彼の息、ルウドウイツヒに至つて、始めて、マインツのユトランド小王に對する試みに成功した。けれどもこの王國民は、惡意に解釋してなほ永らくの間、基督教國沿岸に於いて掠奪や焚毀を恣にしてゐた。何んとなれば、基督教を信ぜざるが故にフランク人の奴隸となるに至つたサクソン人の例は、彼等の目にはあまり明瞭であつたからである。該國民の基督教に對する憎惡の念は、深く根ざしてゐた。それ故、異端者のケツテイルは、洗禮を強ひられるのがいやさに、死する三年以前に、寧ろ生きながら墓陵に行くことを選んだ。かの北方の島嶼或は山嶽に住める是等の民族にとつて、その先祖のあらゆる物語を覆へし、その種族の風習をば根絶し、而して彼等の國土が如何に窮乏してゐようと、彼等をば遙か彼方の伊太利の法王廳の奴隸たらしめたかの教主制度の教條や教會的信條は、何の意味もなかつた。彼等の言語や考へ方は、オオデンの宗教と一體になつてゐたからして、なほ彼に關する記念の痕跡が残存せる限り、決して基督教は導入せられる譯には行かなかつた。従つて、此の僧侶の宗教は、異端邪宗の傳説、歌謡、習慣、教會及び紀念物とは氷炭相容れぬものである。何故かといふと、此の民族の精神は、是等のものに愛着せるに反し、僧侶の習慣や物語をば、輕蔑してゐたからである。日曜日に於ける仕事の禁止、懺悔及び大齋、或る程度の結婚禁止、僧侶の祈願、全く彼等の輕蔑の的たる僧侶階級は、彼等の氣に入らなかつた、それ故、僧侶、改宗者、否、彼等の新しく改宗せる國王すらも、神聖なる事業が完了せぬ中に、甚しき苦難に陥らねばならなかつた。然らざれば、全く放逐され、虐殺されるのであつた。然し羅馬は、保護用の網を以つて、あらゆる國民を捕へる術を知悉せるが故に、是等の野蠻人も

アングロサクソン人やフランク人の改宗者の不斷の努力に加ふるに、主として、新しい禮拜の豪華、教會音樂、乳香、蠟燭、教會、高い祭壇、鐘及び行列により、謂はゞ有頂天にならせられるのであつた。而して、彼等は、幽霊や魔術を深く信じてゐたからして、彼等は家屋、教會墓地及びあらゆる道具と共に、十字架の力によつて、異端邪宗の迷夢から醒めて、基督教に魅惑せられるに至り、かくして二重の迷信の妖魔が彼等に復活^{よみがへ}つて來た。それにも拘らず、彼等の改宗者の或る者、就中聖アンスガリウスは、彼等から見れば、眞に功績ある人物にして、且人類の安寧幸福の爲に其の道の英雄であつたのである。

最後に述べべきは、現在では、その憐れな殘餘である獨逸民族の所謂祖國たる獨逸である。幾多の民族が獨逸から移住せる後は、未知の人種たるスラヴ人がその一半を占領せるのみならず、その他の獨逸の半分は、幾度となく掠奪を蒙つた後かのフランク大王國に征服されて、その一地方となつてしまつた。フリース人、アレマン人、チュウリング人、及び最後にサクソン人は、屈服せしめられ、而して基督教信者たらしめられた。其故、例へば、サクソン人が基督教信者となつて大なる主神^{ワグネル}の像を呪ふ場合には、彼等は同時に、その財産及び權利をば、神聖なる力を有してゐる國王カロロの意志に委ね、生命と自由とを懇願し、而して三位一體の神と神聖なる力を有する王カロロに仕へることを誓はねばならなかつた。此の不羈自由の民族とフランク王國の王座とのこの結合によつて、その本來の組織のあらゆる精神は、必然的に阻止せられた。その多くのものは、或は誤解され、或は殘酷に取り扱はれ、全領域の住民は、遠方に移されてしまつた。殘留せる國民は、何れも独自の發達を爲すべき時

間も餘地も得ることは出来なかつた。暴力を以つて併合せる此の王國を、獨力にて維持せる巨人が死するや、間もなく、我が獨逸は、屢々その境界を變ぜられ、或はかの纖弱なるカアルリンゲルの一部分となつた。而して、此の不運なる全種族の斷え間なき戦争や確執に参加せねばならなかつたのであるから、かう云ふ獨逸は、その内的制度はどうなることが出来たであらうか。不幸にもそれは、フランク王國の北東の境界従つて、全ロオマ・カトリック教會の境界を構成した、是等の境域には、到る處に、この國土をその復讐の最初の犠牲たらしめた、憤激せる粗野な、消し難き憎惡の念に燃えてゐる民族が住んでゐた。一方、ノルマン人はトリイルの方まで進出し、而して此の國民をして屈辱的平和を締結せしめるに至つたが、他方、野蠻なる匈牙利人、アルスルフは、スラヴ民族のモラヴィア王國を蹂躪せんが爲に、此の國に襲來し、かくして永年に亘る戰慄すべき劫掠の途を開いたのであつた。最後にスラヴ人は、獨逸の不俱戴天の仇敵と考へられ、而して幾世紀かに亘る戦争に於いて、勇敢な戰爭練習の玩弄物であつた。

フランク人の下に於いて、該王國の尊貴と安全とを計るために採用された手段は、分離せる獨逸にとつては、更に煩雜なるものであつた。それは嘗て王國の邊境に於いて、異教徒の改宗に役立つべき大僧正及び僧正の職、僧院及び牧師會館、現在では最早王國に屬してゐない地方に於ける宮内職及び宰相、王國の官吏として國境の保護に任せられ、而して丁抹人、ヴェンド人、波蘭人、スラヴ人及び匈牙利人に對抗するがため、更に長い間その數を増加せられるに至つたかの公爵や侯爵などを繼承したのである。最後に獨逸にとつて、あらゆるものの中で最

も光輝燦然として必要缺くべからざる寶物は、羅馬皇帝の王冠であつた。獨りそは、恐らく韃靼人、匈牙利人及土耳其人のあらゆる遠征よりも、更に激しき損害をこの國に齎したらしい。獨逸を維持した最初のカルリング族のルウドヴィツヒは、羅馬皇帝ではなかつた。而してフランク王國が分離されてゐる間に、法王は此の稱號をば、伊太利のそれぞれの公爵に、視力を奪はれて死んだプロバンスの伯爵にすら贈るに至つた程、それを悪用した。カロロ大王の傍系たるアルヌルフは、この稱號を熱望したけれどもその息子は再び之を獲なかつた。これと同様に、獨逸系の最初の二王、コンラッドとハインリツヒも亦、この稱號を望まなかつた。アーヘンに於いて、カロロの王冠を受けたオットオは、危険にもこの偉大なるフランク人をその模範とした。而して、美しき未亡人アアデルハイドを牢獄から救はんとせる冒険家は、彼に伊太利王國を與へ、かくして、彼には、伊太利に至るの途が自由に開けたので、今や、要求に次ぐに要求、戰爭に次ぐに戰爭を以つて、ロンバルデイからカラブリア及びシシリイに至るまでも進んで行つた。此處に於いては、到る所、かの帝王の名譽の爲に、獨逸の血統は注がれ、獨逸人は伊太利人によつて欺かれ、獨逸の帝王や皇后は、羅馬に於いて虐待せられ、伊太利は獨逸の暴君によつて辱しめられ、獨逸は伊太利のために其の領域から驅逐せられ、勇氣と力を以つて、アルプス山を越えて引きあけしめられた。國民はかゝる眩惑的名譽から何等の利益をも得ず、その制度は羅馬に依屬して、自らと調和せず、實に自己及び他國民に有害なものとなつた。斯くて汝自身の爲には「せぬと云ふのが常に彼等の謙遜な格言であつた。

獨逸國民が、様々の事柄が結合せる結果生じたこの危険なる事情の下に於いて、全歐基督教國の自由と安全のために、外壁城砦として存立してゐたといふことは、益々獨逸國民の名譽を高むべきものである。ハインリツヒ捕鳥王は、彼等を以つて外壁となし、而してオットオ大王は、彼等の用ゐ方を知つてゐた。けれど忠良なる國民は、一般に渾沌状態に際して、オットオ自ら如何なる方向に彼等を導いて行くべきかを知らなかつた場合にすら、その指導者に従つて行つた。特權階級の掠奪に對して、帝王自身その國民を守護することが出来ぬ場合には、國民の一部は、都市に閉ぢこもつて、商業の護送兵をすら、かの掠奪者から購ひ求めた。而して此の商業を缺いては、此の國土は、依然として長い間韃靼國として止まつてゐたであらう。かくして、不穩なる國家の中には、國民自身の力から、商業、同盟、組合によつて結合された平和な、有用な國家が生れた。かくして製造工業は奴隸的境遇の壓迫的軛から身を擡げ、獨逸の勤勉と忠實とによつて、改良せられて、一部分は、藝術となりて、それが他の國民に傳へられるに至つた。他の國民が完成したものを、大抵は獨逸人が先づ試みてみた。尤も困苦と貧窮の壓迫の下に於いて、彼等はその藝術が母國に於いて適用せられ、而して百花爛漫たる光景を呈するのを見るやうに喜びを以つて報いられたことは稀であつた。彼等は絶えず群をなして外國に赴き、而して多數の機械の發明に於いて、北方、西方及び東方の他國民の師匠となつた。而して、若し國家の制度が、僧侶の手中にあつた學校を複雑な機械の政治的車輛とし、かくしてそれに由つて學問を大部分奪つてしまはなかつたならば、彼等は學問に於いても亦そうであつたであらう。コルヴァイ及びフルダ等の僧院は、他の國々の廣大なる地方よりも、尙

一層學問の進歩發達に貢献した。而してかゝる時代のあらゆる混亂に於いて、獨逸種族の確乎不拔な忠實にして正直なる心持は明かに認められる。

獨逸の婦人は、決して男子に後れをとらなかつた。家庭的活動、貞節、忠實及び名譽は、あらゆる獨逸種族及び民族の女性の特有な性質であつた。此の民族の最も古代の技藝は、婦人の手中にあつた。彼等は、機織や勞働を爲し、而して勞働する僕婢を監督し、最高階級に於いてすら、家政監理をなした。宮廷に於いてすらも、皇后は屢その歳入の大部分を要する家政を持つてゐた。而して此の制度は、多くの公爵の家庭に於いて、長く維持されて、何等國土に害を及ぼさなかつた。妻の價値を非常に低下せしめた羅馬の宗教すらも、此の點に關しては、溫暖な地方に於ける程この地方に於いては、勢力を揮ふことが出来なかつた。獨逸の尼寺は、決して、ライン川若しくはビレネイやアルプス山脈の彼方に於けるが如き程度の貞節の墳墓ではなかつた。寧ろ其等は、種々の點に於いて、獨逸の技術工藝の工場であつた。獨逸に於ける騎士の懇懇なる風習は、更に溫暖にして肉感的な地方に於けるが如く、決して洗煉された肉慾主義とはならなかつた。何んとなれば已に風土は、堅く家屋や城塞に閉ぢこもることを命じた。然るに他の國民達は、その職業や娛樂をば、自由に戸外に於いて行ふことが出来たからである。

最後に獨逸は、そが自儘の國となるや否や、一層偉大な、少なくとも活動的な、而して一層幸福な帝王を誇ることが出来た。而してその帝王の中には、ハインリッヒ、オットオ及び二人のフリードリッヒが柱のやうに立つ

てゐる。これらの人々は、更に極つた、更に固定せる範圍に於いては、何事もなし得なかつたであらう。

偕、吾々は、個別的検査をなせる後、彼等が獲取せるあらゆる國土や王國に於ける獨逸民族の組織を概観しよう。彼等の原理は、如何なるものであつたか。而して是等の原理から、如何なる結果を生ずるに至つたか。

六 歐羅巴に於ける獨逸諸國の組織に對する一般的考察

社會組織は、常に、場所、時代及び環境に應じて、事象のあらゆる状態に基くものである、従つて、幾多の經驗や確乎たる注意の結果であらねばならぬが故に、人間の精神や勤勉の創造にかかる最大の藝術品であるとするば、黒海の沿岸や北方の森林中に構成せられたるが如き獨逸人の組織は、もし開化せる民族か若しくは豪奢と迷信的宗教とによつて、頽廢せしめられた民族の下に於いて行はれたならば、全く別箇な結果を持たねばならなかつたといふことは、容易に推察することが出来る。是等を征服するといふことは、それを立派に統御し或は自らその中に在つて統御するといふことより、遙かに容易なことであつた。従つて、建設せられた獨逸の諸王國は、やがて滅亡するか、又はその幾世紀かに亘る歴史が、單に間違つた組織の補綴細工に過ぎなかつた度合に應じて、崩壞してしまつたのである。

(一)「獨逸民族のあらゆる侵略は、共同財産となるに終つた。國民は一個の人間として存在してゐた。利得は

戦争の野蠻なる法律によつて、國民のものとなつた。而して、すべてのものは、依然共同財産でなければならぬといふやうに、國民の間に分配せられた。然し、これは如何にして可能であつたか。草原に於ける遊牧の民、森林中の獵師、掠奪物を得んとする將軍、共同魚獵をする漁夫は、互の間に分配し、而もまた一全體となつてゐることが出来たのである。廣大なる土地に定住してゐた侵略國民にとつては、これは、遙かに困難なことになる。あらゆる軍人は、新に獲得した領地に於いて、今や地主となつた。彼は、依然出征や其他諸々の義務を國家に負うてゐた。が然し間もなく、軍人の公共的精神は亡び、國民集會に出席しないやうになつた。軍人は、他の諸々の義務を負擔することに依つて、今や重荷となるに至つた軍務から逃れようとした。例へばフランク人の間に於いてそうであつた。されば、戦争は、やがて自由な庶民に忽ち附せられてしまつた。従つて、その決定は、國王及びその臣下に委ねられ、而して募兵權そのものすら、唯、注意深き努力を以てして始めて行はれることが出来たのであつた。されば自由なる庶民は、やがて常備の軍人にその軍務を委ねて、立派な報酬を支拂ふことになつたので、時のたつに従つてどうしてもすつと下らねばならなかつた。其故國民の本幹は細分されて、擴つた流の如く、力なき不活潑なものとなつてしまつた。借、かくして、樹立せられた王國が、かくの如き最初の弛緩をなせる時の中に、力強く攻撃された場合に、それが倒壊したといふことは、何んの不思議もない。又外敵の襲來を受けずとも、かゝる無氣力なやりかたでは、自由民の最善の権利や財産が、彼等を代表する他人の掌中に歸したといふことに、何んの不思議があらう。全體の制度はすべてのものが活動すべき管の戦争又は生活様式の爲めに造られたものであつて、散在せる勤勉な平和な生活の爲めに、造られたものではなかつた。

(二)「貴族の群は、征服する處の國王と俱に國土にやつて來て、王の仲間及び親友として、家臣及び奴隸として、王の所有地の分配を受けたのであつた。」此の土地の分封は、初めは、一代に過ぎなかつたが、やがて彼等の生計の爲めに與へられた財産は、世襲的のものとなつた。元首は、最早何物をも與ふるものがなくなつてしまふまで與へたので、自分は貧乏になつてしまつた。この種の大多數の制度に依れば、家來は領主を、奴隸は主人を誅求せる結果、もし國家が長く存続するならば、國王そのものには、役に立つ特權の何物も残らなくなり、而して遂に國王は、國中の最貧者となつてしまつたのである。已に述べたやうに、貴族は、事の進展上、長き尙武時代に於いては、必然に國民の本幹たる自由な庶民が、——それが高上して貴族とならざる限り——漸次に零落しなければならぬとすれば、當時缺くべからざる、稱讃すべき騎士の職業が、如何にしてあのやうに發展を遂げ得たかといふことが明かとなるであらう。王國は、好戰的遊牧民群によつて征服せられた。最も長く兵力を揮うてゐたものは、拳と劍とを以つて最早獲得すべき何ものも存在せざるに至るまですべてのものを獲得したのであつた。遂に元首は、何物をも有せざるに至つた。といふのは、彼はすべてのものを與へてしまつたからである。自由な庶民も無一物であつた。何んとなれば、自由な國民は、貧乏になるか、或は自ら貴族となるからであつて、他の國民はすべて従僕であつたからである。

(三)「國王たるものは、親しく人民の共有財産たる國家中を遍歴するか、若しくは寧ろ到る所に君臨すべきで

あつたが、之を實行することが出来なかつたので、總督、公爵及び伯爵が是非とも必要となつたのである。而して獨逸の制度によれば、立法、司法及び行政の權は、尙未だ分離してゐなかつたからして、時代の進展につれて微力なる國王の下に於いては、大都會又は遠隔なる地方の總督が領主或は地頭となつたといふことは、殆んど避け難きことであつた。該地方は、ゴウトの建築術の一片の如く、國家が大規模に持つてゐるものをば、すべて小規模に包含して居り、而して事件の成行上、彼等がその階級と一致するや否や、假令、未だ國家に從屬してゐるとは言へ、小王國が樹立されるのであつた。かくして、ロンバルディやフランク王國は分裂し、而してそれは、王の名の絹糸に於いては、殆んどつなぎとめられなかつた。若しもゴウト王國やヴンダル王國も、長く存続したならば、かゝる運命に遭遇したであらう。各部分が一體たらんと欲するに方つて、この碎片を再び結合する爲めには、歐羅巴のあらゆる王國は、五百年の長きに亘つて、獨逸制度を活用せねばならなかつた。而も或る王國は、己れの本來の成員を再び發見することすら出来なかつたものがある。制度そのものの中に、かゝる分離の萌芽が存してゐるのである。即ちその制度は、その切離された一々の部分のうちに全體が生活してゐるが如き水蟻であるのである。

(四)『この共同團體に於いて、一切のものは、人格に基くが故に、その頭部たる國王は、假令束縛されてはゐるにしても、その人格並に家政を以つて、國民を現はさねばならなかつた。従つて、單に國家的擬制に過ぎざるべき、王者の總體尊嚴は、その護衛兵、家來及び從僕に移つて行つた。』身を投げ出して國王に仕へるといふこ

とは第一の國家奉仕と考へられた。何んとなれば、國王に近侍する牧師、主馬頭及び内膳頭は、評議會、法庭及び其他の場合に際し、國王を援助し奉仕しなければならなかつたからである。是は、極めて單純な時代に於いては、如何に自然なことであつたにせよ、是等の牧師や内膳頭が事實、王國の代表的人物、國家の第一流の人物となり、或は、永遠に世襲的な官職たるべきものとなるに至るや、洵に不自然なものとなつた。而も此の種の野蠻なる豪奢を極めた行列は、——それは韃靼人の汗の食卓用天幕に屬するものであつて、國民の父、先覺者、裁判官の宮殿に屬するものではない——歐羅巴に於けるあらゆる獨逸王國の根本的的制度である。古い國家的擬制は、赤裸々なる眞理となつた。全王國は王の食卓、殿及び庖厨に變ぜられた。何んといふ不思議な變り方であらう。とにかく從僕や家來であつたものが、この輝かしい從僕頭によつて、代表されることも出来やう。けれどもその自由の成員の何れもが、決して王の從僕ではなく、寧ろ王の僚友並に味方であり、而して家僕の何れによつても代表される譯には行かぬ國民の團體はさうではない。この韃靼的王國制度は、フランク地方程榮え、而して華やかに發展向上せる處は何處にもない。この制度は、そこからノルマン人によつて、英國並にシシリイに、王冠と共に獨逸に、獨逸から北部諸邦に、而して遂にブルグンドから極度の豪華を以つてスペインに移し植えられた。而して此の制度は、列る處に於いて、場所と時代とに應じて、新しい花を開いた。支配者の家政を變じて王國の形態と總額とになすべき、かくの如き國家的詩は、希臘人も、羅馬人もアレキサンダアもアウグスツスも知らなかつた。然しながらそれはウアイク若しくは、エニサイ江畔に生じたものである。従つて又黒豹や黄が、その象徴や紋章と

なつたといふのも、決して無意味なるものではなかつた。

(五) 既に吾々が考察した如く、若し此の野蠻性が、既に友誼的に結合せる他のもの、即ち「羅馬法王權の野蠻性」を自前から見出さなかつたならば、この制度は歐羅巴に於いてかくも確固たる足場を獲取し、或は維持することは困難であつたであらう。何んとなれば、當時學問の全殘餘は、——この學問なくしては、野蠻人も亦、この地方に存在し得なかつた——僧侶の手中に歸してゐたからして、自ら學問を得たいといふ願望を抱いてゐなかつた是等の人々には、僧正達をば自分達の間に收容しようとするれば、謂はゞ彼等を征服するには一手段だけしか残つてゐなかつた。それは實現せられた。而して是等の僧正達は、貴族と共に、國家の階級となり、宮廷の家來と共に宮内官吏となり、且貴族と同様に、彼等も亦、恩惠、特權及び土地を與へられ、而して、幾多の原因から、種々の點に於いて、無學なる人々に先んじてゐたので、實に如何なる國家制度と雖も、法王權にとつて、これ程運好く又價值あるものはなかつた。一面に於いて、風習やその他の秩序の緩和に、僧侶階級の大に貢獻したといふことは、否定されないが如く、他面に於いては、二重の裁制權、否、國家の中へ獨立國を導き入れ、その一切の原則をして不安定なるものたらしめたのである。二つの事象のうちで、羅馬法權と獨逸の風習の精神程、互に無關係なるのは、他にあるまい。前者は、反對に多くのものを後者から横領し、而して、結局、すべてのものを變じて、一獨逸羅馬的混沌世界を作り出したやうに、絶えず前者を覆へしたのである。全獨逸民族の長年の間、怖れ慄いてゐたところのものが、結局、彼等にとつて、最も好まれるものとなつた。彼等は自己の原則をば自らに

反して使用しなければならなかつた。國家から奪つた教會の財産は、全歐羅巴に於ける共有財産となつた。而してそれに對しては、羅馬の僧正は、如何なる王侯がその國家に對するよりも更に力強く支配し、且監視したのであつた。是れ矛盾と、いまはしき不和とに充ちた制度であつた。

(六) 「國家を養ふものは、軍人でも僧侶でもない。」而して、何れかといへば全世界をば化して僧正や貴族の奴僕たらしめんとする傾向のあるかくの如き組織に於いては、職業階級は殆んど注意を拂はれなかつたからして、その最も生氣潑刺たる動源即ち「人間の勤勉、その活動的な、自由な發明的精神」をば永らくの間國家から奪つてゐたことは明かである。軍人は田畑を耕すには、偉大すぎると思ひ込み、而して没落してしまつた。貴族や僧侶は奴隸を持たうと欲し、而して奴隸制度は、少しも爲にはならなかつた。土地や財産は、有益なる、あらゆる部分とあらゆる産物とに於ける有機的組織體にあらずして、寧ろ農奴の屬する動かすことの出来ぬ領地の性質上、王冠、教會、或は貴族の宗家に屬してゐる、分離することの出来ない、死せる財産と考へられる限り、この土地の正當な使用は、人間の力の眞の評価と共に、筆舌に盡し難き阻害を受けたのである。國土の大部分は、不生産的な公共地であつた。人間や動物は、その土地に粘着し、嚴格なる掟に依つて、決してそれから離れることが出来なかつた、手工業や藝術も同じ道を進んで行つた。婦女子や奴隸に依つて營まれた是等のものは、長い間、大體に於いて奴隸の職業となつてゐた。而して、その有用なることを羅馬の世界から知つた僧院が、是等をば僧院の墻壁の内に引き入れ、皇帝が是等に都市的組合の特權を與へたが、而もこれがために、事物の進行は少しも變ら

なかつた。農業が衰微してゐる所に、どうして工業技術が繁榮し得るのであらうか。富の第一の源泉、即ち獨立不羈な、利益を齎らす人間の勤勞及びそれと共に、商業や自由貿易のあらゆる小川が涸れ、唯、僧侶と軍人のみが、命令を與へ、裕福なる財産監理者であつた所に於いて、どうして工業技術が榮え得るであらうか。かくして工業技術も亦、時代精神に従つて、自治體と異なる所なく、組合の形式に引き入れられた。これは、當時安全の爲に必要であつた固い殻であり、又同時に人間精神の自由な活動を許さなかつた桎梏であつた。幾世紀此の方耕作せられた國土に、今尙不毛の共有地が存して居り、確立された組合、團體、盟社にも、その忠實に保存せられた古い偏見や誤謬が残つてゐたといふことの責は、かくの如き制度に負はさねばならぬ。人間の精神は、職業上の成績を手本とし形成せられ、謂はゞ特權を與へられた共同の匣の中に這入つて了つた。

(七) 以上述べたことから、獨逸民族の制度の理念は、それ自らかくの如く自然的であり、又貴重なものであつたにしても、巨大な、征服され、長い間教養を受けた、或は全く羅馬的、基督教的な王國に適用される場合には、幾多の弊害を惹き起し易い「大膽な試み」に他ならないといふことが、明らかにするのである。この理念は、何等か確乎たるものとならうと云ふには、北方及び南方の世界に住める、幾多の健全な悟性に富める民族によつて用ゐられ、様々に検討され、完成されねばならなかつた。是は、小さな市區、訴訟及び生きた現實の効力を有する所には到る所に、疑もなく最上のものとしてあらはれた。あらゆる人は自分と同等の人によつて裁かれ、裁判所長は、陪審者によつてのみ法律を作り、あらゆる犯罪者は、唯、社會の破壊としてのみその賠償を要求し、而し

て文字からではなく、寧ろ事物の生々した觀察から判定されねばならないといふ古代獨逸の原則は、多くの他の裁判の慣例、組合及びその他の慣例と共に、獨逸人の明徹にして公正なる精神の證據である。國家に關しても亦、國民の共同財産、防禦及び自由の原則は偉大にして高貴なるものであつた。然しこの原則は、總ての成員を結合し、總ての成員の關係を附け、而して全體を一瞥を以つて鼓舞することの出来るやうな人士を要求する。而もこれらの人々は、嫡子相續權に従つて生れなかつたので、多少到る所に起る處のものが起つた。即ち國民のあらゆる成員は、解けて粗暴な勢力となり、防禦なきものを壓迫し、而して悟性と勤勉の缺陷に代へるに、長い間の韃靼人の不規律を以つてした。然るに、世界史上に於いては、獨逸民族の共同制度は、謂はゞ殘存せる文化をば時代の暴風に對して防禦し、歐羅巴の公共的精神を發展せしめ、而してこの地上のあらゆる方向に、徐々に、而して又隱約の間に成熟して影響を及ぼすに至つたのである。先づ第一に宗教的王國や他の王國の氣高い幻像があらはれて來た。而もこれは、建設された當時の目的とは全く別箇の目的を促進したものである。

第十九卷

その盤石の如き信仰の上に、確乎不動の教會が建立せられ、而して天國に這入るに必要な鍵が委ねられた、かの聖ペトルスの名前よりも重大なる結果を有せる名前を擧げることとは、殆んどあり得なかつた。ペトルスの墳墓近く、彼の座席に就いたと思はれた僧正は自分がその名前のものであることを知り、且種々の事情が相合して彼をば最大の基督教會の優越なる位置に上げたのみならず、また宗教上の訓令や命令を發し、宗教會議を召集して之を決裁し、教義を確立限定し、許すべからざる罪を許し、他の者には到底與へることの出来ぬ自由を與ふる權能を彼に賦與するに至つた、一言にして言へば、彼は地上に於いて神の權能を揮ふたのであつた、其故彼は、やがてその結果として、此の宗教的君主政體から世俗的宗教的君主政體へと昇つていつた。嘗て彼は、僧正の權力を制限したやうに、今や彼は國家の元首の權力を殺ぐに至つた。彼は西洋の帝王に王冠を與へたが、その權威は彼自らは之を認めなかつた。放逐破門を執行する戰慄すべき彼の手は、王國を建設し又破壊し國王を捕虜となし又放免し、諸國から宗教上の禮拜を奪ひ、臣民や家來達の義務を解き、全僧侶團から妻子を奪つた、かくして一般的に言へば、幾百年の間振撼されたけれども、而もなほ決して消滅することなき一つの組織を打ち建てるに至

つたのである。かくの如き現象は、注目すべき必要がある。而して世界の如何なる支配者と雖も、その權力を高むるに當つて、羅馬の僧正程困難を嘗めなかつたからして、それは少くとも他の國家制度を考察する場合と等しく、何等の怨恨も憎惡の念も持たずに叙述する價值がある。

一 羅馬の教政

如何なる建物でも之を建築しようとする場合には、先づ工事を初むる前に、建物の設計を土臺とするのが普通であるが、政治上の建築物の場合には、これは極めて稀れである。政治的建物は時がたつにつれて完成するものである。羅馬の宗教的偉業の場合に於いてすら、人が傍目もふらず注意を拂つて行つても果してそれに達せられたか否かは疑問である。羅馬法王の位に即ける僧正は、他の王位に即ける場合と等しく種々様々の種類のものがあつたが、最も有能なる者にとつてすら、薄倖なる時代もあつた。けれども此の不運なる時代や先行者並に仇敵の失敗弱點をすら利用するといふ事が、羅馬法王の政策であつた、彼はかゝる政策を以つて確乎たる基礎と優越せる地位とを獲得することが出来たのである。吾々は歴史上の種々の事情のうちから、僅かに二三の事情を抽出して、羅馬の偉業の基づく原理と俱に考察を施し度いと思ふ。

羅馬といふ名稱そのものが、既にその大體を物語つてゐる。即ち諸民族の首腦にして冠冕たる、世界の古き女

王は、その僧正達にも同一筆法を用ゐて諸民族の元首たらんとする精神を吹込んだ。ペトルスの僧正たる職務や殉教者に關するあらゆる傳説は、アンテオキア若しくはエルサレムに於いては、古い久遠の羅馬の繁榮な教會に於けるが如く政治的影響を及ぼしはしなかつたであらう。蓋し、此の尊敬すべき都市の僧正は、殆んど其の意志なくして己れを高めねばならなかつたところのものを如何に多く見出したことであらうぞ。數多の帝王が従はねばならなかつたかの羅馬國民の根強き自負心は、彼をその双肩に擔ひ、且世界一等國民の牧者たる彼に、基督敎時代に於いてすら人は羅馬法を學ぶがためには、來り學ばなければならなかつた、此の學問と政治學との高等なる學院に於いて、親しくそれを會得し、而して古代羅馬人と等しく法令や法律を以つて世界を統配せんとする考を喚起せしむるに至つた。異端邪宗の禮拜の豪華は、彼の眼前に在り、而して羅馬の制度に於いてはそれが官憲の權力と結合してゐたからして、該國民は基督敎の僧正に對しても亦古代の教長、屬占者、烏ト者を期待したのであつた。凱旋、祭禮、國家の儀式に慣れた彼等は、基督敎が墓地や塋窟から現はれ出で、偉大なる羅馬に相應しき寺院に入り來たりたるを喜びの眼を以て眺めた、かくして羅馬は、その祭禮、儀式、制度の故に、再び諸民族の頭首となるに至つた。

『羅馬は夙に、教會の統一、教義の純粹性、正敎信仰』及び教會がその上に打ち建てられねばならぬ「カトリック主義に推し進んだ事に依つて、その立法的聰明を露した。既に二世紀の頃、ヴィクトールは、亞細亞に於ける基督敎徒が彼と同時に復活祭を行はんと欲せざるに際し、彼等をば敢て己れの同胞として認めやうとしなかつ

た。否猶太基督敎徒と異敎より改宗せる基督敎徒との最初の分裂は、羅馬から恐らく始末が付けられたであらう。パウルスとペトルスとは平和に其處に埋葬せられてゐる。普遍的教義のこの精神は、羅馬法王の玉座に於いて維持せられ、而して若干の法王は必ずしも異端邪宗の批難を免れる譯にはいかなかつたが、その場合その後繼者は何時にても方向を轉じて正敎派教會の舵機に依つて再び正しき途を進み行くことを心得てゐた。羅馬は、異敎徒のため一再ならずいたく壓迫せられたけれども、斷じて彼等に屈服しようとはしなかつた。即ち、東洋の諸帝王、東ゴット人や西ゴット人、ブルグンド人やロンゴバルド人はアリアン人であつた、是等のうちの或る者は、羅馬を支配した。けれども羅馬は、依然として舊敎を奉じてゐた。假令希臘教會が世界の半を占めたけれども、羅馬は何の顧慮するところなく遂に希臘教會と分離してしまつた。聖書と傳統とに基づくと稱せらるゝ動かすべからざる純粹性と普遍性の此の基礎は、好都合なる事情のもとに於いては、必然自から宗教上の判官たる位置を獲得し且擔はねばならなかつた。

かやうな好都合な状態がやつて來た。皇帝が伊太利を見捨てた後、即ち、帝國が分割され、野蠻人に依つて捲席せられ、羅馬が度々征服され、掠奪された時、一再ならずかの僧正は、羅馬の救濟者たる機會を持つた。彼はこの見捨てられた王城の地の父となつた。而して羅馬の莊麗優美を崇拜してゐた野蠻人達は、この最高の僧正を畏敬した。アツチラは退却し、ガイザリツヒは讓歩し、暴れ狂ふたロンゴバルド國王は、羅馬の主人となる前に既にこの僧正の脚下にひれ伏した。彼は永らく野蠻人と希臘人との間の仲介をなしてゐた。彼は他日支配せんが

爲めに、分割する術を知つてゐた。而して此の分割する政策が最早成功せぬ時に際して、彼は既にその舊教を信奉する佛蘭西をその援助者として用意してゐた。彼はアルプスを越え、而してその救援者からは、彼の要求せるところよりも遙かに多く、太守の支配する一切の都會と俱に、その僧正の都を獲たのである。遂にカロロ大帝は、羅馬皇帝となつた。而して今や、一羅馬、一皇帝、一法王と稱せられた。この三つの不可分の名稱は、その後幾多の民族の禍福吉凶の源となつた。羅馬の僧正がその恩人の息子に對して許した所のは、非常に驚くべきことである。しかし彼の後繼者には、尙一層多くの事が期待された。彼は皇帝の間を仲裁し、彼等に命令し、彼等を威嚇し、而して彼等に與へたと思はれた王冠をば彼等の頭からはぎ取つてしまつた。三百五十年の長い間、此の財寶のために羅馬に遠征し、而してこのためには喜んで國民の碧血を犠牲に供した、お人良しの獨逸人は、法王の傲慢不遜の態度を驚くべき高さまで高めた人々であつた。獨逸皇帝及びその帝國の悲しむべき制度がなかつたならば、恐らくヒルデブランドの如き人物は、出現しなかつたであらう。而して今なほ獨逸は、この制度を有するが故に、羅馬王冠の安樂枕となつてゐるのである。

異端邪宗の羅馬が、その征服に對して幸福なる位置を占めてゐたやうに、基督教的羅馬も亦さうであつた。北海やバルチック沿岸、黒海やヴォルガ流域から、無数の民族がやつて來た。而して羅馬の僧正は、もし是等の民族がその正教を信ぜる地方に於いて、平和に住居するであらうならば、結局彼等に正教信仰の十字架のしるしを與へねばならなかつた。而して彼等は自ら進んでは來なかつたので僧正は探し求めたのである。彼は是等の國民

に祈禱と香とを送つた。此の返禮として彼等は、僧正に金と銀とを奉り、また耕地、森林及び沃野をば、數多の召使と共に献上した。然し彼等が僧正に捧げた最も美はしき贈物は、彼等の眞率なる、生のまゝの心であつた。この心は、そが罪を知れる以上に罪を犯し、而してその赦免を得んが爲に、僧正の手から罪の表をば受け取つたのである。茲に於いてペトルスの鍵が用ゐられるに至つたが、報酬を拂はずしては決して鍵は開かれなかつた。ゴット人、アレマン人、フランク人、アングロ人、サクソン人、デンマルク人、スウェデン人、スラヴ人、ポオラント人、ハンガリイ人及びプロシヤ人の國土は、宗教家の何たる美しき遺産であつたらう。是等の民族が天國に這入るに遅くなればなる程、彼等はそれに這入るに益々高價なる犠牲を拂はねばならなかつた、否國土や自由をさへも支拂ふことは敢て稀しくはなかつた。北方或は東方に至れば至る程、改宗は愈々緩慢にして、その感謝の念は益々著大であつた。即ち或る民族が容易に信仰に入ることが出來ねば出來ぬ程、一旦之を獲得せば益々確乎たるものとなるのであつた。遂に羅馬の僧正の羊欄は、北方グリーンランドに及び、東方チユナ河やドニエブル河に至り、西方最極端の海角に至るまで廣がるに至つた。

獨逸民族の改宗者たるヴァインフリイド、即ちボニハアチウスは、かの法王領以外に住する僧正に對して法王の權威をば、如何なる皇帝と雖もなすことが出來ぬ程急速に高めたのであつた。彼は、無信仰者の住居なる國土の僧正として、法王に忠誠の誓をなした、而して此の宣誓は、後に勸説と要求とに依つて他の僧正達にも移り行き、而して遂には舊教を奉ずるあらゆる王國に於いて掟となるに至つた。カアリング族治世の下に於ける土地の頻々

たる分割と共に、僧正の寺領も亦分裂し、かくして法王は、其の教區に於いて活躍すべき多くの機會を得た。恐らくフランク王國と獨逸王國との過渡期に立てるカアリング族時代に初めて公然現はれるに至つた偽イジドルの教令集は、人が不注意と奸策と無智とからそれを許した所から、あらゆる後代に行れた弊害が、突如として、最も古き權威の基礎の上に確立せられたのである。此の唯一つの書籍は、法王に對して十の帝國の文書よりも役立つたのであつた。實際西歐全體が覆はれてゐた無智と迷信とは、一般に、そこに於いてペトルスが網を以て漁りをした茫々たる深海であつた。

羅馬の僧正達の經綸の才は、逆境に際して有利に局面を展開させようとした點に最もよく現はれてゐる。長い間彼等は、東洋や時には西洋の帝王達に屢々壓迫せられた、而もコンスタンチノオブルは、先づ彼等に一般僧正の位階を許し、最後に獨逸は宗教的王國の階級の叙任を彼等に交附せねばならなかつた。希臘教會は分離した、而してこれがために法王は利益を得た。蓋し、彼はその教會に屬してゐては、西歐に於いて彼が求むるが如き權威を得ることが出来なかつたのである、ところが今や彼はこの權威をばしつかりと身につけることが出来るやうになつたのである。モハメッドが現はれ、アラビヤ人は南歐の大半を征服した、そして彼等は羅馬のすぐ近くまで征め入り、而して上陸せんとした。是等の厄災すらも亦、法王にとつては少なからぬ利益となつた、而して彼は、希臘皇帝の微弱なる力や歐羅巴をおびやかす危險をば如何に利用すべきかをよく心得てゐた、で自から伊太利の救濟者として戰場に立ち、かくして後には基督教をあらゆる無信仰者に對する旗印となすに至つた。是等の戦争

は、彼が放逐や破門を以て強制し、而して單に使者としてばかりでなく、時には出納係や總指揮官として活躍せねばならぬ底の恐ろしきものであつた。彼はまたアラビヤ人に對するノルマン人の幸運を利用した、即ち彼は己れの所有に非ざる國土を彼等に與へ、かくして前面に於いて自由に活躍せんがために、後方の安全を計つたのである。かくて實際初めには何處まで進むであらうかを自から知らない彼が最も遠く進んだ。然しそれに對して彼は時が與へるあらゆる状態をば、確乎たる方策に従つて使用したのであつた。

吾々は、羅馬の宮廷が、その利益のために遵奉した若干の方策を、何等の愛憎の念を挿しはさむことなく極めて公平に叙述して見よう。

(一)『羅馬の統治は信仰に基づいてゐた、即ち、人間の魂の幸福をば時間的に、而して永恆に促進せしむべき信仰に基づいてゐた。此の組織には、人間の魂を導くことの出来る一切のものが屬してゐた。而して是等一切のものをば羅馬は己れの掌中に握つてゐた。母親の體內から墳墓に至るまで、否墳墓の彼方、淨罪火のうちにまで、人間は教會の權力のもとに立つてゐた。而して人間が此の教會から逃れんとすれば、是非共救ふべからざる不幸に陥らねばならなかつた。教會は人間の頭腦を形成し、その心情を騒がし、また靜めるのであつた。即ち、教會は懺悔に依つて人間の秘密、その良心、その一切の行爲や性狀を開くべき鍵をば掌中に握つてゐるのであつた。信仰を有する者は、一生涯教會の訓練の下に未丁年者として遇せられた、而して瞑目するに當つて、教會は、後悔せる者や寛仁なる者をば益々自由に解放せんがために、七重の結帯を以て彼を縛るのであつた。是は王者でも乞

食でも、騎士でも僧侶でも、男でも女でも同じことであつた。その悟性も良心も何等の力なく、すべての人は尊かれねばならず、而して決して指導者を缺くことは出来ないものであつた。扱て人間といふものは怠惰な動物であり、而して一度基督教的精神看護を受くるに至るや、それなくては容易にゐられなくなり、却つてその子孫に此の柔かき鞭をば病人の褥として薦めるに至るものであるが故に、教會の主權は、かくして人間の最も内部に打建てられたのである。教會は、信者の悟性と良心を獲て一切のものを其の掌中に握つた。教會が信者に宗教的種子を播いて、謂はば世俗的な收穫を得たといふことは瑣細なることであつた。信者は献身的であつたので、教會は世俗的生活に於ける信者の最も大切とする所のものを久しく相續した。

(二)「かゝる信仰を導くに當つて、教會の用ゐし手段は、最も偉大な、最も重要なものに非ずして、極めて理解し易い、極めて小なるものであつた。』何故かといふと、教會は、人間の祈念といふものは極めて些少なるもので満足することをよく心得てゐたからである。十字架、子供を抱ける聖母マリアの像、供養及び、念珠は、幾多の巧妙なる思辨がなせるよりも遙かにその目的を達することが出来た。而して教會は、かゝる家具をも極めてつゝしまやかな勤勉を以つて處理して行つたのである。十分に供養が營まれた所に於いては、敢て聖餐の必要はなかつた、忍びやかな供養で十分であつた場合には、殊更に大仰な供養を營む必要はなかつた。また基督の肉と變れるパンを食する場合には、血と變れる葡萄酒を缺くべきであつた。かくの如き經濟に依つて、教會は、數ふ可からざる自由といとも高價なる贈物への餘裕を獲たのであつた。蓋し、最も儉約なる經濟家と雖も、果して

水、パン、葡萄酒、若干の玻璃珠又は木珠、些少の羊毛、香料及び十字架から教會が作り出せる以上のものを作り出す術を知れるや否やは、頗る疑はしいのであつた。祭式、祈禱、儀式についても亦同様である。是等のものは、決して徒らに工夫せられ、組織せられたものではないのであつた。假令近代には新たなる法式が屬してゐたにもせよ、古き儀式は依然として存してゐたのである。信心深き子孫は、その祖先と等しく祝福せられねばならず、またせられんことを欲した。教會は、己が犯せる失敗を些少なりとも撤回するといふ譯にはいかなかつた。そがただ餘りに明白なる場合には、何時も甚しく潤色を施して打消して了はれた。然らざる場合には、すべてはあるが儘に存し、而して其の場合場合に從つて、改良せられずして、寧ろ増大せられるのであつた。かくの如く思慮深き態度を以つて、天國が聖者に満たされる前に、教會は富と奇蹟に充たされ、而も其の聖者の奇蹟に於てすら、それを談る者の考案力は何等の苦心をもなさなかつた。すべてのものは反復され、而して人氣のある、極く分り易い、通俗的なものと云ふ大原則の上に打ち建てられてゐたのである。何故かといふと、殆んど信仰する價値なきものであつても、屢々而も大膽に繰り返へされると、正しくそれだけで信仰を命令し、かくして遂に信仰せられるに至るからである。

(三)羅馬の政策は、兩者何れの場合に於いても凌駕することが出来ないといふやうな具合に、極くつまらぬものの原則に、「最も洗練せられたるもの及び最も粗野なるもの」を結合することを知つてゐた。何人と雖も、危急の秋に際し、若しくは唯々諾々たるものやお人良しに對して法王がなせる以上に、謙讓で、阿りへつらい、懇願

的態度をとることは不可能であつた。彼等を通じて語るところのものは、或る場合は聖ペトルスであり、他の場合にはいと物優しき教父であつた。然しながら、必要に際して法王達が筆を執り又は行爲せる以上に公明にして而も力強く、粗野にして而も嚴格に振舞得るものは、一人もありはしない。彼等は論議を闘はさずして、寧ろ教令を發布するのであつた。假令法王達が切願懇求し或は要求、威嚇、傲慢不遜の態度をとり、又罰するにしても、其が途を何處までも辿り行く狡猾なる大膽さは、羅馬教の諭告の言語を、殆んど他に比類を見ることが出来ない程著明なものたらしめてゐる。従つて中世紀に於ける教會の掟、教書及び教令の特異なる調子は、特に古代羅馬法制の尊嚴と奇異なる相異を示してゐる。基督の僕は、俗人や支配下の者共に語り聞かせることに慣れ、何時もその事を處理するに當つては的確にして、その言は斷じて撤回することはないのである。かゝる神聖なる專制主義が、父の如きの尊嚴に依つて飾られ、何人と雖も信用せぬかのつまらぬ國家の政略の空虚なる儀禮よりも遙かに偉大なる事業を達成したのである。それは欲するところのもの、及び、如何にして從順を要求せねばならぬかを承知してゐたのである。

(四) 『羅馬の政策は決して市民的社會の個々の對象に對して偏愛を以てするやうなことはなかつた。それはそれ自らのために存立してゐた。』役に立つものは何物でも使用し、己れの障害となるものは一切を除去してしまふことが出来た。蓋し、それは獨立自存してゐたからである。あらゆる基督教國家を犠牲に供して生存する宗教的國家は、之が目的に適ふ場合には、勿論或る時は學問、他の場合には道義や秩序、又或る場合には農業、工藝美術、

商業等を促進せざるを得なかつた。けれども、本來の羅馬教は、純な智識の開發をなし、政體の改善進歩を促し、之に屬する一切のことをなさんとしなかつたことは、全中世史の證明するところである。最善の萌芽であつても、それが危険となるや、直ちに踏みぢられて了はなければならなかつた。學識秀拔なる法王ですら、その知見が羅馬法王の玉座の永遠の利益に甚だしく隔絶するに至るや、その知見をかくすか、又はそれに順應せしめねばならなかつた。之に反し、かゝる利益を養つてたところのもの、即ち工藝技術、年貢、煽動家の活躍せる自由都市、贈られたる耕地や國土、是等は神の更に大いなる榮譽のために大切にせられ且監視されるのであつた。あらゆる運動に於いて、教會は、宇宙の不動の中心點であつた。

(五) 『羅馬の政治的主權は、此の目的を達する爲めに、有益なるものはすべて用ゐねばならなかつた。』即ち戦と劍、焔と牢獄、捏造せる聖典、分割されたる聖餅に對する偽誓、異端審問所と破門、耻辱と貧窮、一時的及び永恆の不運。領主に對して領内の者を怒らすために、彼から一切の祝福の手段が奪はれもした、尤も臨終の場合には別である。ペトルスの鍵は、神や人間の掟の上に、民族や個人の權利の上に、その威力を揮つたのである。

(六) 『而して此の建物は地獄のあらゆる門より優つて居るべきが故に、』鍵の力を縛つたり、釋いたりする寺法上の施設の系統を、神聖なる記號の魔力、ペトルスからその後継者及び僧職にある人々に受け繼がれた精神の稟賦は、ただ永恆を説くのみであるが故に、誰がより深き根柢を有する王國を想ふことが出来ようぞ。僧侶の階級は、心身共にこれに屬してゐる、剃髮せる頭と取消しがたき誓約とを以つて彼等は、永遠にその奴僕となるの

である。教會と僧侶とを結付ける結帯は、解くことが出来ない。即ち僧侶からは、子供、妻、父及び世襲財産が奪はれた。そは人類の多産なる果樹から切り離されて、教會の果實のならぬ常緑樹に接枝される。かくして僧侶の名譽はただ教會の名譽であり、その利益は彼の利益である。死して奴隸の境涯から脱するまでは、如何なる變心も、如何なる悔悛も不可能である。然し、其の代り教會は、また此の奴隸に對して廣大なる報酬の領域、即ち奴隸であるが莫大なる富と權力を有し、地上のあらゆる自由なる人々や偉大なる人々を支配する高き段階を與へた。そは名譽心の強い者には名譽を以て誘ひ、信心の深い者には祈禱を以つて刺戟した、而して各人に對して、相應しき餌と報酬とを有してゐた。この立法も亦、その一部が残存する限り、全部存在し、而してどの一々格率を以つても、一切のものが遂行せられねばならぬといふ特性を持つてゐた。何となれば、そは人がその上で其の永遠の網を以つて漁をするペトルスの岩であるが故である。そは勇士自身の勝負に於いて唯一人だけに與へられ得た、分割することの出来ぬ衣であるのだ。

(七) 而して、羅馬に於いて、かの神聖なる委員會の首班に列した此一人者は誰であつたか。それは恐らく人々が其の搖動籃の中に於いて忠實を誓ひ、かくしてその生涯あらゆる空想に對して征服を誓ふ、嘔り泣く幼兒ではない。また若い者の愚かな行ひを平氣で行はせることに依つて甘やかし、かくして後には我儘勝手な纖弱なものとなるべき遊び盛りの子供でもなかつた。既に最も教會の事務に慣れてゐて、活動家を任命すべき領域をよく心得てゐる大人若しくは白髮の老人が選ばれたのである。或は彼は、其の當時の王侯と密接なる關係を有し、而し

て危急存亡の秋に際しては唯困難の始末を付けるがために任命されたのであつた。彼は僅かに數年の壽命を有し、而も正當に子孫に對しては何物をも與へることは出来なかつたのである。けれども、彼がそれをしたにしても、そは羅馬法王の治世の老大な全體から見れば、殆んご云ふに足らぬことであつたのである。羅馬法王の玉座の利害關係は引續く所のものであつたのである。而して經驗に富める老人は、起つて來た所のものにその名を冠せることが出来るが爲に、單に其の間に嵌込まれたに止つてゐた。幾多の法王は重荷のために倒れたのであるが他の法律や政治に經驗のある、大膽にして、着實なる人々は、微力なる政府が半世紀に亘つてなせるよりも、遙かに大いなる事業を、數年ならずして成し遂げることが出来たのである。最も卓抜にして偉大なる法王のみを擧げるだけでも、それらは長い姓名録となるに相違なからう、而して人は、是等の多くのものが、何等他の目的のために活動することが出来なかつたといふことを遺憾とするのである。放蕩淫逸なる徒は、羅馬法王の玉座にあつては世俗的君王の玉座に於けるよりも遙かに少なかつた、而もその多くのものに於いて、其の缺點が特に著しく目立つに至つた所以のものは、そが法王の有せる缺點であつたからである。

二 羅馬教政の歐羅巴に及ぼせる影響

何よりも先づ吾々は、あらゆる被覆の下に、基督教がその性質上齟らさざるを得なかつた恩恵をば考慮しなけ

ればならない。それは貧しき者や虐げらるる人々に同情を寄せ、彼等をば野蠻人の亂暴狼籍から防いでやつたのである。ガリア、西班牙、伊太利及び獨逸に在住する幾多の僧正達は、かゝる所業を演じて聖者たるに相應しきことを示した。彼等の邸宅や寺院は、虐げられた人々の避難所となつた。彼等は、奴隸を買ひ戻して釋放し、掠奪捕囚の人々を解放し、而して野蠻人の行へる厭ふべき人身賣買をば、知り且出來得た場合には之を阻止したのである。人類の虐げられてゐる人々に對するかくの如き寛仁大度の榮譽は、何人と雖も其の原理上基督教から奪ひ去ることは出來ない。基督教が、その發祥當初から人類の救済のために努力したことは、既に幾多の東洋諸國の帝王のそれ自體非政治的な法律の示すところである。けれどもかゝる慈善は、西洋諸國の教會にあつては更に必要缺くべからざるものであつたので、西班牙、ガリア及び獨逸の僧正達の多くの教令は、法王の協力なき場合に於いて之に贊成してゐる。

一般に不安定な秋に際して、寺院と修道院とは、つゝましかやかな勤勉や商業、農業、技術及び工業の神聖なる避難所であつたといふことは、同様に否定すべからざることである。僧侶は歳の市を興したのであるが、今なほ彼等の名譽のために、これが供養と呼ばれてゐる。而して、彼等は帝王ですら彼等を安全ならしめることが出來なかつた場合には、神の平和を以つて満足した。藝術家も職業も、修道院の籬のうちに隠れて、彼等を奴隸にして了ふ貴族から遁れたのであつた。僧侶達は最も打捨て置かれた農業をば、自づから又は他人の手を藉りて營んだ。彼等は修道院で必要なものは、何でも供給し、或は少くとも、藝術の修道院的工藝の途を拓き且まやかな

る報酬を與へるに至つた。古代から保存されて來た古文書の救はれたのも、修道院に於いてであつた、而して、この文書は、此處彼處で書かれたもので、かくして後世に傳へらるゝに至つたのである。最後に、神への奉仕の助に依つて、當時ありしが如く、さゝやかな書物がラテン語でものされた。之は後世人をして古代文學に誘導し、かくして知識の開發をなすべきものであつた。巡禮に對してすら安全と保護、便宜、食料及び旅宿を與へた僧院は、かくの如き時代のものである。此の種の旅行に依つて、國々は先づ平和に結合されるに至つたのである。蓋し劍を以つてしてもよく保護し得なかつた所に於いては、錫杖を以つて保護したからである。また彼等に依つて、極めて幼稚な形式ではあつたが、傳説、物語、小説及び詩歌などと共に外國の知識が普及されたのである。

すべて是等は、眞實にして否定し難いものである。然しながら是等の多くは、よし羅馬の僧正がなくとも起り得たかも知れぬが故に、其の宗教的主權が眞に歐羅巴に齎らした利益は何であるかを吾々は考察しようと思ふ。

(一) 『數多の異教民族の改宗』然し、彼等は如何にして改宗されたか。時には火と劍とに依り、或は秘密裁判所や剽滅的戰爭に訴へたのである。羅馬の僧正は、かゝることを目論まなかつたと言つてはならない。かの僧正は之を許し、その結果を享樂し、而して出來る場合には、自ら之を模倣したのであつた。かくして異端審問所が開かれて茲に讚美歌が歌はれたのである。また此の故に十字軍が起されて、その分捕品は、法王や王侯、騎士や教長、管長や僧侶に分配せられたのである。死を免れたものは、捕はれて奴隸とせられ、大部分今なほさうである。かくの如くして基督教的歐羅巴が打立てられ、かくして王國が建設され、而して王冠が法王の手からさづけられ

たのである。而もかくして基督の十字架は死の表徴として世界各國に運ばれたのである。亞米利加は今なほ虐殺者の血潮に咽せび、而して歐羅巴に於いて奴隸たらしめられた民族は今なほその改宗者をば呪ふてゐる。而も汝、佛蘭西の南部、西班牙及び其他の地方に於ける審問所の犠牲となれる無数の人々よ、汝等の灰は飛び汝等の骨は塵に塗れてしまつた。然し、汝等に對して行はれた惨虐なる振舞の歴史は、汝等に於いて害を受けた人道の永遠の告訴者として残るであらう。

(二)「歐羅巴のあらゆる民族をば一基督教的共和國に結合せる功績は、此の教政の然らしむるところである。然しながら、それは何に存してゐたのであらうか。あらゆる國民が一つの十字架の前に跪坐し、而して讀經に耳を傾けたといふことは、何かではあらうが、しかし太したことではなかつた。宗教上の事件に於いては、彼等は、すべて羅馬から支配さるべきものであるといふことは、彼等自身にとつては餘り有利なことではなかつた。何となれば彼處への入貢や僧侶や羅馬法王の使節や大使等の無数の集團は、諸國を壓迫したからである。當時の歐羅巴強國の間には、從來程平和はなかつた。之には、他に種々の原因も存在するが、正しく法王が歐羅巴に確立した誤れる國家組織の爲であつた。異端邪宗の徒輩の海賊は、基督教に依つて防禦された。然し有力なる基督教國は互に烈しく軋轢した、而して各國の内部は、宗教的並に世俗的掠奪の精神に刺激されて、到るころ困亂に陥つてゐた。あらゆる國家のうちに法王の國家の存するといふ此の二重統治が亦、如何なる王國を名其れ自らの原理に基づかしめぬやうにした。而も人が國家自からの原理を考へるやうになつたのは、人が法王の主權から解

放されてから後のことであつた。其故歐羅巴は、無信仰なる者に對してのみ基督教的共和國として振舞つたのであつて、而してこれ多く歐羅巴の名譽ではなかつた。蓋し、十字軍は、史詩家にとつてすら、餘り名譽な行動とは思はれなかつたのである。

(三) 教政が、「王侯や貴族の専制主義に反對する力として働き、而して下等階級のものゝをば昇進せしめた」とは教政の名譽と見做されてゐる。成程之はそれ自體から見れば眞實であるが、しかしそれには大なる制限を附する必要がある。本來獨逸民族の原始的制度は、此の専制主義に、全く反對であつたのであるから、もしかゝる精神病が學ばれたとすれば、國王はそれを僧正達から學んだものであると主張しなければならぬ。即ち、僧正達は、聖書を誤用し、羅馬や彼等自身の階級から、諸民族の法律や教育の中へ、支配者には盲目的に服従するといふ東洋的若しくは修道院的思想を導入したのである。支配者の職務を徒らに權威あるものたらしめ、而して彼をば神様の塗油を以て神聖にして自負心を起こさしむるに至つたのも、彼等であつた。國王が己れの專制的權力を確立するに使用したのも、殆んど僧侶であつた。もし彼等が贈物と特權とを以て満足したならば、他のものは犠牲に供せられても敢て差支へないのであつた。蓋し、一般に、その特權と權力とを擴張して、俗人の王侯に卓絶し、或は羨望の念を以て彼等の跡を追うて行つたのは、僧正達ではなかつたか。彼等は違法の獲物を神聖なものとしなかつたか。最後に、法王は幾多の國王の主權者として、また専制君主中の専制君主として、神權に基づいて決裁したのである。彼はカアリング、フランク及びシュヴァブンの皇帝の治世に、俗人では到底一般の批

難を免れることが出来なかつたやうな濳越なる振舞を平氣で行つたのである。而して最も法律學に通曉せる法王の後見の下に、幼少なる時代から、彼及びその孫のコンラアデンの死に至るまで立て、シュヴァベン家から出た皇帝、フリードリッヒ二世の唯一人の生活は、歐羅巴の王侯以上に位する法王の主權の總額であると見ることが出来やう。此の王家の血は、使徒の椅子から決して洗ひ去られることの出来ぬものである。基督教の主權者が全歐洲の國王や國家に卓絶して占むる位の高さは、何たる驚くべきものであつたらう。恐らく凡人とは思はれないグレゴール七世、イノセント三世、ポニファツイウス八世は、其の顯著なる例證である。

(四)「あらゆる舊教を奉ずる國土に於ける教政の大なる組織は」紛ふべくもない。而して、もし學問が此の古代の聖者の食卓からこぼれ落ちるバン屑に依つて、さゝやかではあるにしても養はれなかつたとしたならば、夙に貧弱なるものとなつてしまつたのであらう。けれども此の場合人は前代の精神を誤らざらんことに注意しなければならぬ。あらゆるベネディクト派の僧侶の主なる目的は農業に非ずして、僧侶としての祈願であつた。彼は、最早働かなくとも差支へないやうになると、直ぐに働くことを中止し、而して彼が獲た如何に多くの額が、羅馬に送られ、或は用ゐられてはならぬやうな目的に費されたことであらう。有益なるベネディクト派の僧侶に續いて、無数の教團が生じた。是等は成程教政にとつては有益であつたが、藝術や學問、國家や人類にとつては非常なる重荷となつた、特に乞食僧に於いて然りであつた。すべて是等は、あらゆる種類の尼僧と共に、——恐らく仁愛の兄弟姉妹だけは別であるが、——かくの如き頑迷にして無智朦昧な野蠻時代にのみ適應するものであ

る。現今、土地を開拓せんがために、誰がベネディクト派の掟に従つて修道院を建て、或はその中に於いて歳の市を行はんがために伽藍を建立するものぞ。誰が僧侶から商業の理論を、羅馬の僧止から最善の經濟組織を、又は大僧正會の尋常の教師から最善の學校の施設を學ばんと欲するか。けれども當時はほんの副次的目的にしても學問、道徳、秩序及び仁愛に役に立つたものは、何んでも非常な價值があつた。

けれども、儉約、怠惰及び修道院的貧困の強制的誓約は、如何なる時代にも、如何なる宗派に於いても、かゝる種類の中に數へられぬものである。是等の誓約は、法王廳の至上權にとつては必要缺くべからざるものであつた。法王は、教會の奴僕をば宗教的國家生活のみを送らせる爲に、活社會から引き離さねばならなかつた。けれども、是等の制度は、人類に適應せぬのみならず、また何等の役にも立たなかつた。なすことが出来、また欲する者をして獨身生活をなさしめ、食を乞はせ、讚美歌を歌はしめ、自己を鞭打し、而も珠數をつまぐつて祈念せしめよ。然しながら此の種の團體の成員は、國家の保護のもとに、否多忙有益なる勤勉、有徳なる家政、更に我本性の願望や衝動をば犠牲に供して、神聖及び漲り溢るゝ功績の證印のもとに、特權、扶持及び永久の歳入を以て恵まれることをば、稱賛し、是認する者は、抑々誰であるか。病める尼僧の愛戀の吐息、修道僧の穩密なる途、僧侶の秘密な罪業や公然な罪業、彼等に依つて傷はれたる結婚、永代寄附の淨財、分離せる僧侶階級の育まれたる名譽心及び其他之より生じて來なければならなかつたあらゆる混亂をば、グレゴール七世は氣にかけなかつたけれども、その結果は、歴史の典籍のうちに、明白に記載せられてゐる。

(五) かくして吾々は、神聖な怠惰者の『巡禮』に關しても多く誇らうとは思はない。巡禮が隱密なる方法で直接商業や顧客に役に立たなかつた處に於いては、唯非常に不完全で偶然ではあつたが、國や民族に關する知識を與へるに役立つた。神聖なる巡禮者の衣を纏うて、到る所に安全を見出し、慈愛深き修道院に於いて食物と休息とを得、如何なる途程にも道伴を發見し、最後に教會や聖林の蔭に渴望せる慰安と赦罪とを得るは、確かに便利なることであつた。然し、もし吾々が此の甘き空想をば眞面目な眞理に還元するならば、吾々は、神聖なる巡禮の衣のうちに、屢々安易な遍歴に依つて大犯罪を贖はふとする罪人や家屋敷を放擲し、或は寄附してしまふ誤れる信心家を見るのである。此の信心家は、己れの階級や人間の最初の義務を打ち忘れて、以後はその餘生を墮落せる人間、半狂人、傲慢不遜な或は淫逸なる痴愚として送るに過ぎないのである。巡禮者の生活は殆んど神聖なるものではなかつた。彼等が今なほ遍歴の主なる場所に於いて二三の王國から引き出す費用は、彼等の國土の眞の掠奪物である。既にエルサレムに巡禮しようとする信心病は、幾多の事柄のうち十字軍を喚起し、多くの宗教團體を生ぜしめ且哀れにも歐羅巴の人口を稀薄ならしめた一事は、既に之だけで其の不都合なるものなることを證してゐる。而してもし傳道がこれらの背後に隠れたとしたならば、それは確かに何等の純粹の善をも終局目的として持たなかつたのである。

(六) 最後に、依つて以て全羅馬舊教を信奉する國家が疑ひもなく結合せられたる『結帯』たる『僧侶特有のラテン語』に對しては幾多力説すべき點が存する。之は單に歐羅巴に在住する民族の母國語を保存し且それと俱に民族そのものをも未開なる状態のまま保存するに與つて力あつたのみならず、特に民族が最後に公の商議に參與する權利を奪ふに至つた。といふのは、是等の民族はラテン語を知らなかつたからである。民族の公務は、母國語と俱に國民性の大部分を失ふてしまつた、然るに僧侶のラテン語と俱に、機會があらば、阿諛し、籠絡し或は隔着することの出来る神聖なる僧侶的精神が忍び込んで來た。全歐洲國民の活動の文書、その法律、その決定、その遺言、その取引證書、采邑證書及び歴史も亦幾世紀かの長い間ラテン語で書かれた。成程これは識者階級にとつてよりも、僧侶にとつては非常に必要なものであつたかも知れないが、しかし一般國民にとつては有害なものであつたに過ぎなかつた。唯祖國語の文化に依つてのみ、民族は野蠻の域から脱してその位置を高めることが出来るのである。而して歐羅巴が長い間野蠻なる状態に止まつてゐた所以のものは、外國語が殆んど十世紀に亘つて歐洲の住民の自然的機關に進入し、彼等からその記念碑の殘餘をも奪ひ去り、かくして長年の間彼等をして祖國の法典を編み、獨特の組織や國民史を書くことを全く不可能ならしめたからである。歴史を國語で記念碑に建てた國は、僅かに露西亞だけである。何故かといふと、此の國は羅馬法王の教政に無關係であつたので、法王の使節たるウラヂミルをば受け付けなかつたのである。歐羅巴のあらゆる國土に於いて、僧侶の言語は、排除することの出来るものは、すべて排除した、而してそれは唯必要上なくてはならぬ言語として、又は古代文學が後世のためには救はれ得た狹隘なる通路としてのみ稱讃せらるべきである。

私は、不本意ながら中世紀の稱讃にかゝる制限を附して書いたのである。私は、此の教政の幾多の制度が今な

ほ吾々に關して有する價值をば十分感得してゐる、而してそれが當時建設せられた必要なる所以を承知してゐるのである。かくして私は喜んでこの尊敬すべき建物の物凄き黎明の中を彷徨してゐるのである。此の教政こそ、野蠻人の襲撃に打勝つべき、傳統の堅い教として、測るべからざる價值を有し、且この中に善なるものを置いた人の力と反省とを示してゐる。しかし此の教政は、あらゆる時代に對して永遠に積極的價值を有する譯にはいかないであらう。果實は熟すれば、殼は自ら破れるものである。

三 教會の世俗的保護者

獨逸の種族や民族の國王は、本來選ばれた將軍、國民の首長、最高の判官であつたのだ。彼等は僧正に依つて塗油の禮を施されるや、神法に従つて國王となり、その國の教會の保護者となつた。法王が羅馬皇帝に加冠した時、法王は、謂はば、皇帝をば協力者の位置に据えたのである。即ち、基督敎の教會といふ天に於いて、法王は太陽であり、皇帝は月であり、其他の國王は星辰であつたのだ。暗黒のうちに定められたかゝる組織は、唯、黎明のうちに於いてのみ現れたが、まもなく顯著になつて來た。既にカロロ大王の息子は、僧正の諭告に依つてその王冠を捨て、而して僧正の新たなる諭告を待つて再び之を得るより外致方がなかつた。彼の後繼者の間に於いて、國王は、教會及び國家の事務に於けるその宗教的及び世俗的階級を屬官と認むべしといふ協定が再三繰り

返へされた。遂に、僞イジドオルは、法王たるものは、裁決の權能を以つて、公侯や國王を破門し、かくして彼等はその國家を統配することが出来ないといふ宣言をなす權利があるといふ原則を一般的のものとした。特に法王は、潛越にも羅馬皇帝に對して幾多の權利を行使した。而も人は之を許してゐたのである。ザクセンのハイブリツヒは、法王から羅馬皇帝の位を授けられるまでは、單に獨逸國王と稱してゐたに過ぎなかつた。オットオ及びその後繼者は、フリードリツヒ二世に至るまで、皆法王から位を受け、而して之を以て、基督敎國のあらゆる國王に對して優越なる地位を占め且つ全く一種の主權を有するものであると信じたのである。獨逸國を支配するに屢々困難を嘗めたかの國王達は、采邑を與へもせず、希臘王國から何物かを取るといふことはけしからんとであるとなした。彼等は異教徒に挑戦し、而して僧正をば是等の國に置いた。法王が基督敎を奉ずる國王を匈牙利に作つた時、波蘭土の最初の基督敎的王侯は、獨逸王國の封臣となり、而して其後此の臣屬關係のために數多の戦争が行はれたのである。皇帝ハインリツヒ二世は、法王から、世界は彼のものであるといふ象徴として、黄金の寶璽を受けた。而してフリードリツヒ二世は破門せられた。といふのは、彼は、強制された十字軍を遅延したからである。長老會議は彼を免黜した。皇帝の位は、空虚なることを法王に依つて宣言せられ、而して如何なる外國の王侯と雖も彼を容れることを欲しなかつた程低い者とされてしまつた、かくて基督敎の太陽は、その月のよい助けとにならなかつた。何となれば、基督敎の守護は、遂に獨逸皇帝をして自らを護ることすら不可能なるに至らしめたからである。彼は法王の命令に基づいて、巡歴し、帝國議會や裁判を開き、領土、笏及び王冠

をば讓渡すべき筈であつた。然るに法王はチベル河畔に坐して、使節、諭告及び破門に依つて世界を統治したのである。法王治世の下に於いて、教會の守護者ならぬ國王の存する舊教國は、歐羅巴の何處にも存しなかつた。否、これは可成長い間、歐羅巴一般の國法になつてゐた。

かくして國家のあらゆる内部の制度は、かゝる觀念に従ふの他なかつた。といふのは、教會が國家のうちに在つたのではなくして、國家が教會のうちに在つたからである。

(二) 僧侶と俗人とは、如何なる所に於いても、國家の階級であつたので、最も重要な政治的、武士的、封建的慣習は、謂はば教會の證印を以て表示されねばならなかつた。國王達は祭禮の日に宮廷の祝賀を行ひ、その戴冠式は教會に於いて行はれ、その宣誓式は、福音書及び聖骨の上でなされ、その服装は神聖なる裝飾であり、その王冠や劍は、神聖なるものであつた。彼等ですら、尊嚴を保つために、教會の僕と見做され、かくして僧侶階級の特權を享樂した。あらゆる儀式張つた國家的行事は、多少とも聖餐祭や宗教と結合してゐた。扈從が貰つた最初の劍は、祭壇に於いて神聖化せられた、而して、時のたつにつれて、騎士の位が一教團の儀式に入つたのであるが、その儀式の三分の一は宗教的儀式であつた。祈願は教團に於いて、名譽と愛とに結び付いた。蓋し、基督教の爲並に傷はれた徳や純潔の爲に劍を揮ふといふことは、あらゆる騎士團の公然たる目的であつたからである。夙に、基督や使徒、聖母や其他の聖者は、基督教、あらゆる階級や官職、各組合、教會、僧院、城、及び種族の保護者であつた。やがて彼等の肖像は、軍隊の表徴、軍旗、證印となるに至つた。彼等の名は、鬨聲合言葉とな

つた。人は福音書を讀むに、劍を握り、而して、主よ、我等を憐み給へと言ひつゝ、出陣するのであつた。かゝる種類の儀式は、異端邪宗の徒や無信仰者に對して、何時でも戰爭の出来る用意をなせるが故に、ただ適當な時機に、神聖なる記號と誓約とを以て大諭告を發すればよいのであつた。かくして歐羅巴は、サラセン人、アルビ教徒、スラヴ人、プロシヤ人及びポオランド人に對して軍を進めたのである。剩へ、騎士と僧侶とは、宗教的騎士團と云ふ奇妙な形式に於いて結び付くことが出来た。蓋し、特別の場合にあつては、僧正、大僧正、否法王すらも、杖を劍と取り換へたのであつた。

かゝる風習の簡單なる例は、先に述べた、法王の手に由つて、匈牙利王國が建設されたことである。皇帝と帝國とは、如何にせばかの野蠻な、幾度となく撃退された匈牙利人が鎮定せられるか、といふことを長らくの間熟慮した。之に對する唯一の手段は、基督教に改宗せしむることであつた。而して之が幾多の努力の後達成せられたる時、羅馬教的教育を受けた國王、聖ステハアンは、改宗の事業すら行ひ、使徒の冠を贈られた。——此の冠は、恐らくアヴァレンの分捕品であつたらう。——彼は、神聖なる槍、——匈牙利の棍棒狀の武器——と各地方に於いて教會を保護し且之を擴張すべきステハアンの劍、寶璽、僧正の手袋、十字架を受けとつた。彼は法王の使節に任ぜられた、それで早速、羅馬には宗務院を、コンスタンチノオブルには修道院を、ラヴェンナやエルサレムには、病院、旅舎及び僧院を建て、巡禮をば己が國內に誘導し、僧侶、僧正、修道僧とば、ギリシヤ、ペエメン、バイエルン、ザクセン、奥太利、ヴェニスから招聘し、幾多の巨利や僧院と俱にグランの伽藍を建立し、

而して出征せねばならぬ僧正をば招致して、己れの王國の階級に就かした。彼は法律を制定したが、その法律の宗教に關する部門は、西洋、殊に佛蘭西の本山やマインツの教會の教令からとつたもので、之をば新基督教國の原則として後世に残したのである。是れが時代精神であつた。匈牙利の全制度、その住民の關係や運命は、悉く之に基いたもので、ポオランド、ナポリ、シシリイ、デンマク及びスウェデンに於いては、時と場所とに應じて稍や變更を加へられたが、大體同じであつた。あらゆるものは教會といふ大海の上に浮んでゐた、即ち船の一絃が封建制度であれば、他絃は僧正の權力であり、國王や皇帝は帆であり、法王は舵機に坐つて之を導いて行つたのである。

(二) あらゆる王國に於ける「裁判權」は、極めて羅馬舊教式であつた。法王や教會々議の布告には、民族の規則も慣習も従はねばならなかつた。否羅馬法が行はれるに至つた時ですら、寺法がこの範例となつた。かくして民族の多くの粗野な圭角は、磨耗されるに至つたといふことは、否定する譯には行かない。蓋し、宗教は身を屈して裁判上の訴訟事件をば神聖にし、或は神の判斷に依つて代置するが故に、そはかやうな係争に或る制限を附し、かくして迷信をば少くとも有害ならざる規則たらしめたのである。大僧正と僧正は、地上に於ける神の裁判官であり、また平和の裁判官であつた。僧侶は、大部分裁判所の書記であり、法律、規則及び教令の制定者であり、屢々最も重要な場合に於いて、使節となつたのである。彼等が北方の異教徒の間に於いて有つてゐた裁判權は、基督教徒の間にも移され、遂に、後に至つて、初めて法律學者のために其の席から押し除けられたのである。

ある。修道僧や懺悔を聽く僧侶は、屢々王侯の託宣者であり、而して聖ベルンハルトは、十字軍の不吉な事柄に於いて、歐羅巴の託宣者となつた。

(三) 中世紀の貧弱なる「醫術」は、猶太人や亞刺比亞人に依つて行はれなくなるや僧侶の掌中に歸したのである。従つてそは、北方の異教徒に於けるが如く、迷信と入り交つてゐた。惡魔と十字架、聖物と呪文とは、このうちに於いて重要な役前を演じた。蓋し、眞の自然の知識は、歐羅巴から消え失せてしまつて、後に残るは些少の傳説のみであつた。従つて、癩病、ペスト、黒死病、傳染力を有する舞踏病の名のもとに、全歐羅巴到るところに及んだかくの如き數多の病氣の傳播を誰一人として阻止することが出来なかつた。といふのは、何人も此の病氣の性質を知るものなく、且それに對する適當なる手當をすることが出来なかつたのである。衣服の不潔、亞麻布の缺乏、住居の狹隘、迷信に依つて疊らされた構想すら、病氣を促進せしめざるを得なかつた。もし全歐羅巴が、皇帝、法王及び教會の命令に基づいて、眞の惡魔の仕業たる、かゝる疫病の侵入を防ぐために一致團結し、かくして癩瘡もペストも癩病も歐洲になくなつて了つたならば、これこそ眞の守護者であつたであらう。然し、事實かくの如き病魔はやつて來て、毒が藥を食盡すまで荒れ狂つた。之を防ぐがために譯ぜられた若干の施設は、矢張教會の御蔭である。技術としてまだ手の下しやうのなかつたものが慈善事業として營まれたのであつた。

(四)「學問」は、國家にも教會にも存しなかつた。教會が必要と思つたものは、教へられ、且とにかく書かれたのである。一切は、僧侶の學校から發した。かくして僧侶の考へ方が、當時現はれた精神の些少の産物のうち

にも行はれてゐた。歴史すら國家のために書かれたのではなくして、教會のために書かれたのである。といふ譯は、僧侶の外には之讀ものが殆んどなかつたからである。従つて、中世紀に於いて最も卓越せる著者は、僧侶的精神の痕跡を持つてゐた。傳説や小説、即ち人間の才智が當時案出した唯一のものは、狭い範圍の内を回轉するに過ぎなかつた。蓋し、いくらか用ゐられたのは古代の少數の著作であつた。従つて人は種々の思想を比較檢覈することも出來ず、而も其の當時の基督教的考方は、大體まもなく用盡されてしまつたのである。加之、基督教は詩的神話を與へなかつた。羅馬やトロヤの歴史や物語から抽出された若干の特徴は、より近世に屬する時代の事件と混淆して、全く粗野な中世的詩歌の毛氈を織り出すに至つた。是等の詩歌が國語に傳播し初めるや否や、宗教上の問題が、英雄物語や騎士物語と奇妙に混淆して、現はれ始めたのである。之を要するに、法王も皇帝も、啓蒙の手段と思はれてゐた文學には無關心であつた。けれども、彼等の權利の僭稱には絶対に必要であつた所の法律學だけは、別であつた。學問をば學者として愛好したゲルベルトの如き法王は、稀に見るフェニックス鳥であつた。修道院の學問と云ふ底荷は、教會といふ船で運ばれてゐた。

(五)「藝術」なくしては、教會も城も塔もあり得なかつたのであるが、それも、同様に、ほんの僅かしか保持されてゐなかつた。所謂ゴシック建築術は、時代精神、宗教及び生活の様式、同時代の人々の要求や風土と全く調和してゐたからして、一種特有な、且週期的に、僧侶的精神や騎士的精神又は教政や封建制度として發達して行つたのである。騎士の武裝、教會、城、若しくは修道院の裝飾や儀式に使用せられたものは、更に低級なる藝術

から出て來たものであり、且それが完成せられたのである。その産物は、象眼細工や彫刻、飾り窓や飾り文字、聖者の肖像、敷物、舍利匣、天主教の聖餅盆、杯や高脚盃であつたのであるが、教會音樂や狩人の笛も込めた、それ等のものから、歐羅巴に於いて再び藝術が生れ出づるに至つた。而も併て希臘に於いて生じたものとは、全くその類を異にしてゐたのである。

(六)歐洲の「商工業」も亦、あらゆるものを包括する教會制度や封建制度から、その深くして且廣き輪廓を得たのである。皇帝や國王の最も崇高なる保護は、疑ひもなく亂暴狼藉なる掠奪から都會を救ひ、而して奴隸の軛から藝術家や技術家を救助したといふこと、また正義、關稅免除、市場平和、及び安全な警護に依つて、勤勞と商業とを自由に行はしめるやうに保護し且促進し、野蠻な漂着物取得權を根絶し、而して其他の壓迫的負擔から、都會や國家の有用なる住民を逃れさせたことであつた。此のためには、教會も確かに名譽ある寄與をなしたのである。けれども、己れの支配する全都市に存するあらゆる組合や團體をば廢止しようとするフリードリッヒ二世の大膽なる考は、かくの如き潑刺たる精神の有してゐた幾多の考と等しく、遙かに其の時代を超越してゐた。騎士や修道院の制度に於けるが如く、幾多のものが唯一人のために盡くし、而して極めて小さな營業組合に於いてすら、僧侶や軍人がその團體に於いて昇進するが如く、徒弟でも、その働き具合に依つて、上進することが出来る聯合組合がなほ必要であつた。兩者何れの場合に於いても、更に一層高き發展には、同じやうな儀式が隨伴した。然り、商業にすら、組合や同盟の精神が這入つて來たのである。その最も偉大なる同盟たるハンザ同盟すら

初めは巡禮のやうに放浪して歩いた商人の組合團體から生じたものである。海上や陸上に於ける困窮と危険は、この結合を益々高め且擴めて、遂に歐羅巴の基督教の保護のもとに、世界未曾有の老成なる「商業共和國」を現出するに至つた後に、同様な組合が大學ともなつた。成程、東洋にも、希臘や羅馬にも知られなかつたが、修道院や騎士の制度として當時必要缺くべからざるものであり、且學問を維持する爲めには、あらゆる時代にとつて必要であつたゴシック制度が之である。中世にはまた一種特別な「都市制度」が生じた。之は羅馬の自由市とは全く趣きを異にし、獨逸の原則に依れる自由と安全との基礎の上に打ち建てられたもので、これの存する所には、勤勉、藝術及び職業が生ずるに至つた。此の制度は、貴族、僧侶及び王侯の壓迫せる間に發生せる痕跡を持つてゐるが、しかし歐羅巴の文化には力強い影響を及ぼした。要するに、教政、封建制度及び守護者の壓迫せられた穹窿の下に於いて、生ずることの出来たものは、生じた。ゴシック建築術の堅固な建物に唯一つ缺けてゐるものがあるやうに思はれる。是れ即ち光である。吾々は、如何に奇妙なる方法で、光が其處へ來たかを考察しよう。

四 亞刺比亞王國

亞刺比亞半島は、自然そのものがこの國民に特殊な性質を賦與せんと目論んでゐるかのやうに思はれる地球上

に於いて最も顯著な地域の一つである。エジプトとシリアとの間に介在し、アレポからエウフラアト河に至るまで擴がれるかの老成なる沙漠は、南部韃靼のやうに、特に綠林的及び牧人的生活を送る餘地を與へ、而して上古から、漂泊亞刺比亞人種が住んでゐた。都會が恰も牢獄のやうに思はれたこの民族の生活様式、古い土着的起源、その神、その豊富にして詩的なる言語、その氣高き馬、及び神聖なるものに彼等に思はれたあらゆるものと共に、彼等の手中にある劍や弓に對する自負心、是等すべては、亞刺比亞人のために、時機の到來せる曉には、かの北部韃靼人とは全くその趣きを異にして、三大陸に於いて演ぜし役目を準備してゐるやうに思はれた。

彼等の所謂古代史たる無智蒙昧なる時代に於いてすら、既に彼等は、その半島の上半に擴がり、イラク及びシリアに小王國を建設した。此の種族の或るものは埃及に住し、アビシニア人は彼等の系統を引けるもので、阿弗利加の全沙漠は、その相續財産のやうであつた。此の半島は、沙漠に依つて大亞細亞から分離されてゐたが、此のために征服せんとして來たる頻々たる遠征軍は、何時もその路を阻まれたのであつた。で彼等は依然として自由であつた、それで己れの血統、その種族の高貴なること、その不羈奔放なる勇氣及びその混り氣なき言語とを自慢してゐた。其他、彼等は、南方及び東方の商業の中心點に隣接してゐた、それ故商業を營めるあらゆる國民に關する知識を獲るに便利であつた。而して彼等は、その國土が好都合なる位置を占めてゐたところから、その商業にたづさはることが出来、且たづさはらなければならなかつた。かくして此處には、アルタイやウラルには發生することが出来なかつた精神的文化が既に早くより生ずるに至つた。亞刺比亞語は、彼等がその書き方を知

る以前に、已に長らく、寓意的の演説や格言となつて發展してゐた。希伯來人は、シナイ山上で律法を受け、而して殆んご常に彼等の間に住んでゐた。基督教徒が成立し、而して互に迫害し合ふやうになるや、基督教の宗派すら彼等を頼りとするに至つた。従つて、かやうな民族の下に於いて、かやうな言葉で、猶太人、基督教徒及び亞刺比亞自身の思想の混淆から、適當な季節に新しい花が咲き出でざるを得ないではないか。而してまたそれが現るれば、此の三大陸間の海角から、商業、戦争、遠征及び著書に依つて、それが最も廣く普及せられるのは當然であらう。それ故かくも乾燥した土地から芽生えた亞刺比亞の名譽の香氣馥郁たる灌木は、之に花を開かしむる術を心得てゐた人物が現はれるや、全く自然的奇蹟である。

七世紀の初頭に、かゝる人物が現はれた、彼は、國民、種族、時代及び國土の與へることの出來た一切のもの、の奇妙なる混淆であり、商人、豫言者、演説家、詩人、英雄及び立法者であつて、亞刺比亞風であらゆるものであつたのである。モハメツトは、亞刺比亞に於ける最も高貴なる種族の出身で、最も生粹の方言及び古代の國民的遺物の保存者、即ちカアバから出たのである。此の眉目秀麗なる小供は、富裕ではないが、世人より尊敬されてゐた人の家庭で養育された。既に彼は、青年時代に、全國民の名に於いて、神聖なる黒い石を再び其の場所に置くべき名譽を擔ふた。彼は早くより商用旅行に依つて、他民族や宗教に關する知識を得、後には又多額の財産をさへも作ることが出來た境遇にあつた。人が非凡なる若者として彼に與へた頌辭、彼の種族や血統の尊貴及びカアバそのものに於ける彼自身の青年時代の仕事、是等は疑ひもなく彼の心に深く銘したことであらう。彼が

基督教の情勢から受けた諸々の印象も、之に附け加はつた。古代史からの幾百となき物語を以つて飾られてゐるシナイ山は彼の眼前に屹立してゐた。神的靈感と天恵とに對する信仰は、是等の宗教に共通なものであつて、この民族の考へ方に特有にして、且彼自身の性格にも心よいものであつた。是等一切のものは、恐らく彼が默想的生活を送れる十五年の間に、彼の魂に非常に深き影響を及ぼしたことであつたらう。その結果彼は、自らを豫言者であり、祖先の宗教の教義や義務を復活し、而して神の奴僕として示現せんがために選ばれたる非凡なる人物であると信じた。彼の昇天、彼の生活及びコオランそのものが、彼の構想の如何に熾烈であつたかを示してゐるに止まらず、その豫言者といふ天職の妄想には、何等の人爲的に企てられた瞞着をも必要とはしなかつた。モハメツトは、氣短な青年として現はれて出たのではなくして、四十歳に至つて初めて世間に出て來たのである。彼は、先づ初めは殆んど餘り知られてゐない家庭の豫言者として、三年間に辛うじて六人の歸依者を得、而して己が天職をかの有名なアリの饗宴に於いて、四十人の同種族の人々に告げ、それからといふものは、言ふまでもなく豫言者を信用せざるものゝあらゆる反對をどし／＼引き受けたのである。彼の歸依者達が、彼のヤトレブ（メチナ）への亡命から彼等の年を數へるのは正當である。メツカに於ては、彼の計畫が水泡に歸すか又は彼の生命がなくなつたか何れかであつたらう。

かくして、もし彼がその種族に於いて認め、又基督教に於いても、一つの神の教に對する高き靈感及び純潔、祈念及び善行に依つて神に仕ふる仕方と並んで、見出し得ると思はれた、偶像禮拜といふ愚なことに對する懺忌

の念が、かの豫言者たる天職の根據をなすが如く思はれたとすれば、猶太教や基督教の腐敗せる傳統、この國民の詩的な考へ方、その種族の方言及びその個人的天賦は、謂はば自らを越え、自から以外に彼を運んだ翼とも云ふべきであつたらう。詩歌と雄辯と無智と伶俐と傲慢との奇妙なる混淆たる、彼のコオランは、彼が自他俱に欺いたかの天賦と缺陷、かの性向と缺點、自己欺瞞と急場逃れとを、他の如何なる豫言者のコオランよりも遙かに巧みに現はした彼の心の鏡であつた。偶然の機會や又は彼が熱心に冥想に耽つてゐる場合には、叙述の方法などを一向考へずに、いきなり端的に斷片的に言ひ現はすのであつた。之は、彼の奔放なる構想の發露であり、他日に至つては彼自らが、何等か彼の力以上の、獨り彼にのみ與へられた神的天賦として驚歎した、激勵叱咤するところの豫言者の演説であつた。従つて彼は、自己催眠にかゝれる強固なる意志を有せる人物の如く、結局最も狂暴なる敵からも強奪することが出来るやうな信仰を要求したのである。彼は亞刺比亞人の主といふ譯にいかなかつた。それだから彼は、既に全隣接諸國、即ちベルシヤ、エチオピア、エイム、否希臘皇帝にすらその教義を傳へる使徒を派遣した。といふのは、彼は、これがよし國民的であるにせよ、あらゆる民族の宗教であると思つてゐたからである。彼が使者の歸朝に際して、諸國の王の拒絶を聞いて、彼の口から出た激烈なる言葉は、懺悔の章に於けるコオランの有名なる文句と並んで、豫言者自身の天折せるため果すことが出来なかつた所の民族の改宗をなすべき充分なる根據を彼の後繼者に與へたのである。悲しい哉、此の點に就いては基督教が既に先鞭をつけてゐた。此の基督教はあらゆる宗教のうちで、率先してその信仰をば、至上の幸福を得る必須の要件として

他國民に無理押し付けをしてゐた宗教である。しかし亞刺比亞人は、密輸入、婦人及び僧侶に依つては改宗されず、却つて、沙漠の人に相應しきが如く、手に劍を持ち、口に「入貢せよ、然らずんば信仰せよ」と叫ぶ要求に依つて改宗せしめられたのである。

モハメットの死後、戰爭は、恰も沙漠からの熱風の如く、バベル、シリア、ベルシヤ、エチプトへと擴つて行つた。亞刺比亞人は、コオランの言葉と樂園の希望とに武装されて、神の奉仕に赴くが如き心持ちで、出陣したのである。また彼等亞刺比亞人は個人的徳性を缺いてはゐなかつた。蓋し、モハメット家の初代のカリフ（彼等の盲目的狂熱は別として）は、公正な、中庸を得た非凡なる人物であつたやうに、軍隊も亦カアレツド、アムルウ、アブウオバイダア及び其他多くの人々の如き勇敢にして聰明なる將軍に指揮されたからである。彼等はベルシヤ人やギリシア人の國は、非常に悪化する状態に在るを見出した。基督教の各宗派は互に相敵視し、到る所に、不忠實、逸樂、利己、謀反、華美、橋慢、殘虐及び壓迫が甚だしく行はれてゐたので、此の戰爭の恐ろしき物語を讀むと羊や山羊の欄の中や、肥えた牛、華美な孔雀及び角のない小羊の充滿せる農園の中へ侵入せる一群の獅子の物語を讀むが如き感を起させる。是等の墮落した民族は、大部分輕蔑すべき人種であつて、軍馬を御することを知らなかつたからして、驢馬に乗るに相應はしかつた。彼等に教會を防禦することが出来なかつたからしてその塔上にある十字架に値せざる徒輩であつた。扱てこの茫漠たる沃地に於いて、如何に多くの教長、長老及び僧侶の豪華が今や突如として槿花一朝の夢に歸したることよ。

之と同時に、基督教すら壊滅することの出来なかつた、かの古代希臘の文化や羅馬人の豪華の殘餘が、恰も地震に依れるが如く、滅びてしまつた。世界最古の都會やその中に存せる非常に貴重なる財寶は、初めのうちは金錢の價値すら殆んど知らなかつた慄悍なる盜賊の手中に歸した。特に學問の記念碑の遭遇せし運命は、痛ましき極みである。文法家、ヨハンは、征服者アムルウが嘗て一度も氣が付かなかつたアレキサンドリアの圖書館を貰ひ度いと願つた。(此の馬鹿者はこんな贈物を貰つて如何するつもりであつたらうか)その請願書はカリフのオオマルに提出されたが、彼は之に對してかの有名なる推論を以て答辯を與へた、而してこの答辯は今なほカリフの推論と稱せられる價値があるのである。かくしてあらゆる典籍は焚棄せられてしまつた。之に依つて、千以上の温浴は六ヶ月の長きに亘つて沸かされたのである。されば最も價値ある思想、必要缺くべからざる記録、古代世界に於ける刻苦精勵の餘成れる學問の系統は、是等に幾十世紀の間依據してゐたものと俱に、文法家の愚かなる願とカリフの敬虔的愚鈍とに依つて失はれてしまつた。亞刺比亞人は、數百年後に至つて、その價値あることを知るや、喜んで此の財寶を復活したであらう。

モハメットが死去から殆んど間もなく軋轢が起つた、而して之は、もし長い間壓迫された、大膽にして正直なるアリヤその息子のハツサンがオミヤアド家に席を譲らなかつたならば、三代目のカリフのオスマンの死後、亞刺比亞人の征服を直ちに止めることが出来たかも知れなかつたであらう。モアウイアと俱に、此の王家は今や、九十一年の間連綿として承繼して來た高僧の席に就いた。ダマスクスがカリフの居住地となつた。亞刺比亞人は、

やがて海軍國となり、而して連綿として統治が繼承されて行くうちに、從來の如き質朴なる風は失はれて、豪華が宮廷に這入つて來た。實際、シリア、メソポタミヤ、小亞細亞及び阿弗利加に於いては征服がなほ續いて行はれてゐた。當時コンスタンチノオブルは一再ならず攻圍されたが、それは徒勞に歸した。アル・ヴァリツドの治世には、トルキスタンが占領された。否遙か印度にまでも侵入して行つた。タリクとムウザは、スペインを征服して非常なる成功を收めた。而してムウザは、コンスタンチノオブルを越え、佛蘭西、獨逸、匈牙利を通じて嘗て羅馬人が幾百年かを費して併合したよりも遙かに廣大なる一大王國を建設せんとする異常なる計畫を抱懷してゐたのである。然し此の計畫は全く畫餅に歸して終つた。亞刺比亞人の佛蘭西への入寇は、悉く失敗してしまつた。彼等は、スペインに於いてすら、絶えざる暴動のために、各の地方をば相次いで失ふに至つた。コンスタンチノオブルにとつては、征服の時機は最早なかつた。寧ろ、オミヤアド朝の治世に、一度亞刺比亞の征服者たらんがために、土耳其民族が擡頭して來たのである。一般に、彼等の戰爭に於ける好運の最初の急流は、モハメット家が王座についたので、彼等最初の熱狂の三十年と共に過ぎ去つてしまつた。皇統連綿たるオンミヤ朝治世に於いては、幾多の内亂があつたので、征服は、ただ徐々に、屢々停滞しつゝ行はれたに過ぎなかつた。

次いでアバシツド家が現はれた。此の王家は、その居所を直ちにダマスクスから移して、二代目のカリフたるアル・マンズウルは、此の國の中心たるバグダツドに住居を定めた。カリフの宮廷は、今や光輝燦然たる光景を現出するに至つた。學問や藝術も亦此の宮廷に這入つて來た。アル・ラシツドやアル・マムンの名は、それに關

聯して永久に噴々たる盛名を馳せてゐるものである。けれども、此の王家の下に於いては、單に外國征服のみならず、此の王國そのものの保存すら出来ぬ有様となつたのである。現に、アバシツド家の二代目たるアル・マンヌールの治世に於いて、オミヤアド家の廢嫡されたアベドラマンは、スペインに別個にして獨立なカリフの職を樹立した、而して之は殆んど三百年の間繼續したが、後には十王國に分れ、一時多くの亞刺比亞王家の下に互に部分的に結合されたが、バグダツドのカリフの下に最早結合されなかつた。阿弗利加の未開國の西部海岸に於いて、アリの子孫の傍系たるエドリジイルは、フェツツ市を基礎とせる一王國を奪つた。ハルウン・アル・ラシツドの治世に、阿弗利加の彼の總督は、カイルヴァン（キレイネ）に於いて獨立した。此の總督の息子はシシリイを征服した。彼の後繼者、アグラビイトは、その居をチュニスに移した。其處に彼等は水道を附設した。而して彼等の王國は百年以上も續いた。埃及に於いて、獨立しようとする總督の努力は、最初は成功が覺付かなく思はれたが、遂にファテミイト家は、エドリジイルやアルグラビイト家を併呑して、フェツツからチュニス、シシリア、エチプトを越えて、亞細亞に至るまで擴まれる王國を建設するに至つた。かくして今やバグバツト、カイロ及びコルドヴァの三つのカリフの職が出来たのである。けれども、ファテミイト王國も亦、没落してしまつた。此の王國は、クルドとツアイリイトの二派に分れ、而してカリフの總理大臣たる、勇敢なザラディン（ゼラア・エツデン）は、その國王を退け、埃及にクルド王國を建設した。之は後に護衛兵（騎兵隊、奴僕）の掌中に歸した。しかし最後にはトルコ人がこれを奪ひ取つてしまつた。何れの地方に於いてもさうであつた。阿弗利加に於いて

は、ツアイリイト、モラベエデン、ムアヘエチャルが其の役目を演じ、埃及、波斯、シリアに於いては、あらゆる民族や種族からなる統治者がその役目を演じ、遂にトルコ人（ゼルドジュケン・クルドアタベケン、トルコマン、ムルケン等）が一切を所有し、而してバグダツド其物は襲撃に依つて蒙古人に略取されてしまつた。バグダツドの最後のカリフの息子は埃及へ遁逃し、其處でマムルケンは彼に有名無實のカリフの稱號を許し、遂に此の國がトルコ人に征服された際に、此の王位を退けられた十八番目の皇子は、コンスタンチノブルに送られたが、然し埃及に送り返された。其處に於いて、亞刺比亞の皇帝法王の全系列が、最も傷ましき最後を遂げたのであつた。亞刺比亞の光輝燦然たる王國は、土耳其、波斯、蒙古王國の中に没入してしまつた。其各部分は基督教徒に支配されるか、又は獨立したかしたのである。かくてその王國の民族の大部分は、今なほ久遠の革命の眞只中に續いて生存してゐるのである。

此の老なる獨裁君主國の急速なる没落並に此の國家を絶へず分裂し轉覆せしめた革命の原因は、事實そのもの、即ちこの王國の起原や制度のうちに横つてゐるのである。

(一)「亞刺比亞王國は狂熱主義の徳から生れたものである。而して此の徳に依つてのみ」即ち勇敢と掟に對する忠誠とに依り、沙漠の徳に依つて、この王國は維持されたのである。もしかのメツカ、クウファア或はメチナのカリフが、その最初の四人の偉大なる祖先の嚴格なる生活様式に依然として止つて居り、而してすべての總督や將軍をしてその職務を嚴守せしめるといふ魔術を持つてゐたならば、如何なる強國もこの民族を害する譯に行か

なかつた。しかしかくも風光明媚なる多くの國土を所有してゐたことが、尨大なる商業に依つて、富、華美及び奢侈を導入し、而してダマスクス、否更にバグダッドに於けるカリフの相傳的王位は、赫々たる光彩を放つてゐて、これを叙述すると、恰も亞刺比亞夜話の饗宴といふ小話を讀むの感があつた。茲に於いても亦、豪奢は文弱を生み、而して遂に洗煉され過ぎた懦弱は、粗野なる力のもとに屈するといふ、千度も地上に於いて演ぜられた芝居が繰返へされたのである。最初のアバシドは總理大臣を任命した。此の官吏の權威は、彼の後繼者の下に於いて、首長の首長といふ驚くべき大なる權力となり、而してカリフそのものをすら制壓するに至つた。此の大臣の多くは、トルコ人であつて、カリフの護衛兵も同民族から成つてゐた。それ故、やがて此の君主國の全體を壓倒するに至る害悪は、その心臓のうちに坐を占めてゐた。亞刺比亞の國土は、高地に沿うて横つてゐた。この高地には、肉食獸の如きかの好戰的民族たる、クルド族、トルコ族、モンゴル族、ヘブライ族が見張をなし、而も彼等は大部分亞刺比亞人の支配を快しとしてゐなかつたので、折あらば復讐せんとする念は決して持たない譯にかなかつた。それで、羅馬帝國に起つたものが、茲にも起つた。大臣や傭兵が、支配者や獨裁君主となつたのだ。

(二)『亞刺比亞人の場合に於いては、革命が羅馬人に於けるよりも一層迅速に生起したといふことは、この王國の制度に因るものである。』此の制度は、回教々主中心であつた。四ち最も高い程度に於いて專制主義的であつた。法王と皇帝とは、最も嚴密なる方法に於いて、カリフと結びついてゐた。避くべからざる宿命に對する

信仰、コオランを從順に守れと命じた豫言者の言葉は、その後繼者の言葉、その總督の言葉にも默從すること要求した。従つて此の靈魂專制主義は、全王國の統治に移つて行つた。殊に、廣大なる領土を有する王國の遠隔なる地方に於いては、他人の專制主義から自分の名義に於ける獨裁專制へと移つて行くと云ふことは、全く容易であつた。従つて、殆んど到る所に於いて、總督は獨立の主權者となり、而してカリフの最も微妙なる統御法は唯その總督をば巧みに配置し、召還し、或は更迭する點に過ぎなかつたからして、例へば、マムウンが彼の勇敢なる將軍タアヘルに、コラサンに於いて過度の權力を許すや、彼はタアヘルの手中に獨裁權の手續を與へるに至つたのである。ギホンの彼方に横はる國土は、カリフの主權に依つて分離され、而して王國の中央に至るの道は、トルコ人に開かれたのである。かくしてそは、あらゆる總督官制に於いても同様であつたが、遂に此の尨大なる王國は、言語や宗教に依つても尙ほ殆んど結合せられることなく、内外に亘つて非常に不安なる孤島の海峽にも等しかつたのである。此の島帝國は、七百年の間に、屢々その境界を變じたが、遂に全體ではないがその大部分は、トルコ人の勢力範圍内に入れられた、亞刺比亞王國は、何等憲法を持つてゐなかつたのであるが、之は獨裁君主や奴隸にとつて最大の不幸であつた。モハメット王國の憲法は、神や總督の意志、即ち回教を服膺することである。

(三)『亞刺比亞帝國の統治は、或る種族に、而して本來から云へば此の種族のうちの或る一族に、即ちモハメット家に結び付いてゐた。』而して、殆んど始めから、正當なる相續人たるアリは廢せられ、長らくの間カリフの

職から退けられ、而してその一族と俱にそれから早速放逐せられたので、オミヤアド王家とアリ家との間に大いなる確執が起つたのである。而してこれは、一千年後の今日に至るまでトルコ人とベルシア人との間の激しき宗教的憎悪の念に依つて、今なほ繼續してゐるのである。また殆んどあらゆる地方に於けるかの血なまぐさき騒擾には、必ずオミヤアド朝か又はアリ朝かが参加してゐたのである。遠隔の地方には、モハメットの親戚と稱して、聖者振り、或は劍に依つて、諸民族を壓迫した詐欺師が現出した。否モハメットは、豫言者として此の王國を建設したので、種々の狂熱者は、彼の如く、此處彼處に於いて、神の名に於いて大膽に説くことが出来たのである。此の例証は、既に豫言者自身が親しく體驗してゐたのである。しかし、阿弗利加と埃及とは、かくの如き狂熱者や詐欺師の活躍せる特有の舞臺であつた。悲しいことではあるが、もし狂信や盲目的輕信と云ふ恐ろしきものが他の宗教に再び現はれるやうなことがなかつたならば、モハメットの宗教だけで盡きてしまつたと信ずることが出来たのであらう。しかし、『山上の古代人』の専制主義は、何處に於いてもこれ以上に出でなかつた。熱練せる、否生來の暗殺者の無類の一國家のこの王は、その如何なる家來にも謂つて曰く「行つて、殺せ」と。彼は、己れの生命を犠牲にしたけれども、之を實行した。而して此の暗殺の國は一世紀の間維持された。

五 亞刺比亞王國の影響

更に寒冷なる土地に於いて満足に咲くには殆んど十世紀以上もかゝるやうな花の満開期が、カリフ王國の擴大や分離と等しく、迅速にやつて來た。東洋の植物が早く開花期に達するに至る原因たる、より温暖なる自然の力は、此の民族の歴史にも現はれてゐる。

(一)『老なる亞刺比亞商業帝國』は、全世界に影響を及ぼした、而して其の影響は單にその國土の位置のみならず、その國民性からも由來せるものであつて、その所有を失へる後もなほ存し、而してその一部は今に持續してゐる。そのうちからモハメットが現はれて來たかのコオライシユ族、否此の豫言者自身が行商隊の指揮者であつた。而して聖地メツカは、古來諸民族の一大交易の中心地であつた。亞刺比亞と波斯との間に介在する灣、エウフラアト河及び紅海沿岸の港は、古代から印度商品の世に知られたる航路であり、且貯藏所であつた。従つて印度から來たものは、亞刺比亞の商品と云はれ、而して亞刺比亞産出の貨物は、印度品と稱せられた。此の活動的な民族のうちの或る種族は、既に早くより、阿弗利加東海岸を所有してゐた、而して羅馬人の時代にすら印度貿易の道具の役を務めてゐた。従つてエウフラアト河とニル河との間、否インダス河、カンヂス河及びオクスス河から大西洋、ビレネイ及びニゲルに至るまでの廣大なる國土がこれらの國民の領地であつて、その植民地はカフィル族の國にまで及んでゐたので、彼等は、一時は世界最大の商業國民となることが出来たのである。之がためにコンスタンチノオブルは困窮に陥り、アレキサンドリアは衰頽して一寒村となつてしまつた。然るに、オオマルは、チグリス河とエウフラアト河との合流地點に、一時東方諸國のあらゆる商品の離合集散を掌つてゐた

パルソラの都を建設した。オムミヤアド朝治世には、ダマスクスが帝都であつた。而してダマスクスは、實に、古代の大いなる商業の倉庫、その樂園的位置を占めてゐたる隊商の自然的中心地、而して富と技術工藝の中心地であつた。既に阿弗利加に於いては、モアヴィヤ朝の治世に、カイルヴァンの都市が建てられ、後にはカイロが建立せられた。而して、世界の通商貿易は、スエズの地峽を越えて此所までやつて来た。阿弗利加内地に於ける亞刺比亞人は、金屬商や護謨商を營み、ソファアラの金鑛を發見し、トムブウト、テルマアゼン、ダラアの諸國を建設し、東部海岸には立派な植民地や商業都市を築き、否マダガスカルに至るまでも植民をなしたのであつた。ヴァリツドの治世に、印度がガンヂス河やトルキスタンに至るまでも征服されて以來は、西方諸國と極東諸國とが結合されるに至つた。亞刺比亞人の對支貿易は、早くより一部は隊商に依り、一部は海上遙かに廣東と取引した。彼等は、支那からブランドイを持つて来た、これは最初亞刺比亞人が研究した化學に依つて、後には盛んに製造されるやうになつた。歐羅巴にとつて幸福なことには、此のブランドイが、亞刺比亞人の飲料たる有害な茶とコオヒイと俱に我大陸に擴まるやうになつたのは、數百年も後のことであつた。磁器の知識、恐らくまた火藥の知識も、支那から亞刺比亞人の手を経て歐羅巴へ傳へられたのである。彼等はマラバル海岸を支配し、マルデイヴィア島を訪ね、マラツカに店舗を造り、また馬來人に書くことを教へた。後に彼等はモロツコに植民地を築き、宗教を傳へた。その結果、ポルトガル人が此の海洋に到來する以前に、東印度の商業は、全く彼等の掌中に歸し、而も何等歐羅巴の仲介なく、東方及び南方に於いて貿易が彼等に依つて營まれたのである。歐羅巴全體に

變化を與へた。海洋上の大發見に、ポルトガに人を導いたのは、亞刺比亞人との戦争と、阿弗利加に於いても彼等を見出さんとの基督教的熱心とに依つたのである。

(二)『亞刺比亞人の宗教と言語』とは、此の三大陸の諸民族に非常に重大なる影響を及ぼした。即ち、彼等は征服せる廣大なる國土に於いて、到るところ回々教を説き或は入貢的服従を説いたので、モハメット教は、東はインダス河やギホンに至り、西はフェツツやマロツコ邊に及び、北は高架索やイマウスを越え、南はゼネガアルやカファイル人の國に至り、兩半島及び東印度多島海に擴がり、而して基督教そのものよりも遙かに多數の歸依者を得たのである。扱て此の宗教に依つて教へられる教義に關しては、次ぎのことは否定する譯にいかない。即ち、此の宗教は、回々教に改宗せる異端民族をば高めて自然の力、蒼空の星晨及び地上の住民を禮拜する粗野なる偶像教以上に出でしめ、而して彼等を、日々の祈禱、慈善的行爲、肉體の清潔及びその意志に默従することに依つて、神、創造者、世界の統治者及び審判者に對する熱心なる祈願者たらしめたのである。そは禁酒に依つて醜陋と喧嘩とを豫防し、不潔なる食物を禁ずる事に依つて、健康と節制とを促進せしめようと努めた。同様に此の宗教は、高利、勝利を得んとする遊戯、其他種々様々なる迷信をも禁じた。且此の宗教は、幾多の民族をば、未開な或は頽廢せる状態から文化の中段にまで向上せしめたのである。従つて回々教徒は、基督教徒といふ賤民の極端なる放逸、特に不純なる生活の仕方を深く輕蔑した。モハメットの宗教は、危險にして同時に有益ではあるが、しかし本來から云へば價值あり、且尊重すべき一種の心の平靜及び人格の統一をば人間に刻み付けた。反之、此

の宗教が黙許してゐた一夫多妻、コオランに關するあらゆる研究の禁止、此の宗教が宗教界や俗界に打ち建てた専制主義は悪い結果を惹き起さざるを得まい。

然し、此の宗教が如何なるものであるにせよ、亞刺比亞の最も純粹な方言、全國民の誇であり喜悅である言葉に依つて、諸國に擴まつた。其故、之がために他の方言が驅逐せられ、而してコオランの言葉が、亞刺比亞の世界統治の光榮ある軍旗となつたことは、敢て怪しむに足らぬ。かくの如き會話語や文章語の共通の標的は、老なる領土を有し、繁榮を極めてゐる國民にとつて非常に利便である。もし歐羅巴の獨逸の征服者が亞刺比亞人のコオランを持てるが如く、獨逸語の古典を有してゐたならば、決して羅匈語がその主要語とならず、またその種族の多くのものは左様に迷妄の淵に沈まなかつたであらう。けれども、ウイフイラにしてもまたケエドモン或はオットフリイドにしても、モハメットのコオランが今尙其のあらゆる歸依者に於けるが如きものたることは出来なかつた。これ彼等の古い生粹な方言の擔保であつて、そのお蔭で彼等が、彼等の種族の最も眞純な紀念碑となり而して全地球上に一民族として残るのである。亞刺比亞人にとつては、彼等の言語は、最も貴重なる遺産と考へられ、而してこれは、今なほ、他の言語が決して結付けなかつた程多數の、東方及び南方諸民族の間の交通及び貿易の結帯を、多數の方言に於いて結び付けてゐる。希臘語に次いで、亞刺比亞語が恐らくこの一般的支配を得るに最も値してゐるものであらう。と云ふのは、かの地方のフランク語は、とにかく亞刺比亞語に比較すればみすほらしき乞食の外套のやうに見えるからである。

(三)『學問』は、此の豊富にした優美な言葉に於いて發達した。それは、アル・マンスウル、ハルン・アル・ラッヅド及びマモンがそれを覺醒せしめて以來、アバジツドの王城の地たるバグダツドから、東北に、しかし主として西方に向ひ、而して廣大なる亞刺比亞全土に繁榮するに至つた。バルゾオラ・クウファ、サマルカンド、ロゼツテ、カヒラ、チュニス、フェツツ、マロツコ等の諸都市は、有名なる學校であつた。その學問は、波斯人、印度人、韃靼の諸國、否支那人にさへも傳へられ、而して馬來人に至るまで、亞細亞や阿弗利加が何等かの新しい文化に到達するに至つた手段が傳へられたのである。詩歌と哲學、地理と歴史、言語學、數學、化學、醫術は、亞刺比亞人に依つて研究され、而してその大部分に於いて、亞刺比亞人は、發明者や普及者として、從て益を與へた征服者として諸民族の精神に影響を及ぼしたのである。

詩歌は彼等の古き遺産で、カリフ寵愛の娘に非ずして、自由の生める娘であつた。此の詩歌は、モハメット出現前に既に榮えてゐた。蓋し、此の國民の精神は詩的にして、幾千百の事象はかゝる精神を覺醒せしめたのである。その國土、その生活法、そのメツカへの巡禮、オツカアドに於ける詩歌競技、その種族の新に出現した詩人に與へたる名譽、その言葉、その傳説に對する誇、冒險や戀愛や名譽を得んとする性向、その孤獨、その復讐の念、その放浪的生活、すべて是等は、彼等をば覺醒して詩歌を創めしめ、而して彼等のミュウズの神は、立派な譬論に依り、自尊的にして偉大な感覺に依り、聰明な格言に依り、而してその歌はれた對象の稱讚と非難とに於ける測るべからざるものに依つて著名となつた。その心意は、天に沖する險しい岩の如くに立つてゐる。沈黙

の亞刺比亞人は、其の劍の火花にも似た焰の如き言葉を以つて語り、その箴から抜き取られて弓につがはれた矢にも似た機智を以つて語るのである。彼の天馬は駿馬でありて、時には見苦しいものもあるが、しかし賢く、忠實にして疲勞することがない。然るに、その言語と同じく、亞刺比亞人から出て來た波斯人の詩歌は、その國土や國民性に従つて、更に肉感的な、柔らかい、面白きものとなり、此の世の樂園の娘となつた。而して、假令此の兩者の何れも、叙事詩、頌歌、俚歌の希臘的藝術形式、特に戯曲の夫れを知らず、また、此の兩者が之を知つた後と雖も之を模倣しようとしなからば或は模倣する譯にかなかつたにしても、而も正しく此の故に、波斯人や亞刺比亞人の特有なる詩人的才能は、更に一層明かに完成し美化されたに過ぎなかつた。如何なる民族と雖も亞刺比亞人がその黄金時代に持つてゐたやうに、多數の詩歌の熱心な保護者を持つてゐたと誇ることは出来ない。亞細亞に於いては、そは此の熱情をば、韃靼の王侯や貴族にまでも押し擴げ、スペインに於いては基督教徒たる王侯や貴族にまで弘めた。リモザン即ちプロブンスの詩歌の學問は、隣りの亞刺比亞人なる其の敵に依つて、謂はば奮起させられ、目を覺された。かくて歐羅巴はまた、粗雑にして徐々ではあるが、漸々更に洗煉せられた激刺たる詩歌を聴く耳を獲るに至つた。

特に東洋に於いては、詩歌の最も物語的部分から、「童話」が發展して來た。古代の口碑に傳れる種族物語は、時の進展につれて既に童話となり、而してかゝる物語を語る民族の構想が、誇張されたもの、理解せられぬもの、高尚なるもの及び不可思議なものに向うと、平凡なものは珍奇なものに、未知のものは異常なものに高めら

れるであらう。而して遊惰なる東洋人は、その幕登に於いて、旅行に際して又社交場裡に於いて、自分の樂みや教訓のために、喜んで是等の物語に耳を傾けるのである。既にモハメットの時代に、波斯の商人は、面白い物語を持つて亞刺比亞人の間に入り込んで來た。その物語についてはモハメットは、コオランにある寓話よりも優れてゐやしないかと懸念したのであるが、實際東洋的構想の最も面白い詩は、波斯の起源であるやうに思はれる。波斯人の快活な饒舌やその華美を愛好する念は、やがて、彼等の古代の傳説にロオマンテイクな英雄形式を與へるに至つた。而してその形式は、殊に附近の山間に棲む動物から取られた想像力の作物に依つて非常に高められた。かくしてかの妖精の國、即ちペリヤネリの王國が生れたのである。——これに對しては、亞刺比亞人は殆んど名前を與へてゐなかつた。——此の王國は、歐羅巴の中世紀の小説にも豊富に現はれてゐる。是等の物語は、ずつと後に至つて、亞刺比亞人の手に依つて蒐められた。其處に於いては、特に、彼等のカリフなるハルン・アル・ラシッドの光輝ある統治が事件の場面となつてゐる。而して此の形式は、歐羅巴にとつて、微妙なる眞理を信すべからざる事件の物語の衣服の背後に隠し、處世の最も洗煉された教訓を單なる娛樂の調子を以つて述べる新しい模範となつたのである。

吾々は童話から轉じてその姉妹たる亞刺比亞人の「哲學」に向ほう。亞刺比亞人の哲學は、東洋流に本來コオランを基礎として形成されたのであつて、アリストテレスの翻譯によつて始めて學的形式を得たものである。一神に關する純粹概念は、モハメットの全宗教の基礎であつたので、亞刺比亞人が此の概念と結合せられ、それか

ら引出され、而して又形而上學的に直觀せられ、高き頌詞、金言及び規準の題目とならぬやうな思辨は、考へられないのである。彼等は形而上學的詩の綜合を殆んど用ひ盡し、而して道德の崇高なる神秘と結婚した。彼等の間には、互に論争するに當つて已に純粹理性の纖細なる批判を行つた、否それどころではない、中世のスコラ哲學に對して、與へられた概念を歐羅巴的、基督教的教義に從つて醇化することより他、殆んど何物をも殘さなかつたやうな諸學派が現はれたのである。かう云ふ形而上學的神學の最初の學者は猶太人であつた。後にそれは新に建てられた基督教大學に移つたが、其處ではアリストテレスは先づ希臘風ではなく、全く亞刺比亞風に見られ、而して學派の思辨、論争及び言語を非常に琢磨し醇化したのである。かくして無學なモハメツトは、最も博學多識の希臘の思想家と俱に近代の全形而上學にその方向を與へたといふ名譽を分つのである。而して幾多の亞刺比亞の哲學者は同時に詩人であつたので、中世に於いては、基督教徒の間に於いても、神秘説が何時もスコラ哲學に伴ふてゐた、といふのは、兩者の限界が互にはつきりしてゐないからである。

『文法』は亞刺比亞人に依つて、その種族の名譽として研究された。その結果、彼等は、その言語の純粹性と優美とに對する自慢の念から、そのあらゆる言葉と形式とを數へ舉げた。而して己に早く學者は六十頭の駱駝に辭書を積むことが出來た。かやうな學問に於いても、猶太人は亞刺比亞の最初の弟子となつた。彼等は亞刺比亞人のやり方にならつて、その古い甚だ簡單なる言語の文法を作り上げようとした。而してそれは最近に至るまで基督教徒の間にすら行はれてゐた。然るに、人は現代に於いて、此の亞刺比亞語からも亦、溯つて希伯來の詩歌

の自然的意味を探り、比喻であるものを比喻と見做し、而して誤れる猶太の訓詁學の幾多の偶像を地上から驅逐すべき生ける模範を得たのである。

『歴史』の叙述に於いては、亞刺比亞人は希臘人や羅馬人程幸福ではなかつた。といふのは、彼等には自由なる國家といふものがなく、従つて國家的事業や事件の實用的分拆の練習が缺如してゐたからである。彼等は無味乾燥にして簡單な年代紀を書くことが出來たに過ぎなかつた。若しくは、傳記を書く場合には、その英雄を詩的に讚美し又はその敵を不當にも非難するといふ危険があつた。冷靜な歴史家的文體は、彼等の間には發達しなかつた。即ち彼等の歴史は詩であるか、又は詩と交錯してゐるのである。反之、彼等の年代記や、彼等が知る機會を持ち、而して今尙吾々には知られてゐない土地、例へば阿弗利加内地に關する地理學の如きは、非常に有益なるものである。

最後に、亞刺比亞人の最も決定的な効績は、數學、化學及び醫術に現はれてゐる。彼等は、是等の學問に於いてそれらを増加發展せしめて、歐羅巴の師匠となつた。既に、アル・マムンの治世に、バグダッドの近傍のザンヤル平野に於いて、地球の度が測定された。天文學に於いては、よし少なからず迷信を用ひねばならなかつたにせよ亞刺比亞人に依つて、天體儀、天文學の表や其他種々様な機械が非常に熱心に作られ改良された。之れがためには、此の廣大なる王國の良好なる氣候と澄み互れる蒼穹とが與つて力があつた。天文學は地理學に應用された。彼等は、歐洲に於いて考へられたより遙かに以前に、地圖を作り、かくして幾多の國土をば統計的に概觀するに

至つた。彼等は、天文學に依つて年代計算を定め、星晨の運行に關する知識を航海に利用した。天文學上の幾多の術語は、亞刺比亞語であつた、而して一般に此の民族の名は、何等かに於いてあらはれ得るよりも更に持續的な文字を以つて星晨の間に記されてゐる。彼等の數學的、殊に天文學的勞作の結果成れる書物は無數にある。その大部分は未だ世に知られずにあるか、又は用ゐられずにあるのである。此の汗牛充棟も嘗ならぬ莫大なる典籍は、戰爭、火災、不注意或は無智濛昧に依つて、滅亡してしまつた。之に依つて、人間精神の最も高貴なる學問は、韃靼、蒙古、否隔絶せる支那にまでも傳へられるに至つた。サマルカンドに於いて、天文學の表が作られ、吾々が今なほ用ゐてゐる年代が定められた。現在の算術の記號、即ち數字は、亞刺比亞人に依つて作られたものである。代数や化學の名も彼等に由來してゐる。彼等は、幾百年の此の方依つて以つて人類が醫術のためのみならず物理學のあらゆる部門のために、自然の秘密を開くに用ゐるべき新しい鍵を獲得した、是等の學問の父である。彼等は此の方面に氣を取られてゐたために、植物學は左程研究しなかつたし、それに解剖學の研究は、法律上禁ぜられてゐたので、彼等は醫藥の製造に化學を應用し、病氣や氣質をば、其の外面に現はれた様子や兆候の殆んど迷信的な觀察によつて表示することが益々熾烈になつて來たのである。彼等の哲學に於いてアリストテレスが占め、數學に於いてエウクリッドやプトレメウスの取れる位置は、醫術に於けるガレエヌスやデイオスコリデスの夫と相比せらるべきものである。尤も、亞刺比亞人は、希臘人に次いで、單に人類にとつて最も必要缺くべからざる學問の保護者、普及者、發展者であつたばかりでなく、各地に於いてその贋造者となつたといふことは否

定すべくもない事實である。彼等がそのうちに於いて是等の學問を研究した東洋趣味は、歐羅巴に於いても永い間に粘着してゐて、容易に取り除かれることが出来なかつた。或る藝術、例へば建築術に於いても、所謂ゴチツク趣味と稱せられるもの多くは、本來亞刺比亞趣味であつて、それは、此の未開な征服者が希臘地方に於いて發見せる建物から、彼等一流のやり方で發展せしめ、且之と共にスペインに渡り、かくして其所から廣く擴つたのである。

(四) 最後に吾々は、なほ、彼等が疑ひもなく歐羅巴の冒險的精神に混じたところの燦然たる、ロオマンテイックな騎士的精神について一言して置かなければならない。然し、此の精神は、やがて自ら明瞭になるであらう。

六 一 般的 的 考 察

若し吾々が、當歐洲大陸が諸民族の移住と改宗とに依り、又戰爭や教政によつて達成した形態を回顧するならば、吾々は精力絶論ではあるが、しかも頼りない肉體、即ち唯眼だけを備へてゐない巨人を發見するであらう。此の古代世界の西端に於いては、十分人口が稠密であつた。豪奢を極めた結果衰微した羅馬の國土は、健全なる精神と強力なる肉體を具備せる人々に依つて充され、而して人口が益々増加するに至つた。蓋し、此の國の新し

は、永い間彼等の便宜のために樹立せられ、用意せられた、他の諸民族の眞只中であつた、此の未開民族の粗野なる満足にとつては、眞の樂園であつた。彼等は、遠征軍を起し、かくて人類を十世紀以上も逆行せしむるに至つた劫掠を敢て意に介さなかつた。といふのは、世人は未知の善事の損失には少しも感じないし、且感覺的な人間にとつては、極めて僅かな開墾の殘部しかないこの北方世界の西部地方は、如何なる點から見ても、かの古きサマルチエン、スキイチエン、或は遙か遠き東方匈奴の世界よりも更に價值があつたのである。基督時代以來のあらゆる荒廢、是等の民族の相互間に起れる戦争、歐羅巴を襲つた新しい傳染病や諸々の疾病のために、當大陸に住せる人類は非常に苦んだことは勿論であるが、專制的封建制度に依つて嘗めた苦しみ程甚しきものはなかつた。歐羅巴は人間に依つて充された。けれども肉體的奴隸の境涯にある人間で充されたのであつた。是等の人々を壓迫した奴隸制度は、益々苛酷を極めた。何となれば此の制度は、法律や盲目的因襲に依つて掟とせられ、聖書に依つて確證せられ、土塊に結びつけられた、基督教的奴隸制度であつたからである。空氣だけが自分のものとなつたのである。契約に依つて解放せられず、或は生れながらにして專制君主でなかつた人は、附屬即ち隸屬といふ外見上自然的状態に入つたのである。

然るに、羅馬からは何等の援助も期待することは出来なかつた。羅馬の僕は、他の者と俱に、歐羅巴の主權に參與し、而して羅馬そのものは、宗教的奴隸の群集の上に打建てられたのである。皇帝や國王が解放したものは、何人と雖も、騎士物語にあるやうに、特許狀に依つて、巨人や龍から奪ひ去られねばならなかつた。従つてか、

る遣り方は冗長にして困難であつた。西洋の基督教が持つてゐた諸々の知識は、分配せられ、而して有利に用ゐられた。その通俗性は、つまらない言語的禮拜式となり、惡しき長老的修辭法は、修道院、教會及び教區に於いて、多數の人々が刑杖と索繩とを以つて、否口に乾草をくはへて、懺悔しながらひさまづいて崇拜した魔術的な靈魂專制主義となつた。學問と藝術とは、全く地を拂つてしまつた。といふのは、殉教者の屍、鐘や風琴の馨香の煙や淨罪火の祈禱の中には、全くミュウズの神が住んでゐないからである。教政はその電光を以つて自由なる思索を窒息せしめ、而してその鞭を以つてあらゆる高尚なる活動を麻痺せしめた。忍べる者には、來世の應報が説かれた。壓迫者は、寄進をすれば、それに對して臨終の際無罪を宣言せられるに極つてゐた。即ち地上に於ける神の王國は賃貸されたのである。

歐羅巴に於いては、基督教會以外には、何等の救済もなかつた。蓋し、世界の一隅に、みじめな有様でうづくまつてゐた、虐げられた民族は言はずもあれ、希臘帝國からも、更に又、歐洲の東部、羅馬法王や皇帝の版圖以外に形成し始めた唯一の王國からも、何ものをも期待する譯にはいかなかつた。従つて、西部に於いては、彼自身、或は啓蒙の新しき萌芽が美しき花を開いた唯一の南方民族、即ち回々教徒を除いては、何も残るものはなかつた。やがて歐洲はその最も敏感なる地方に於いて彼等と長く干戈を交へることになつた。此の戦争は、スペインにあつては、歐洲の天地が全く晴れ互れる秋までも持續した。而して此の戦争の褒賞は何であつたか。勝利は何人の上に與へられたか。人類に新たに掘き起された活動が云ふまでもなく、戦勝の最良の褒賞であつた。

第二十卷

もし人が歐羅巴の東方諸國に對して起せる十字軍をば、正しく我が歐羅巴大陸に於ける大變動の時期と見るにしても、これをその變動の唯一にして最初の源泉と考ふことは避けなければならぬ。實に十字軍は、歐羅巴が百萬の人間を犠牲に供し、而して歸還せるものは大部分、蒙を啓かれずして却て我儘、厚顔無恥に、又奢侈になれる人間となつて歸れる馬鹿氣な事件であつたに過ぎない。その當時生起した善事は、主として、この時代に於いて更に自由な活動を有し、而も多くの點に於いて非常に危険なる善事を生んだ副因から起つて來たものであつた。且又如何なる世界的事件も孤立するものではない。それに先づ原因、即ち時代及び民族の精神に基いてゐるので、それは唯、その針が内部の懸錘によつて動かされてゐる所の時計の數字板と考へられるだけである。そこで吾々は進んで、各の齒車が一般的目的を達するが爲に協働してゐるかの歐羅巴といふ機械を概観しよう。

一 歐羅巴に於ける商業精神

自然が、かくも多くの海岸と入江とを以つてこの小大陸を限り、またかくも多くの舟行し得べき河川と大海とを以つてこの小大陸を貫通したのは決して無益の業ではなかつた。最古の時代からこゝに住める民族はこれらを舞臺として活動したのである。南部歐羅巴人にとつての地中海に相當したものは、北部歐羅巴人にとつては、己に早く舟行の練習所であり、また諸民族の交易の練習所たりしバルチック海であつた。吾々はガアル及びウエルス人の外に、フリース人、サクソン人、特にノルマン人がすべての西海及び東海、否そのみならず地中海をも遍歴し、而して様々な悪業善事を爲せるを見たのである。彼等は深い船底から大きな船にのぼり、大海に出で、而してあらゆる種類の風を利用することを知つてゐた、その結果、今尙、すべての歐羅巴の中で、羅針方位點と海上事象の多くの名稱は獨逸の名稱である。特に琥珀は希臘人、羅馬人及び亞刺比亞人をすら誘惑した玩具であり、而して又北方の世界を南方の世界に知らしめた。琥珀は、マルセイユから舟によつて、海洋を越え、陸上からは、カアヌドを経てアドリア海、ドニエブル河によつて黒海に、莫大なる數が、運ばれた。就中黒海に至るの道は、北方の世界と南方の世界と東方の世界の民族の交易の道であつた。ドン及びドニエブルの兩河口の二大商業地、アゾフ（タナイス、アスガルド）とオルピア（ポリステン、アルフハイム）とは韃靼、印度、支那、ビザンツ、埃及から主として北部歐羅巴に來た商貨の貯藏所であつた。またこれは地中海を越えるに便利な道として通過され、十字軍の時代以來この東北の商業が營まれた。スラヴ人がバルチック海岸の大部分を占領して以來、彼等はその海岸に沿うて、繁榮なる商業都市を建設した。その島々及び對岸に住める獨逸民族は彼等と競争し而して利

得と基督教との爲にスラヴ人のこの商業が減されるに至るまで止まなかつたのである。今や獨逸民族はスラヴ人の代りにならうとし、而して眞のハンザ同盟が成立する前風に、次第／＼に海上共和國の一種、商業都市同盟が出来てゐた。之は後に大ハンザ同盟に進展したものである。掠奪の時代に、北部には海賊王があつたやうに、今や安全と協同援助といふ眞の原理の上に建てられた、多くの都市より結合された、擴大せられた商業國家は恐らくすべての商業的歐羅巴民族の未來の狀態の模範であつたであらう。多くの北部海岸、特に最も早く獨逸の移住民を以つて充されてゐたフランドルに於いては、勤勉と有用なる職業とが榮えた。

然し勿論、歐羅巴大陸の内部の制度はその住民の向上的活動には最も便宜なものとは云へなかつた。何んとなれば、殆どあらゆる海岸に於ける海賊の奪掠が、屢々最後の計畫を悲惨な結果に了らしめただけではなく、また陸上に於いては、すべての民族の中に今尙狂ひまはつてゐる戦争精神並に之から生じた封建制度はかの住民の活動に對して幾多の妨害をなしたからである。野蠻人が歐羅巴の國土に分散後の最初の時代に於いては、すべての國民の各員がなほ一層の平等の權利を與へられ、古い住民は一層やさしき取扱を受けた時に於いては、一般的勤勉に缺けてゐるものは唯、鼓舞激勵のみであつた。たとひ多くのテオドリツク、カロロ、アルフレッドが生存して居つたにしても、これを避けることは出来ないであらう。然しすべてのものが奴隸の軛をかけられ、世襲的階級が飽飲放食と華美贅澤とを以つて其の借地人の辛苦勤勉の結果であると併稱し、而してあらゆる利益ある職業を以つて恥となし、且又あらゆる技術工業的精神がその術を行ふことを許されるが爲には、赦免狀乃至租税によつて始

めて邪神の強制から救はれねばならなかつた時には、すべてのものが實際束縛せられてゐた。識見ある君主は出来るだけのことをした。即ち、彼等は都市を建設し、而して之をよく保護し、藝術家及び手工家を擁護し、商人否、ヘプライの高利貸すらその裁判權の下に保護し、商人には關税を免除し、高利貸には屢々有害なる商業の自由を與へた、それは彼等には猶太の金が必要であつたからである。然し、かくの如き状態にも拘らず、歐羅巴大陸にはやはり人間の勤勉の自由な使用も流通も生じなかつた。すべてのものは孤立し、分離し、惱まされた。かくして南方の機敏と好時機とが一時北方の勤勉に優つたといふことは最も當然のことであつた。然しそれは、ほんの一時であつた。蓋しヴェニス、ゼノア、ピサ、アマルフィに於いてなされたすべてのものは、地中海内に止まつてゐたのであるが、大洋及び大洋と共に世界は北方の航海者のものであつた。

ヴェニスは羅馬のやうにその沼地に成立した。始めは野蠻人の侵入の場合、近づき難い貧しき島に通れて出来るだけ身を養つてゐたものの隠れ場所であつたが、後にバヅアの古い港と合して、陸地と島とを結び付け、一つの政體を得、而してそれが始めたみぢめな魚と鹽との商賣から、數世紀を経て歐羅巴第一の商業都市となり、あらゆる周圍の國々に送る物資の貯蓄所となり、多くの王國の所有となり、而して今尙一千七百九十七年まで最も古くして、決して征服されなかつた自由國家の名譽を擔ひ得るまでになつた。ヴェニスは實にその歴史によつて、多く

の商業國家が證明したもので、即ち、人は不斷の勤勉を賢明と結びつける限り、無からすべてとなり且又最も迫れる破滅を防ぐことが出来るといふことを證明した。後にヴェニスは沼澤より身を脱して、恰も泥土の憶病な動物のやうに大海の汀に於いて一片の地を求め、次に數歩を進めて最も富裕なる帝國の恩恵を受ける爲に、弱きラベナの大守を幫助した。その報酬としてヴェニスは己れの願ひ求めてゐたもの、即ち當時世界の主要なる商業の營まれてゐたこの帝國に於いて非常な自由を得た。亞刺比亞人が勢力を得、而してシリア、埃及、否地中海の殆どあらゆる海岸と共にその商業をも所有してしまふに及んでも、ヴェニスは大胆に且巧にアドリア海に於いてその攻撃に抵抗し、好時機に彼等と協商し而してそれによつて測るべからざる利益を獲て、すべての東洋諸國の富の貿易者となつた。従つて、香料生糸すべて東洋の贅澤品は、豊富にヴェニスを経て歐羅巴に入つて來たので、殆ど全ロンバルデイはその物資の貯藏所となり、ヴェニス人及びロンバルド人は猶太人と相並んで全歐の仲買人となつた程である。北方諸國の一層有利な商業はこれが爲に一時非常なる苦境に陥り、而して今や富裕なるヴェニスは匈牙利人及び亞刺比亞人に壓迫されて、また一足を大陸に置くに至つた。彼等は希臘皇帝とも亞刺比亞人とも争はずしてコンスタンチノオブル、アレボ及びアレキサンドリアを使用することが出来、而して恐ろしき熱心を以つて、遂にそが己れの掌中に歸するに至るまでノルマン人の商業的計畫に對抗した。彼等及び彼等の競争者が東洋から齎した贅澤品、彼等が之によつて獲得した富は東洋の光輝に關する巡禮者の話と共に歐羅巴人の心情の中に基督の墳墓よりもモハメット教徒の財産に就いて、更に大なる嫉妬の念を燃さしめた。十字軍の勃發した時等は伊太利の

商業都市ほゞそれから大きな利益を得たものは誰もなかつたのである。彼等に海を越え多くの軍隊を送り、糧食を輸送し而して之を以つて晉に、莫大なる富を得たのみならず、また新征服地に於いて、新しき自由と貿易の場所と財産とを得た。就中ヴェニスは幸福であつた。何となれば、ヴェニスは十字軍を以つてコンスタンチノオブルを占領し、こゝに羅甸王國を建設することに成功したので、ヴェニスはその同盟者と戦利物を有利に分配し、後者は少しものをば僅かに短日月の間に獲たのであるが、然し彼等はその商業に役立つたすべてのもの、即ち、希臘の海岸と島とを得た。彼等は長い間この所有を失はず尙著しくこれを増加した。幸運に由つてか又は用心に由つてか彼等は競争者及び敵が企てたすべての危険を避けることが出来たが、遂に事物の新しい秩序、即ち葡萄牙人の阿弗利加の周航、土耳其帝國の歐羅巴への闖入によつて、アドリア海に押し込められるに至つた。希臘國の掠奪物、十字軍の掠奪物及び東洋貿易の掠奪物の大部分は彼等の都市と一緒に運ばれた。その結果は善惡ともに伊太利、佛蘭西及び獨逸、特にその南部一圓に擴まつた。彼等は當時の和蘭人であり、而してその商業勉勵を外にし、多くの職業及び藝術を外にして、持續する政體によつて、最も多く人類の書物の中に書き込まれた。

ゼノアはヴェニスよりも早く、大貿易と地中海支配の時代に到達してゐた。始めは希臘貿易に、後には亞刺比亞貿易に參與した。而してゼノアは、地中海を確保することを以て己の責任問題としたので、單にコルシカ島のみな

らず、また基督教の西班牙の王侯の援助を受けて阿弗利加の多くの場所を占領し、而して海賊共に平和を命じた。ゼノアは十字軍に於いて非常に活動した。即ちゼノア人はその艦隊を以つて軍隊を保護し、最初の遠征に於いてはアンテオキア、トリポリス、ケザレア、エルサレムの征服に援助したので、彼等は聖墓の禮拜堂内の祭壇の上に名譽なる感謝状が掲げられた外に、パレスチナ及びシリアに於いて非常な自由を以つて、報いられた。埃及との貿易に於いては彼等はヴェニス人の競争者であつた。然し特に彼等は黒海を支配した。而して黒海に於いて彼等は東方諸國から陸路をとつて輸入された物資の集会所なる、大貿易市カッアを有し、アルメニアに於いて、否、深く韃靼の中にまで貯藏所と交易とを持つてゐた。土耳其人がコンスタンチノブルを征服し、而して黒海を、次に多島海をも彼等に對して閉鎖してしまふに至るまで、長らくの間、ゼノア人は彼等が占領した多島海の島々と共にカツハアを守つてゐた。彼等はヴェニスと血腥き戦を長く繼續した。一再ならず彼等はこの共和國を没落に瀕せしめ、而してピサを亡ぼし遂にヴェニス人はゼノアの權力をキオツアに閉ぢ込め、而してかの偉大なる勢力を完全に没落せしむることに成功した。

アマルヒイ、ピサ及び伊太利陸土の多くの都市はゼノア及びヴェニスと共に東洋、亞刺比亞貿易に參與した。フロオレンスは獨立し、而してフィゾオレを併合し、アマルヒイは埃及カリフのすべての國家に於いて自由に貿易

することが出来た。然し特にアマルヒイ、ピサ及びゼノアは、地中海の海軍國であつた。佛蘭西と西班牙との海岸は東方の貿易に加はらうとした。而して兩國の巡禮者は信心の爲と同じく利益の爲に東洋に赴いた。これは亞刺比亞人の領土に對する南部歐羅巴の状態であつた。亞刺比亞の領土は恰も香料に充ちてゐる庭園のやうに、富に充てる仙境のやうに、眼の前に伊太利海岸に横はつてゐた。十字軍に参加した伊太利の諸都市は主の屍を求めずして、その墳墓にある香料と寶物とを求めた。ツヴルスの銀行は彼等のパレスチナであり、而して彼等が何等か企てた所のは何百年來往來頻繁な普通の商業道の上にあつた。

かやうな外國の富がその利得者に齎することが出来た幸福は如何にも一時的ではあつたけれども、而も之は伊太利文化の最初の花にとつては恐らく缺くべからざるものであつた。之によつて人は一層優しくして便利なる生活を學び知り、而して粗野なる奢侈の代りに、少くとも一層上品な奢侈に耽るに至つた。アルプス山の彼方にある弱い統治者に、唯弱い結帯によつて結合されて居り、而してすべて獨立を望んでゐた、伊太利の多數の大都市は之によつて城廓又は賊寨の粗野な住人の上に、唯勢力を獲たと云ふだけではなかつた、と云ふのは、これらの諸都市はその粗野なる者をば贅澤と増大せる共同的榮華の結帯によつてその圍壁の内に引き入れ、而して之を平和な同市民とし或は其の増大せる民衆によつてすぐに、その城廓を破壊し以て強いて之を平和な隣人たらしめる

力を得たからである、次第に發芽し來れる贅澤は皆に工場及び技術に於いてのみならず、また農業に於いても勤勉の風を目覺ました、ロンバルディ、フロレンス、ボロニヤ、フェララ、及びシシリイの海岸は、一層富める、一層大なる、而して一層勤勉なる都市に近接してよく耕された、豊饒な耕地となつた。ロンバルディは、歐羅巴の大部分がまだ牧場であり森林であつた時に、己に庭園であつた、蓋しこれらの諸都市は田舎によつて養はれねばならぬし、而して土地所有者は己れの積みだした糧食が高價になつた爲に多くの利益を得ることが出來たのである。もしそれが新な贅澤をどこまでもやつて行かうとすればそれだけの利益を得るやうにしなければならなかつたのである。かくて活動は活動を喚起し、而して之をして働かしめた。かやうな新しい事件の成行と共に、必然的に秩序、私有財産の自由及び合法的な制度が起つて來た。人は使ふことが出來る爲に貯蓄することを學ばねばならなかつた。人間の發明は甲の人が乙の人から賞品を勝得ようとした所から進んだ。嘗ては安逸に耽つてゐたあらゆる戸主も今や幾分商人となつた。かくして美しき伊太利がその手を経た亞刺比亞の富の一部を以つて先づ始めに新しい文化の花を示したといふことは事の自然に他ならなかつた。

然し勿論それはほんのしばしの花であつた。貿易は擴張して別の途を進み、共和國は亡び、隆盛な都市は尊大になり、而して互に一致せざるに至つた。全國土は黨派を以つて充された。而してその間に在つて、企業心に富める人々と個々の有力な家族とが掠奪するに至つた。更に戦争、壓迫が之に加はり、而して戦争精神、否、正直と忠實とは贅澤と藝術との爲に地を拂ふに至つたので、都市や領地は漸次に内外の暴君の掠奪物となつた。この

甘い毒藥の分與者、ヴェニスは唯最も峻嚴な方策によつてのみ没落を免れ得た。然るに人事のあらゆる動機は、それに屬する權利を享樂することを許される。幸にも、歐羅巴にとつては、かくの如き贅澤は當時一般的なるものであつた、而してその最大部分はロンバルディの純利得とならねばならなかつた、それに對して他の精神、即ち騎士の精神は興り、清廉にして名譽獲得の爲にのみすべてのものを企てるに至つた。然らば吾々はこの花は果して如何なる萌芽から生じ、如何なるものを營養となし、而して商業精神を制限しながら如何なる種類の實を結んだかを見よう。

二 歐羅巴に於ける騎士の精神

歐羅巴を到る所轉移したあらゆる獨逸民族は好戰的人民であつた。而して騎兵は戰備の最も困難なる部分であつたので、騎兵の練習には十分の補償が與へられた。間もなく、その職務を正式に學んだ騎兵組合が出來た、而してこれは、統帥、公侯乃至王の護衛となつたので、勿論宮廷所在地には、一種の士官學校が出來た。而してこゝに於いて貴人の扈從はその學年を終了し、恐らく貴人に從つて立派なる騎兵として冒險に、商業に出掛けねばならなかつた、もし彼等がこの任務を首尾よく果したならば、その組合の自由を有つた隊長として更に勤勉し、或は騎兵長として他の貴人の扈從を教育することが出來たのである。全騎士制度は恐らくかくして起つて來たものであらう。

すべてのものを組合的に取扱つた獨逸民族は、特に、彼等のみの理解し得た技術に於いて、之をなさねばならなかつた、而してこれは彼等の唯一にして首要なる技術であつたので、彼等は無智なるものとして、他のものに對して承認することの出来なかつたすべての名譽をこれに與へた。騎士制度のすべての法則及び規則はこの起原の中に含まれてゐる。

この騎兵の護衛は即ち勤務であつた、従つて扈從並に騎士に於ける忠實の誓約はその主に對してなせる最初の義務であつた。馬の練習及び戰爭の練習は騎兵の學課であつた。而してこれからして後になつて所謂騎士の他の勤務と共に戰爭遊戲及び比武競技が出来て來た。宮廷に於いては、若き騎士の兒童はその主と夫人との身の周りにありて、宮仕をせねばならなかつた、従つて嘗て組合的に學んだその主と夫人とに對する敬順の義務を果さねばならなかつた。而して彼は馬と武器以外に尙幾分宗教と婦人的愛情を必要としたので、彼は前者を簡單な虎の巻によつて學び、後者をば慣習と力量とに従つて獲得した。かくて騎士氣質は、宗教に對する盲目的信仰、その主に對する盲目的忠實、これが何等組合に反することを欲せざる限り、奉仕に於ける敬順及び婦人に對する慇懃から成り立つた。かう云ふ騎士の徳を外にしては、頭腦と心情とが概念や義務から自由であることが許されてゐた。下層階級はこれと比すべくもなかつた。學者、藝術家及び職工の學んだものをば、騎士は奉仕する完成した騎兵として輕蔑しても差支なかつた。

この戰爭職業(世襲權に移つて行くや否や)大膽極まる兇暴に墮せねばならなかつたといふこと、而して嚴格に

して確乎たる騎士は幼時から公達であつたといふことは明らかである。かう云ふ閑散な扈從をその宮廷に於いて養育した識見ある王侯は、またそれに若干の理念を詰込みて其の職業を幾分か教化し、彼等の宮廷、種族及び土地の安全を謀るが爲にその少年共に慣習を教ふべき責務を有つてゐた、従つて、彼等のあらゆる卑劣な行を禁すべき嚴格なる法則が造られた。従つて又、壓迫されたものを保護し、處女婦人の純潔を擁護し、敵に對して雅量を示すといふ高尚なる義務が生じた。之によつて人はその暴力を豫防し、彼等の頑固にして粗暴な心持を和けようとしたのである。青年時代から印銘されたこの組合の規則は忠實な人々の腦裡に確乎たる印象を與へた。人のかの高貴な騎士が、殆んど機械的にその言行にあらはしてゐる廉潔と忠實とに對しては驚異の眼を見張る。品性が柔順であること、事件に對する見解の多方面なること、思想が豊富であるといふことこれは決して彼等の缺點ではない、従つて中世の言葉が、それが黃銅の甲冑を纏つて、二三の思想の周圍を云は、騎士的に動いてゐるやうに思はれる程儀式張つて、確乎としてまた几帳面に現れ出てゐる。

かくの如き騎士の風格に一層の生命と活動性とを與へた原因は地上の兩端から相一致して起つた。西班牙、佛蘭西、英吉利及び伊太利、殊に佛蘭西はこの洗煉された騎士陶冶の場所となつた。

(一) その種族性及び國勢から云つて、昔から、諸國を遍歴し、強きを挫き弱きを助けた騎士氣質なるものは、優雅なる愛と混じて謂はゞ亞刺比亞人に獨特なものであつた。彼等は冒險を求め、決闘をなし、彼等自身乃至彼等の種族に加へられた凌辱のあらゆる汚點を敵の血を以つて報復した。彼等に嚴重なる生活の仕方と貧弱なる衣服とにならされ、その馬、その劍及び種族の名譽を何物よりも大切なものとした。彼等はその天幕の移住に於いて、同時に愛の冒險を求め、次に愛人の遠離についての哀哭を彼等のいたく尊敬せる詩歌の言葉を以つて表したので、やがて豫言者にとつて、自分自から彼等の種族の名譽及び彼等の美人の價値を歌ふといふことが彼等の詩歌の規則正しい形式となつた。是れに於いて彼等は滑かな移行を考へなかつた。彼等の征服に於いては彼等の婦人達の天幕も共にあつた。彼女等は其の戦争に於いて最も剛毅なる人々を鼓舞した。従つて、彼等は戦勝の掠奪物を彼女等に捧げた、而してモハメット以來婦人達は亞刺比亞王國の建設に多くの影響を與へ、而して東洋人は平時に於いては、婦人との遊戯娛樂を外にしては何等の快樂をも知らなかつたので、西班牙に於いては、亞刺比亞人の時代には騎士の祭典は貴婦人の前で、たとへば、柵内の指輪を目がけて投杖を以つて射ること及び他の比武とが非常なる光榮と多額なる經費とを以つて執行せられた。美人達は競争者を鼓舞し、而して自からの手によつて成れる寶玉や飾帶や着衣物を以つて稱讚した。蓋し、この娛樂は彼等の名譽の爲に行はれ、而して勝者の貴婦人の像は、彼に負かされた騎士の像を周圍にしてあらゆる人々の眼前に懸けられた。色合、題句及び衣服は競争者の組を表示し、歌はこれらの祭典を讚美し、而して愛の謝禮は勝者の最も美しい獲物であつた。かくして騎士氣質

のこの上品な儀禮が亞刺比亞人によつて歐羅巴の方に齎されたといふことは明らかである。重い甲冑を着けてゐる北方の勇者に於いて職業上の慣習となり或は單なる詩に止まつてゐたものが、かの南部の人々に於いては輕妙なる遊戯、愉快なる練習であつた。

そこで幾世紀の間、ゴット人と亞刺比亞人とが共に住んでゐた西班牙に於いては、この明るい騎士精神は先づ基督教徒の間に入つた。此處に於いては、單に、マウル族に對して、或はコンボオステルの巡禮の護衛の爲に或は最後に歡喜と快樂の爲に設けられた最も始めの基督教徒團が現れたのみならず、騎士精神は、全く亞刺比亞風に、遍歴して強きを挫き弱きを助ける騎士氣質及び愛の騎士の、彼等には決して想像力の單なる産物ではなかつた程深く西班牙人の性格に印銘されたのである。史詩、即ち特に彼等の騎士事件及び戀愛事件(恐らく小説、例へば最も古いアマデイス)の史歌は彼等の言葉と考へ方の生産物である。これが後セルバンテスの時代に於いて、これと比較にならない程の國民小説『ドンキ・ホオテ』の材料となつた。然し特に亞刺比亞人が最も長く占領してゐた兩地方、西班牙並にシリイに於いてこの影響は面白い詩歌にあらはれた。

エプロオ川に至るまでカロロ大帝が亞刺比亞人から獲得し、而してリモン人、即ち南部佛蘭西の住民と共に占領した地方に於いて、時と共に、ピレネエ山脈の此方彼方に、亞刺比亞に近接して歐羅巴の近代母語の最初の詩、即ち、プロバンス的詩歌即ちリモンの詩歌が形成された。人が戀愛に關する趣味ある問題、談話及び表白に對して案出した所の競歌、短詩、俚歌、戀愛詩、小詩、牧歌、謠歌並に他の形式が、すべてのものは歐羅巴に

於いては宮庭の權利若くは組合の權利を持つてゐなければならなかつたので騎士と貴婦人、王者と公侯が裁判官及び關係人として參與した奇妙な裁判所、戀愛の法廷の起る機縁となつた。而してこの奇妙な裁判所の前に、始めは最も位高き貴族の享樂であり而して唯時と共に歐羅巴風に宮庭の歡樂と考へられ、そが下劣なものとなつた所に於いては、唯家が道化者及び宮庭囀間の手に墮ちたトロバアドールの學問が形成された。その最初の隆盛時代に於いては、プロヴァンスの詩歌は、精神と心情とを精鍊し、言葉と慣習とを形成した、否、一般にあらゆる新しい歐羅巴の詩歌の母となつた所の如何にも調和的な、人の心を動かし而して人の心を引きつけるやうな優美な性質を有つてゐた。リムサンの言葉はラングエドク、プロヴァンス、バルセロナ、アラゴン、バレンシア、ムウルシア、マジョルカ、ミノルカに傳播した。歎息し或は陶然たる愉快な戀の最初の呼吸はこの海によつて涼しくされた美しい土地に起つた。西班牙、佛蘭西及び伊太利の詩はその娘である。ペトラルカはこのプロヴァンスの詩歌から學び而して之と競つた。我が獨逸の十二、三世紀の叙情詩人は、たとへ、獨逸語の最も微妙なるものに屬してゐることは論なきも、而も猶この詩歌の後代の固苦しい餘音である。一般的に擴まつた騎士の精神は伊太利及び佛蘭西から、この美しき若干の花をアルプス山を越えて、シュヴァベン、壞太利、チュウリンゲンの方に吹き越して行つた。スタウフ家の王及びチュウリンゲンの領王ヘルマンはそれを喜びとした、而してさもなくば知られないやうな獨逸の王侯はかう云ふ風で若干の歌によつてその名を擴めた。然るにこの藝術は間もなく廢れ、而して佛蘭西に於いては諸所方々を廻り歩く手品師のしまりのない手藝に移つて行つたやうに、獨逸に於

いては平民詩人の手に移つて行つた。プロヴァンス語のやうに羅句語から出て羅馬語と稱せられてゐる言葉に、この藝術は一層よく根ざし、而して西班牙から佛蘭西及び伊太利を越えてシシリイにまでも生々とした實を運んだ。曾ては亞刺比亞の地盤たりしシシリイに西班牙に於けるが如く最初の伊太利の詩歌が生れた。

(二)亞刺比亞人が南方から始めた所のものに對して、佛蘭西、英吉利及び伊太利のノルマン人は、北方から一層有力に貢獻した。ノルマン人の浪漫主義的な性格、その冒險、英雄物語及び騎士の練習に對する愛好、その婦人に對する北方的尊敬は亞刺比亞人の氣品高き騎士氣質と一致したので、亞刺比亞人の始めた所のものが歐羅巴に傳播され保持された。今や小説と名づけられ、而して其の基礎の十字軍よりすつと以前に存してゐた物語なるものが益々行はれるに至つた。蓋しあらゆる獨逸民族は昔からその英雄を高く讚美した。英雄讚美の歌及び詩は幾世紀にも亘れる暗黒時代に於いても猶宮廷に、否、修道院に於いてすら保存せられてゐた。實に眞の歴史が消滅すればする程益々人間の頭腦は宗教的物語乃至は小説的物語的に形成せられたのである。それで人は基督教の第一世紀から、如何なる他のものよりも人間構想力のこの練習が始めは希臘的阿弗利加風に、然し時の經過すると共に、北方的歐羅巴風に進行するのを見る。修道僧、僧正及び聖者も之を恥ぢなかつた。否實に、もし人が之を聽くべきならば、聖書及び眞の歴史すらも小説とならねばならなかつた。そこで地獄王の審問は基督と共に生

じた。またあらゆる徳や義務の寓意的並に神秘的表現が生じた。かくして又宗教的勸善懲惡之居及び道化が生れたのである。無智、迷信及び刺激された構想から出て来た時代のかやうな一般的な趣味に於ては、物語フエリと寓話とは人間精神の唯一の糧であり、而して騎士階級にとつては、英雄物語が最も愛好されたものであつた。かゝる文化の中心點たる佛蘭西に於いて、人はこゝに相合した兩方向に従つて、之に最も特有な對象を選んだ。ピレネエ山脈に於いて當然起る可き冒險をなすつゝサラセン人に對してなせるカロロ大帝の遠征は、その一方向であつた。ノルマン人の國土、ブレタアニユに於いて、アルトス王の古い物語に見出された所ものは今一つの方向であつた。前者に於いて人は、後世の佛蘭西の制度から、人がカロロ大帝及びその騎士に就いて物語らなければならなかつたすべての光榮と、サラセンの異教徒に就いて物語らなければならなかつたすべての野蠻性とを有する十二人の貴族とを齎した。丁抹人オジエ、ボルドオのウオン、アイモンの子供達、巡禮及び十字軍の多くの物語が共に彼の歴史に入つて来た。然し最も興味ある人物や事件はいつもリモン地方、ギイアンヌ、ラングエドク、プロオヴァンス及びプロヴァンスの詩歌が隆盛を極めてゐた西班牙の部分からやつて来た。アルトス王とその宮廷との物語の第二の方向は、海を越えてコオンタルの方へ行き、然らざれば、寧ろその土地に於いては、不思議の特有な種類の許されてゐた夢想境へ行つた。騎士氣質の鏡はこの小説に於いて曇なく磨かれた。圓テエブルに椅れる仲間の様々な身分階級や性格に於いて、この宮庭の缺點と徳とが非常に明瞭に示された。アルトスの小説が範圍として有つてゐたかくも古い時代に於いて、又かくも無制限な世界に於いて、それに十分な餘地があつ

た。最後に兩者から第三の小説の種類が生れた。而して佛蘭西の何れの地方も、西班牙のどの地方もそれから除外されはしなかつた。ボアトン、シヤンバアニヌ、ノルマンディ、アアデネルヴァルト、フランダア、否マインツ、カステイル、アルガルビイは騎士と場面とを舞臺に與へた。蓋し時代の無智と當時古代の歴史があらはれた形體とはかゝるあらゆる時代とあらゆる國の混淆を許した、否之を命じたのである。人が新しい風説に聞き或は古い風説から知つた所のトロヤと希臘、エルサレムとトラツベツトとは騎士氣質の花に融合し、而して殊にトロヤから出たものであると云ふことが歐羅巴に於けるあらゆる王國と民族とがその王や最大の騎士と共に信じて疑はなかつた種族の名譽となつた。小説はノルマン人と共に英吉利及びシリイに移つて行つた。この兩地方は小説に新しい主人公と新しい材料とを與へた。佛蘭西に於ける程小説の都合よく榮えた所は何處にもない。多くの原因の結合によつて、生活法、言語、詩、否、全く人間の道徳及び宗教が云はゞこの趣味に適ふやう形成せられたのである。

蓋し吾々が物語りの領域から、歐羅巴の王國が佛蘭西に於けるよりも尙一層美しく騎士氣質の花を開いた歴史の國に進んで行くならば如何であらうか。カロロス朝の没落と共に、殆ど州、城、城砦と同じ程の多くの小君主、公爵、伯爵及び男爵の宮殿が權力と光輝とを得てより後、あらゆる宮廷及び騎士の城は騎士の名譽の學校となつた。國民の活氣、國民が亞利比亞人及びノルマン人に對して何百年に亘つてなせる戰爭、彼等の祖先がこれによつて得たる名譽、多數の家庭が到達せる繁榮、ノルマン人そのものとの混淆、然し主としてゴオル人から、

その全歴史を通じてあらはれてゐた國民性に於ける何等か獨特なるもの、すべてこれがお世辭、快活なる弾力性輕妙なる禮讓及び輝かしい典雅を騎士氣質に齎したのであるが、これらは佛蘭西國民を外にしては他の國民に於いては、ずつと遅れて見出されるか、或は稀に見出されるか、或は全く見出されないものである。意向と行爲とによつて、平時及び戦時に於いて、王の専制主義の時代に至るまでの全歴史を通じて、その種族が永遠なる名譽を擔ふに至る程に大膽に、禮儀よく、而して高尚に振舞つた佛蘭西の騎士は如何に多くの稱讚を受けねばならなかつたであらうか。十字軍の名聲が傳播された時に、佛蘭西の騎士は實に全羅歐巴騎士の花であつた。而してエルサレムとコンスタンチノオブルの玉座に上つたものは佛蘭西種族であつた。新興國家の法律は佛蘭西流に與へられた。征服者ウイリアムと共に、この言葉と文化とが英吉利の玉座に上つた。兩國國民は騎士道德の競争者となり、パレスチナ並に佛蘭西に於いて競争したのであるが、遂に英吉利はその隣人に徒なる名譽を譲り而して一層有用にして市民的な途を選んだのである。佛蘭西が先づ最初に、而も最も容易に、云はゞ典雅に法王の權力を輕蔑した。聖ルウドヴィツヒすら法王の奴隸に外ならなかつた。英吉利、獨逸及び他の諸國は佛蘭西よりも更に大膽なる王を有つてゐる。然し經綸の才は、伊太利から先づ始めに佛蘭西に移り行き、而してそが不名譽を極めた場合に於いてすら少くとも禮儀正しく振舞つたのである。この精神は學問、有司の品位及び法律上の位置に對する制度にも傳へられた、これは始めは有用であつたが後には有害となつた、かくて佛蘭西國民が歐羅巴の最も虚榮的國民となつたといふことは何の不思議もない。彼等はその王政の殆んど出來ぬ始めから歐羅巴を照し導き、而

して最も重大なる變革に於いて牛耳を取つた。すべての國民が圓舞に於けるやうに、パレスチナに相會合した時に、その結合によつて獨逸人の躁暴チュウトンの激情を除くが爲に獨逸の騎士は佛蘭西の騎士と結合された。紋章及び他のものによつて全歐の十字軍を區別する爲に起つた新しい制服も亦大部分佛蘭西的起原のものである。

今や吾々はパレスチナに建てられ、甚しき名譽と富とを獲得した三四の宗教的騎士團について一言述べなければならぬ。然し彼等騎士團が據つて以つてそれに達した英雄及び國家の活動はその五七齣を以て吾々の眼前に横はつてゐる。でそれらを見よう。

三 十字軍とその結果

長らく、巡禮者と法王とはエルサレムに於ける基督教徒の危急を訴へてゐた。人は世界の終りを豫言し、而してグレゴール七世は、もし自分がその嚮導者であるならば、聖墓に遠征する所の五萬人が已に準備されてゐると信じてゐた。遂にビカルテン派の隱者ベイタアはエルサレムの教長シメオンと了解を遂げて法王ウルバン二世を

説いてこの擧に加はらしめることに成功した。そこで二回の長老會議が招集せられ、而して二回目の會議に於いて法王は一つの演説をなした、すると民衆はこれに續いて狂へるが如く、「神意だ、神意だ！」と叫んだ。多數の人はそこで、右の肩に赤十字を附けられた。十字軍は全羅馬基督教界に於いて説かれ而してこれに従軍せる軍人には種々雑多な自由が與へられた。彼等はその領主の允許なしに、所有地を賣つたり質入れしても差支なかつた。(この恩恵に關する特權は三年間僧侶に與へられた。)すべての十字軍に従へる人は、身體と財産とに關して教會の保護と裁判權とを得、而して宗教上の權利を享けた。彼等は聖戰中は、あらゆる輸入税と贈物、負債の爲のあらゆる權利の主張及び租税を免され、而して全く赦罪された。敬虔なる、祖野なる、輕卒なる、落着のない、放逸なる、熱中する、欺かれたる人間の信じられない程の多數があらゆる階級から、男も女も、集まつて來た。軍隊は、檢閲せられた、而して隱者のペイタアは素足で、長い僧帽を以つて飾られ、三十萬の軍勢を率ゐて眞先に進んだ。ペイタアは彼等を止めることが出来なかつたので、彼等は到る處掠奪を行つた。匈牙利人とブルガリヤ人とは一緒になつて森林の中で狩獵をなした、そこでペイタアはその殘餘三萬人を率ゐて最も悲惨なる状態でコンスタンチノオブルの前に到着した。長老ゴツチャルクは一萬九千を率ゐて之に従ひ、エミツヒ伯爵は二十萬人を率ゐて之に續いた。彼等は猶猶太人の殺戮を以つてその聖戰を開始した。而して彼等はライン河畔の二三の都市に於いて一萬二千人を虐殺した。彼等は匈牙利に於いて或は斬殺され或は溺死せしめられた。隱者の最初の不規律な軍勢は、伊太利人の増援を受けて亞細亞の方に送られて、飢餓に陥り、而してもしブウイヨンのゴツトフリ

イドがその規律正き軍勢と歐羅巴の騎士の花とを率ゐて結局コンスタンチノオブルの前に到着しなかつたならば彼等は土耳其人によつて全く盡殺されてしまつたであらう。この軍勢はカルツエドオンに於いて閱兵せられ、而して兵力は歩兵五十萬、騎馬兵十三萬であつた。信すべからざる程の危険と困苦とを冒してニツエア、タルズス、アレキサンドリア、エデツサ、アンチオキア、最後にエルサレムが占領せられ、而してブウイヨンのゴツトフリイドは衆口一致以つて王に選ばれた。彼の弟のポールドウインはエデツサの伯爵となり、クレント公、ポオヘムントはアンチオキアの公爵となり、ツウルウズの伯爵ライムントはトリポリの伯爵となり而してこれらの他にこの戰役では、タツソオの不滅の詩に歌はれた多くの英雄があらはれた。それにも拘らず、やがて不幸は相續いて生じた。この小王國は東方からの土耳其の大群、埃及からの亞刺比亞人の大群に對して防禦せねばならなかつた。而して始めは信すべからざる程の勇氣と大膽とを以つて防禦せられた。然し老英雄は死し、遂にエルサレム王國は後見の下に置かれ王侯と騎士とは互に和合しなかつた。埃及には、騎兵隊の新力が生れ、勇敢にして氣品高きサラデンは其の力を以つて不忠にして腐敗せる基督教徒を益々壓迫し、遂にエルサレムを占領し、而してこの小さき陰影の王國を未だ百年の祝典をあけるに先つて全く消滅せしめてしまつた。

この王國を維持し或は再び征服せんとする爲の遠征は其後無益であつた。小公國はこの王國の没落に先つか然らざればそれに續いた。エデツサは基督教徒の手中に落ちて僅々五十年であつた、而して皇帝コンラアド三世と佛王ルウドウイツヒ七世とによつて、聖ベルナルドの闕聲で、二十萬人を以つてなされた第二回の大十字軍もそれ

を救はなかつた。

第三回十字軍に於いては勇敢なる三軍、皇帝、フリードリッヒ一世、佛王フリーリッブ・アウグスト、及び英吉利のリチャード獅子心王がサラデンに對して軍を進めた。皇帝フリードリッヒ一世は流れに溺れ、その息子は死んだ、他二者は互に嫉妬し、特にフリーリッブはリチャードを妬み、唯アクレを奪回することが出来ただけであつた。其の言質をも顧みず、フリーリッブ・アウグストは歸還し、サラディンをして獨力では最早再び立つことを得ざらしめたリチャード獅子心王は、不本意ながら彼の後を追はねばならなかつた。實に、彼は巡禮として獨逸旅行の際、アクレに於いて凌辱を彼に加へたと云ふので、塊太利のレオポルド公に捕へられ、皇帝ハインリッヒ六世に卑劣にも引き渡され而して彼によつて一層劣卑に四年間嚴重に禁固され不幸に遭遇した、が全世界がこの非騎士的な處置に關して苦情を云つたので遂に彼は十萬マルクの銀貨を以つて身請される事が出来た。

佛蘭西人、獨逸人及びヴェニス人によつて、モンフェルラト伯引率の下に企てられた第四回遠征はパレスチナの方へは全く行かなかつた。之を嚮導したものは利己的な、復讐の念強きヴェニス人であつた。彼等はツアラを占領し而してコンスタンチノオブルへ航した。帝都は攻圍され、二度征服され、掠奪された。皇帝は逃亡し、フランドルの伯爵ボールドウインは、コンスタンチノオブルに於いて羅甸の皇帝となつた。掠奪物と其の國とは分與され、而してヴェニス人は、アドリアチック海、黒海及び希臘海に於いてその掠奪物の最も豊かなる部分を得た。遠征軍の嚮導者はカンディアの王となつたが、その島を貪欲な同僚に賣つた。彼はボスポルス海峡の彼岸の土地

の代りにテサロニツヒの王となつた。アツハヤ公國、アテン公國は佛蘭西の男爵の爲に出来た。ヴェニスの富裕なる貴族はナコス、ネグロポントを獲てザンテ及びケハアロニアの宮中伯となつた。希臘帝國は悪い掠奪物のやうに、最高の値段をつける人に移つて行く。反之、希臘皇統の子孫は一帝國をニザエに、その後帝國と稱せられたトラアベツント公國、後にやはり帝國と稱へられた專制政治をエビルスに建てた。コンスタンチノオブルの新羅甸皇帝の力は極めて弱かつたので、この弱小にして憎惡されてゐた王國は殆ど五十年も續かなかつた。ニザエの皇帝は古希臘帝都を再び占領し、結局、是等の冒險によつて獲得せる凡ての領土をば土耳其人の手に歸した。

匈牙利人と獨逸人によつて行はれた第五回十字軍は全く無力であつた。匈牙利王、チヌウベルンの王及びエルサレムの名義上の王の三王は騎士團の長と共にタボオル山を遠巻にし敵を圍んで勝利を得た。然し不和と嫉妬の爲彼等はこの利益を失ひ、而して十字軍は元氣なく歸つて來た。

皇帝フリードリッヒ二世は法王朝の絶えざる勸誘によつてパレスチナに艦隊を送り、一層有利な休戦か進行中であつたが、法王の使節は之を邪魔し、而して皇帝が、いたく強いられて遠征を引き受けた時に、法王は不合理なる破門と皇帝の不在なる歐羅巴の國家に對する特有な不實なる企畫とによつて、あらゆる善良なる進展を妨害した。休戦は土耳其帝とバクダツドで結ばれ而してパレスチナとエルサレムとはこの皇帝に讓られた。然し聖墓はすべての巡禮に對する自由港として依然サラセン人の手にあつた。

而もこの分與されたエルサレムの領地も殆ど十五年も續かなかつた。而して聖ルウドヴィツヒはその第七回の不幸なる遠征を以つて之を恢復することが出来なかつた。彼自身全軍と共に埃及に於いて敵軍の手に捕へられた。彼は莫大なる金を以つて放免され、而してチュニスのマウル族に對して起せる第二回の不必要にして且不幸なる遠征に於いてその生命を終つた。彼の悲惨なる例が、遂にパレスチナへ宗教遠征をなさうとする無意味な衝動を抑止した。而してパレスチナに於ける最後の基督教の場所、ティルス、アクレ、アンティオキア及びトリポリは次第に埃及の騎兵隊の手に移つて行つた。かくして、基督教的歐羅巴に對して殆ど言語に絶する莫大なる金と人間とを犠牲にしたこの狂行は終りを告げた。然らばその成果は何であつたか。

人は常に十字軍を非常に多くの立派な結果を齎したものとするに慣れてゐるので、人のこの意見に基いて、五百年毎に、その力を揺り起すやうな熱病を切望せねばならぬといふことになる。然し更に精密な見解によると、この列擧された成果は、十字軍から生じたものではなく、少くとも十字軍からのみ生じたものではなく、却つてそれらは、高々當時歐羅巴が得た多くの衝動の中、歐羅巴人の理性が欠くことの出来たやうな促進の働きはするが、而も大體上厭ふべき共同衝撃及び附帶衝撃であつたのである。一般に、もし人が二百年間に於いて非常に異なる國土により、非常に異なる動機から企てられた七回の別々の遠征を、單に同じ名稱の故を以つて事件の主要源泉であるとするならば、それは單に空想の産物に過ぎない。

(一)貿易は十字軍以前亞刺比亞諸國に對して歐羅巴人に開かれてゐた。而して之を強盜軍によつてなされ得たよりも更に上品なる仕方に於いて利用し、又之を擴張する自由が彼等に與へられてゐた。これによつて航海者、金貨し及び商品供給者は利益を得た、然し彼等はすべて基督教徒から得たので、彼等は基督教徒の財産に對しては眞に十字軍であつたのである。希臘帝國から奪ひとられたものは、恥づべき商人の掠奪物であつた、而してそれはこの帝國が非常に弱い所から、益々近く迫つてくる土耳其人の群が將來コンスタンチノオブルを易々と奪ふことの出来るのに役立つた。土耳其人が歐羅巴に在り、而してそこでかくも廣く至る處に擴がることが出来たといふことは、ヴェニスの聖マルクス獅子が已に第四回の十字軍によつて準備して置いたのであつた。成程ゼノア人は希臘皇帝の一族を助けて再び帝位に上らしめはしたが、然しそれは後にヴェニス人並にゼノア人が地中海及び黒海岸のその最もよい領土、否、最後には殆どすべての貿易をも全然失つてしまつたので、土耳其人が易々と征服することの出来た弱められた支離滅裂せる帝國の玉座に過ぎなかつた。

(二)騎士氣質は十字軍によつて生じたのではなく、十字軍が騎士氣質によつて生じたのである。最初の遠征に於いて已に佛蘭西及びノルマンディの騎士の花がパレスチナにあらはれた。十字軍は寧ろ騎士から獨特の花を奪ひ眞の武装騎士を單なる紋章騎士に変化させるに與つて力があつた。即ちパレスチナに於いては歐羅巴に於いて兜を被むるを許されなかつた多數のものが之れを被つた。今はその血統に移つて行つた紋章と貴族とを引戻し、而してそれを以つて新しい階級、即ち紋章貴族と而して又時の経過するに従つて特旨貴族とを生ずるに至つた。古い王朝の數や眞の騎士貴族の數が減じたので、この紋章騎士は彼等と等しい領土と世襲特權とを得ようとした。この

騎士は詳細にその祖先を調査し名譽と特權とを得た。その結果、たとひ自分に對しては君主であつた王朝とは一つの階級には屬してはゐないが、數代の中に再び古い貴族と呼ばれるに至つた。パレスチナに於いて武器を執つたものは騎士となることが出来た。第一回の十字軍は歐羅巴に對して大なる解放の年であつた。間もなくこの新しい軍務に服せる戦争貴族は、残つてゐる高き位置を占めてゐる家來に對してそれを巧に使用することの出来た發達する君主政體に非常に用に立つた。かくして激情が互に摩擦し光輝は光輝を滅殺し、結局軍務に服せる戦争武官と宮中貴族とによつて古い騎士氣質は全く没落してしまつた。

(三) パレスチナに建てられた僧侶騎士團は歐羅巴にとつて何等の利益ともならなかつたといふことは、自から明かである。彼等はやはり嘗て、吾々にとつて全く亡びてしまつた目的たる聖墓に捧げられた資本で暮してゐる。病院は到着する巡禮を宿らせ、病人を看護し、病人の世話をすべきものであつた。これは現代の高尙な約翰講である。デルファイナアの貴族ライムント・ドウ・ブワイが戦争の誓約を彼等の間に齎した時に、ラツアルス派は彼等から分離し、而して最初の設立のまゝに残つた。聖堂武士は正規の法牧師であり、十年も布施によつて生活し、而して聖墓の巡禮者を保護したが、遂に増大した財産によつて彼等の定款は變ぜられ、騎士は武器を執つて其の教團に仕へる講中を己れの部下とすることになつた。最後に獨逸の教團は、戰場に横はれる傷病人の爲に建てられた。衣服と水と麪類とは彼等の報酬であつたが、遂に彼等は不信心なるものに對する有益な奉仕によつて、富み且權力を得るに至つた。すべて此等の教團はパレスチナに於いて非常なる勇氣と非常なる傲慢と又不思議と裏

切りとをあらはした。然し彼等の歴史はパレスチナと共に終末を告げてほしい。約翰講がこの地を捨てねばならなかつた時に、彼等がチュウベルン島とロオドス島とを失ひ、而してカロロ五世が彼等にマルタ島を贈つた時に、パレスチナの外に永遠な十字軍として残り、而してその代り、土耳其人を攻撃もせず、また聖墓への巡禮を保護もしない邦國に於ける領土を享樂しようといふ命令は如何にも奇妙なものであつた。ルウドヴィツヒ七世はラツアルス派を佛蘭西に收容し而してその職務たる病人の看護に歸らしめようとした。法王は一人に止まらず之を廢さうとした。佛蘭西の諸王は之を保護し、而してルウドヴィツヒ四世は之を多くの小教團と併合した。ルウドヴィツヒ四世は、この點に於いて、貪欲と復讐とから聖堂武士を残酷にも剿滅し、而して決して彼に屬さなかつた所の物を彼等の財産から押領して、彼の祖フリツプ一美王とは考を異にしてゐた。最後に異教の普魯西に對してマゾヴィエン公によつて援助を求められ、獨逸皇帝から、彼等が普魯西で征服するすべてのもの及び獨逸皇帝其人に屬してゐなかつたすべてのものを贈られた獨逸騎士は、普魯西を征服し、リイフランドに於いて劍兄弟と結合し、エストランドを、それを支持することの出来なかつた王から得た、かくして彼等は結局ヴィクセルからデユウナ及びネヴァ河に至るまで騎士的贅澤と放逸とを以つて支配した。古代の普魯西國民は滅盡され、タウエン人及びサモイイト人、クウルランド人、レット人、エストランド人は、家畜の群のやうに獨逸の貴族に分配せられた。波蘭人との長い戦の後、彼等は結局普魯西の半土、次に普魯西の全土、最後にリイフランドとクウルランドとを失つてしまつた。若干の海濱都市によつて教化せられて、確に別の土地になつたであらう。この海岸の支配よ

りも更に傲慢にして壓迫的な態度を以つては、征服された土地は支配され難いといふ評判以外に彼等は此の地方に何も残したものはなかつた。一般に今迄説明された三騎士團は歐羅巴の方へ屬せずしてパレスチナの方へ屬してゐる。これらはパレスチナに建てられ、それを目的としたものである。其處で、これらは不信仰なるものに對して戦ひ、病院に於いて仕事をし、聖墓を守り、癩病を看護し、巡禮を護送すべき筈であつた。かやうな意圖を以つてまたその騎士團は解散した。彼等の財産は基督教の事業、特に貧民と病人のものである。

(四)新しい紋章貴族は全く歐羅巴に於いて發達する君主政體からのみその規定を受けたやうに、都市の自由、町村の起原、最後に我大陸に於ける農夫の解放も亦この狂へる十字軍が與へたとは全く別の原因から述べられるのである。その第一回の熱病的發作に於いて、すべてのふしだらな戸主及び負債者が猶豫を許され、臣下及び奴隸がその義務を免ぜられ、税を拂ふべきものは税を免ぜられ、地租を納むべきものは、その地租を免ぜられたといふことはまだ歐羅巴の自由の權利の基礎とはならなかつた。久しき以前に都市は建てられ、久しき以前に古い都市はその權利を確立され、又擴張された。而してもしこれの都市の次第に増大する勤勉と貿易とに、農夫の自由も亦早晚付加はり、都市の獨立せんとする努力ですら勃興する君主政體の進行の中に必然的に含まれてゐたならば、吾々は歐羅巴の變動の流れに於いて明るい動搖の方へ吾々を泳ぎ進ましめる所のものをばパレスチナに求めてはならない。歐羅巴の永續的組織が神聖なる愚行に基くことは困難である。

(五)藝術と學問も亦本當の十字軍によつては決して促進されはしなかつた。始めてパレスチナに遠征した不規

律な軍勢はこれに就いては少しの考もなく、而してこの考をコンスタンチノオブルの市外に於いても、また亞細亞に於いても、土耳其人からも、埃及の騎兵隊からも得ることは出来なかつた。後の遠征に於いて人は唯其地に在りしことの短かりしと、其の短き時をば艱難辛苦して屢單に過せしことを考ふれば、其の携へ來れる輝しき大發見の夢をば棄てしも尤もである。皇帝フリードリッヒ二世がメレヂンから送られた大振子時計は何等の昇測時學をも齎さなかつたし、十字軍に従へる者がコンスタンチノオブルで驚きの眼を見張つた希臘の宮殿は更に優れた何等の建築術をも歐羅巴に齎らさなかつた。二三の十字軍に従へる人、特にフリードリッヒ一世と二世とは啓蒙の爲に共働した。然し前者は東洋を見る前に之をなし、而して後者にとつては、東洋に於ける暫時滞在の後に、この旅行は單に、夙に彼の示せる統御法を以つて活動を繼續して行く新しい刺激たるに過ぎなかつた。宗教的騎士團の何れも、啓蒙を歐羅巴に齎しもせず、また之を促進しもしなかつた。

かくして、この場合十字軍に對して説述され得る所のものは、已に他のものに於いて存してゐる、従つて藝術及び科學をば心ならずも促進しなければならなかつた少數の機會に制限されるのである。

(一)最初の遠征に於いて、聖地へ遠征し而して大部分は歸つて來なかつたので、多數の富める家臣及び騎士の財産は賣られるか或は他の財産と併合されることになつた。之を利用することの出來たもの、即ち領主、教會、已

存都市は各々之を勝手に利用した。中産階級を造つて以つて王の權力を強固ならしめると云ふ事は成程これに山つて始まつたのではないが、然し鼓舞促進せしめられたのである。

(二)人はさもなくば知ることの出来なかつた國土と民族と宗教と制度とを知つた。狹隘なる眼界は廣められた、人は新しい理念、新しい衝動を得た。今や人は、さもなくば、捨て、しまうであらうやうな事物に心を用ひ、夙に歐羅巴にあつたものを一層よく使用するに至つた。而して世界は思つたより廣かつたので、隔たれるものを知らうとする好奇心をそゝられることになつた。成吉斯汗が東北亞細亞に於いてなせる激烈なる征服は、主として人の視線を、ヴェニス人マルコ・ポオロ、佛蘭西人ルユブルユキイ、及び伊太利人ヨハン・デ・ブラノ・カルビノが全く異なる意圖を以つて旅行した韃靼に引き寄せた。マルコ・ポオロは貿易の爲に、次の者は王の好奇心の爲に、第三の者はこれらの民族の改宗の爲に法王に派遣せられたのである。従つてこれらの旅行者は必然的に十字軍とは關聯してゐなかつた。何故かといふに、彼等は十字軍の前に、又後に旅行したからである。東洋そのものは、この遠征によつて思つた程には吾々に知られなかつた。東洋に關する東洋人の報道は、シリアに基督教徒の充ちてゐる時に於いてもなほ吾々には必要缺くべからざるものである。

(三)最後に歐羅巴はたとひそれは最も有益な仕方ではなかつたにせよ、この神聖な戰場に於いて、互に相知るに至つた。王公は、その密接な交際から互に忘れ難き憎惡の念を懐いて歸國した。特に英吉利と佛蘭西との戰爭はこれによつて新しい糧を得た。無信仰なるものに對して基督教共和國が一致して戦ふことが出来、又戦つても

宜しいといふ面白からぬ試みが、歐羅巴に於いても亦かゝる戰爭の權利あることを許し、而して後には、他の大陸に之れを擴めた。然し歐羅巴の隣邦諸國は相互の強弱を精細に知るに至つた所からして一層一般的な國家學と平時及び戰時に於ける關係の新しい組織が隱約の間に建立せられるやうになつたといふことは否まれない。何人も、富、貿易、便利と奢侈とを熱望してゐた。蓋し粗野なる人は、外國に於いて容易にそれに耽り、且他人のそれを羨むものである。東洋から歸つて來た極少數の者は其後歐羅巴風に慣ることを得たが、多數の者は彼等の豪勇すら東洋に遺棄し、西洋に於いて東洋を拙劣に摸倣するか、然らざれば或は再び冒險と旅行とに憬れた。一般に事件は、唯其の中に理性の存してゐるだけ現實的な永遠な利益を生じ得るに止まるのである。

もし歐羅巴が其の無數の軍勢を以つてシリアの一隅に於いて聖墓を争つてゐた丁度其の時に、成吉斯汗が早く、而して多くの兵力を率ゐて西方に向つて來たならば、歐羅巴にとつては非常に不幸であつたであらう。露西亞や波蘭のやうに我大陸は恐らく蒙古人の掠奪物となり、而して其の場合其の諸國民は聖墓に祈りを捧げんが爲に、手に錫杖を以つて乞食をしながら順禮をしたかも知れない。が吾々はかう云ふつまらぬ妄想を棄て、互に相錯綜せる事物の進行の後に歐羅巴に於いて、如何に人間の道徳的理性並に政治的理性が次第に透明となり、又陶冶せられて來たかを回顧しよう。

四 歐羅巴に於ける理性文化

吾々は、基督教の初期に於いては、所謂東洋哲學によつて宗教の體系を説明し、適用し而して純化せんと欲した數多の宗派を認めた。これらの宗派は異端として壓迫せられたりまた迫害せられた。ゾロアスタア（ゼルドウシュト）風の古代波斯哲學と同時に道德的制度とを結合し、而して一般民衆の活動的な教育者として働かうと欲した嘛尼西の教が最も深く喰入つたやうに思はれた。この教は理論的異教として一層迫害せられ、而して東方西藏山脈の中に、西方アルメニア山脈の中に、また到る所其の亞細亞的運命の見出された歐羅巴の各地に透れた。夙に人は壓迫せられながら之を信じてゐたが、遂にこの教は最も暗黒な時代に於いて、與へられた信號に於いてのやうに夢想だもされなかつた地方から飛び出して、突如として伊太利、西班牙、佛蘭西、和蘭、瑞西及び獨逸に恐ろしき騷擾を惹き起すに至つた。これは希臘教會と羅馬教會とが長らく之を争つてゐた蠻地、ブルガリアから起つて來た。其處に於いては羅馬法王とは異つて、貧困の基督と同様である振をしてゐたその首長は見るべからざるものであつた。秘密の傳道師はすべての國に行き、而して下層の人々、特に勤勉なる職工と壓迫されてゐた農夫、然し富める人々、伯爵及貴族、特に最も意地悪き迫害や死を物ともしない婦人共を、權力を以て誘惑した。純なる人間の徳、特に勤勉、純潔に及び隱遁を説き、また下層の人々が嚴しき區別を以つてそれに導かれねばならなかつた完成の目標を示したかの靜かな教は教會の一般の殘虐に對する最も高き閥聲であつた。特にこの教は僧侶の道德、その財産、支配欲及び放逸を攻撃し、迷信的の教と儀式とを非難し、その非道德的魔術を否定し、而して、すべてこれらの代りに、手をあけることによる單純な祈禱と彼等の長なる完全なる者の下に於ける各員

の結合を認容した。麵麩の化體説、供養と十字架と淨罪火、聖者の罪人病人の爲の祈禱、及び羅馬僧侶の固有の特權は彼等に取つては人間の掟であり又詩であつた。彼等は聖書の内容特に舊約聖書の内容に關して非常に自由に批判し、而してすべてのものを心情及び肉身の貧困、純粹や、靜かなる勤勉、温順及び慈愛に還元した、従つて彼等は多くの宗派に於いても善良な人々と稱せられた。その最も古いものに於いては、東洋の嘛尼西教が紛れもないものである。彼等は明暗の争から出發し、物質をば罪惡の根源と考へ、而して特に感性的逸樂に關して嚴しい考を持つてゐた。次第に彼等の體系は純化されて來た。人が異教信者、獨身辯護者、パウルス宗徒、遍歴者並に各地の地方的状態に應じて別の名を以つて呼んでゐた嘛尼西教徒から個々の教師、特にハインリツヒとベエタア・デ・ブルイスとは強固なる宗派を造り、遂にウルドウスウルドウスの信奉者は數世紀後には新教となつて現れた殆んどすべてのものを教へ、且大なる勇氣を以つて之を主張した。反之、以前の宗派は近代の再洗禮者、ボヘミヤ宗徒及び別の宗派に似てゐるやうに思はれる。すべてが黙々たる力を以つて、他を説明せざれば止まざる力を以つて擴まつたので、僧侶階級の威嚴は各地方に於いて全く地に墜ち、加ふるにこの階級は彼等の議論に反抗することが出来なかつたのである。殊にプロヴァンス語を話す地方は彼等の花園であつた。彼等は新聖約書をプロヴァンス語に翻譯し（これは當時に在つては前代未聞の企である）、その完全性の規則をプロヴァンスの詩に與へ、而して羅馬基督教の輸入されて以來、プロヴァンス語に於ける民衆の最初の教育者陶冶者となつた。

然し人はこれに對して彼等を極力迫害した。已に十一世紀の頭初に於いて、佛蘭西の中央、オルレアンに於いて

その中に女王の懺悔を聴く僧のゐる嘛尼西教徒が火刑に處せられた。彼等は反抗しようとはせず、而してその信條を奉じて死んで行つた。宗教家が權力を振ふことが出来たすべての國、例へば伊太利及び南部獨逸に於いて彼等は同じく冷酷な待遇を受けた。當局が彼等を勤勉な人々として保護した南部佛蘭西と和蘭に於いては、彼等は長らく安穩に生活したが遂に多くの議論が戦はされ、長老會議が開かれて、僧侶の憤怒が最高潮に達した時に、彼等に對する宗教裁判が認められた、而して彼等の保護者であり、人類の善事に對する眞の殉教者たるツウルウズのライムント伯は、彼等を見捨てようとは欲しなかつたので、かの恐るべき十字軍が彼等に對して勃發し殘酷狂暴を演ずるに至つた。彼等に對して造られた異教説教者たるドミニカン派の人々は憎むべき彼等の裁判官であつた。この世の生める極惡無道の人非人、十字軍の嚮導者たるモンフォルトのシモンはその一人であつた。而して憐れな善人が二世紀の長い間隠れてゐた南部佛蘭西のこの一隅からすべての異教徒に對する刑事裁判所は西班牙、伊太利及び大概の舊教國に食ひ入つて行つた。この刑事裁判所と僧侶仲間の迫害精神はすべてのものに當てはまるので、中世の最も種々雑多な宗派の混亂がそれから起つて来るが然しそれからまた各宗派の頑強と其の忍びやかなる傳播とが行はれた。かくて三世紀乃至五世紀の後新教徒の宗教改革なるものは、すべての國に於いてやはり同じ種子を見出し、唯之に生命を與へたに過ぎなかつた。英國のウツクリフは、フウスがボヘミヤで活動したやうに、ロオラアデンで活動した。といふ譯は、ブルガリア人と共に一國語を有つてゐたボヘミヤは夙にかやうな敬虔なる種類の宗派を以つて充されてゐたからである。眞理及び迷信、人身供、教會の尊大にして非宗教的な態

度に對する斷然たる憎惡の一度植えられた萌芽は最早踏みぢることは出来なかつた。基督の貧窮と模倣のうつしとしてそれ等の宗派に反對したフランシスカン派の僧及び他の宗派は之を崩壊し而して之をなくして了ふべきであつたが、然し民衆に於いてすらその目的を十分に達することが出来ずして、彼等が寧ろ新しい誹謗の的となつた。かくて、此處に於いても亦最も大なる專制政治なる教政の將來の崩潰は最も貧弱なる始源、單純及び誠意から端を發した。勿論、偏見と誤謬となきにしもあらずではあつたが、而もこの單純な善良な人々は、從來、多くの宗教改革者がなし得たよりも更に自由に多くの事柄を論じた。

一面に於いて健全なる人間悟性がなしたものは、他面に於いて、思辨する理性によつて、素より徐々にして微細ではあるが、而も有効に促進せられた。修道院學校に於いて、人は聖アウグスチヌス及びアリストテレスの辯証法に關して討論することを學び、而してこの術を學問的比武遊戯並に騎士遊戯として用ゐるに慣れた。人が、この討論の自由を以つて中世の全く無用な練習であるとする非難は正當なものではない。何則、當時に於いてはこの自由は殆ど評價すべからざる價值を有つてゐたからである。討論しつゝ、多くのものは疑惑に陥り、理由と反對理由によつて精査され、その積極的の即ち實際的の絶望に陥つてゐる時はあまり長くはなかつた。宗教改革そのものは、人が討論の法則の後にかくれ、その討論の自由を以つて身を保護したといふことを以つて始まつた

のではなかつたか。修道院學校が全く大學、即ち法王と皇帝の自由の附與されてゐる戰場並に騎士の活動場所となつた時に、言語、沈着、學問的争鬪者の機智と聰明とを練習し、而して之を鋭敏ならしむべき廣野が開かれた。其處には、最も微妙なる疑問、争論及び區別を生じないやうな、而して時と共に最も洗煉された織物に紡がれなかつたやうな神學の條款も、形而上學の材料もない。この織物はその性質上、人が盲目的に信ぜねばならなかつた積極的傳統のかの粗雑な組織ほどにその持続性を有つてゐない。この織物は、人間の理性によつて織りなされてゐるので、それ自身の仕事として、また理性によつて解かれ又破壊され得るのであつた。そこで、吾々は皆、中世のあらゆる微妙な討論精神を有する人並にこの織物の學問的城砦を造つた學者達に感謝の意を表さねばならぬ。たとひ、多數の討論者が嫉妬から或はその先見の明なき爲に迫害せられ、或は全くその死後、墳墓から發掘されたとしても、而もその術をば全體に於いて繼續し、而して歐羅巴人の言語理性を非常に鋭くしたのである。

南部佛蘭西が向上して止まざる民族宗教の最初の持續する舞臺であつたやうに、その北部特に有名な巴里の學校は思辨と煩瑣哲學の仕合場であつた。バシヤシウスとラトラムヌスとはこゝに生活し、スコトス・エリウゲナは佛蘭西に滞在して好遇を受け、ランフランとベレンガアル、アンセルム、アベラルド、ペトルス・ロンバルドス、アキノオのトオマス、ボナヴンツウラ、オツカム、ドゥンス・スコトス等の煩瑣哲學の曉天の諸星や太陽は、佛蘭西に於いて或は生涯學んだか或はその青年時代に於いて學んだかした。而してこれらすべての土地から、すべての人は當時代の最高の知識を學ばんが爲に、巴里に流れ込んで來た。巴里で有名になつた人は國家や教會に於いて名

譽ある地位を得ることが出來た。何故かといふと煩瑣哲學は國事に就いても關係する所があつたので、フィリップ美王とバイエルンのルウドウィヒとを法王に對して辯護したかのオツカムは皇帝に「陛下私を劍を以て守つて下さい。然らば私は陛下を筆を以つて護りませう」と云ふことが出來た程である。佛蘭西語が他の語にもまして、哲學的の精密なる表現に發展し適合したといふことは、就中、その祖國に於いて、かくも長く又多く、かくも輕妙に又微細に討論されてゐたといふことに起因する。蓋し羅甸語は佛蘭西語と近いものであり而して抽象概念の形成が容易に佛蘭西語に移つて行つたのである。

アリストテレスの著書の翻譯が繊細な煩瑣哲學にあらゆるものよりも一層貢獻したといふことは、その希臘的世界觀が歐羅巴のすべての學校に、五百年間も保存され得たといふを見て已に明である。然し人が何が故にかくも熱烈なる偏愛を以つて、この著書に向ひ、而して十中八九は之を亞刺比亞の手から獲たかと云ふに、その原因は十字軍に存するにはあらずして、當世紀の衝動とその考方に存してゐるのである。亞刺比亞人の學問が歐羅巴に對して與へた最初の刺激は、人がそれによつて生命の保存と長生、測るべからざる富の獲得、否、人事を支配する運命の知識を得んと期待したかの祕密と共に、彼等の數學上の製作物であつた。人は賢人の仙丹、不死の藥を求めた。人は星を見て未來の事件を判斷し、而して數學的機械は魔術の機械とすら思はれた。かくして人は一度已

れを捨て、眞理なるものを發見せんが爲に、一人の子供として不思議なものを追ふた、而してこの爲に最も困難なる旅行をすら企てたのである。第一世紀に於て已に、阿弗利加人コンスタンチンは、カルタゴから三十九年の長き間、バビロン、印度、埃及に於いて、亞刺比亞人の秘密を蒐集せんが爲に、東洋を旅行し歩き廻つた。彼は結局歐羅巴に歸へり、而してモント・カウシイの修道僧として、希臘語と亞刺比亞語とから、多くの、特に、醫術に役立つ書を翻譯した。これらの翻譯はたとひどんなに拙劣であつたにしても、すべての人々の手に渡り、而して亞刺比亞の技術によつて、サレルノに、醫學の最初の學校が堂々として興つた。佛蘭西と英國とから、知識渴望者は、有名な亞刺比亞の教師の教授を受けんが爲に西班牙にやつて來た。彼等は歸國して、自からも魔術としての多くの秘術を誇つたやうに魔術者として尊敬された。これによつて、數學、化學、醫術は一部分は書物に於いて、一部分は發見と實驗練習の試験とに於いて歐羅巴の最も有名な學校に這入つて來た。もし亞刺比亞人なかりせば、恐らく、ゲルバートもアルベルトウス・マグヌスもピラ・ノバのアアノルドもロオヂヤア・ペエコンもライムンド・ルル等も出て來なかつたであらう。彼等は或は西班牙に於いて亞刺比亞人自身から、或は亞刺比亞人の著書から學んだのであつた。亞刺比亞の書物の翻譯に、またあらゆる學問の復活にひるむ所なく貢獻した皇帝フリードリッヒ二世すら、迷信的に亞刺比亞人を愛好せずにはゐられなかつた。幾世紀の長い間、一部は自然の最も尊い秘密の靜に學び得られもする西班牙、阿弗利加及び東洋への旅行の意向、一部にさう云ふ旅行の物語りが保存せられた、多くの秘密教團、旅行する煩瑣哲學者の大組合はこれから出來て來た。否、宗教改革の世紀を越えるまで

の哲學的並に數學的學問の全形態はかう云ふ亞刺比亞的起原を示してゐるのである。

之によつて、觀照的完成の最も洗煉された體系の一に發展した神秘教がかやうな哲學と結びついたといふことは何の不思議もない。最初の基督教教會に於いて已に、多くの宗派に於ける新プラトン哲學から神秘教が出た。僞ディオニシウス・アレオバギタの翻譯によつては西洋の修道院に入り、多くの曠尼西の宗派も之に關與した、而して遂に煩瑣哲學と協力し或は又その力を借らずして、修道院と尼僧との間に或は理性の最も鋭き穿鑿、或は愛する心情の最も優しいこまやかさの其の中に現れるものとなつた。神秘教であつても人々の心情をして單なる儀式奉仕から離れて、自己反省に慣れしめ、而して精神的糧に由つて元氣を與へるので、善き結果を生ずるに至つた。この教は、一種の宗教的小説によつて感覺を純化したやうに、世間を遁れた孤獨なるもの、困憊せる心を抱ける人々に、この世界以外に慰安と修業とを與へた。この教は煩瑣哲學が理性の準備者であつたやうに、心情の形而上學の先驅者であつた。而して兩者は互に權衡を保つてゐた。かう云ふ阿片が藥劑であり、又遺憾にも藥劑でなければならなかつた時代が殆ど過ぎ去つてしまつたと云ふことは誠に幸福である。

最後に法律學、即ち公正の感情と健全なる悟性との實踐哲學は、それが新しい光を以つて輝き始めたので、神秘教と思辨とよりも更に歐羅巴の安寧幸福に貢献し、而して社會の法律を一層確乎たらしめた。正直な質朴の時代に於いては、人は多くの成文法を要しなかつた。粗野な獨逸民族が、まさしく羅馬の代表者の狡猾に反抗したのは正當である。他の開化して一部分腐敗せる民族の國土に於いては、常に獨特の成文法が絶対に必要なるのみならず、やがてまた羅馬法の拔粹も缺くべからざるものであつた。而してこの法の拔粹は絶えず進歩し、各世紀と共に成長して行く法王の立法に對しては不十分であつたので、人が説明し、活動する人々の悟性と判斷とがそれに於いて練習されるやうにし、而して羅馬法の全體を引き出したといふことはよい事であつた。皇帝がこの研究を殊に伊太利の高等な學校に薦めたのには原因がないのではなかつた。何故かと云ふと皇帝に取つては、それが法王に對する武庫となつたからである。すべて發生する自由都市もそれを法王、皇帝及びその小暴君に對して使用すべき同じ興味を有つてゐた。そこで法律學者の數は信ぜられない程増加した。彼等は學問ある騎士として、民族の自由と財産との擁護者として宮中に於いて都市に於いて又教授の椅子に於いて最高の名譽を受け、而して人の多く集れるボロニヤは彼等によつて學者町となつた。伊太利は法律研究によつて煩瑣哲學に於ける佛蘭西の如きものとなつた。古代羅馬法と寺法とは互に争つた。多くの法王其の人も、最も法律學に通じてゐる人々であつた。法律學の復活がその源泉の不純であり、而して古代羅馬法の精神の唯朦朧たる霧を通し發見された時代に方つたといふことは遺憾である。穿鑿を事とする煩瑣哲學がかう云ふ實踐科學であると僭稱し、而して最も思慮あ

る人の言説をば欺騙的な言葉のあやとしてしまつたといふことは遺憾である。最後に、人が補助研究、判斷力の練習を古代の最大なる智者の模範に従つて積極的規範と爲し、あらゆる場合、最も新しくして又最も漠然たる場合に於いても法律の聖書に採用したといふことは遺憾である。是を以つて殆んどあらゆる歐羅巴の國民的立法の性質を時と共に殆んど消してしまつた詭計の精神が導き入れられた。野蠻的な書物學問が生々した事實の知識に代り、法律手續は形式と言葉の穿鑿の迷宮となつた。高尚な裁判官の心持ちの代りに、人間の聰明が詭計を廻す爲に鋭敏になり、法律法則といふ言葉は關係のないものや混亂したものとなり、否、遂に君主の勝ち誇れる権力と共に、僞治者權があらゆるもの以上に便宜を得た。その結果は長らく勢力を有してゐた。

もし人が歐羅巴に於いて再び目覺めつゝある精神の状態を若干の古い時代と古い民族とに比較するならば、その光景は誠に悲しきものとなる。粗暴にして鈍感なる野蠻から、宗教的並に世俗的支配の壓迫を受けながら、あらゆる善事が恐ろしく出て來た。世俗的支配に於いては、最善種子は殘酷な方法で踏みにぢられ、或は猛鳥によつてつぶされてしまつた。宗教的支配に於いては、この種子は荊棘の間にあつて、唯漸くにして生長することが出来たが、又そのまま、窒息するか、或は凋んでしまふかした。それはその種子に取つて、古代の純朴と善良と云ふやうな仁慈な地盤が缺けてゐたからである。最初の民族宗教は壓迫された、一部分狂信的な異教徒の間に現

はれ、哲學は相論争する辯證家の講堂に、最も有用な學問は魔術や迷信として、人間的感覺の指導は神秘教として、更に善良なる憲法は、夙に生命を失へる、全く異様の立法に對する、着古された、修繕された外套として現はれる。かくて歐羅巴は最も混亂した状態から抜け出でて新に形成さるべきである。然るに耕作の地面に輕鬆な深みがなく、補助手段と機械とが役に立たず、快活と自由とが缺けて居るのに代るものは、恐らく手を加へらるべき田畑の範圍であり、育てらるべき植物の價値であらう。アテンでもスバルタでもなく、歐羅巴が此處に陶冶せらるべきである。希臘の賢人乃至藝術家の心ココロ身の完全ではなく、時のたつに従つて地球を包括した人道と理性とに陶冶せらるべきである。これに對して吾々は未來を成熟せしめる爲に、如何なる施設がなされ、時代の暗黒の中に如何なる種類の發見が撒布されたかを調べよう。

五 歐羅巴に於ける施設と發見

(一)すべての都市は歐羅巴に於いては云はゞ、もし之がなければ今尙歐羅巴は荒寥たる沙漠に過ぎなかつたと思はれるやうな、文化の常備陳營となり、勤勉の工場となり、すぐれた國家經濟の始源となつた。羅馬領土のすべての土地に於いて、これらの都市に於いて、またこれらの都市と共に、或所に於いては多く或る所に於いては少く羅馬藝術の一部分が保存されてゐる。羅馬が占領した地方に於いて、これらの都市は新しい野蠻人の侵入に

對する前壁となり、人間、商業、藝術及び工業品の避難所となつた。そこでこれらの都市を建設し、恩恵を與へ而して保護した統治者に對して永久に感謝しなければならぬ。何故かといふに、公共心をして始めて起るに至らしめた制度がこの都市と共に建立せられたからである。こゝに貴族政治的、民主政治的團體が造られた。その成員は互に覺醒し合ひ、屢々互に敵意を表はし而して戦ひ合つた、然しまさしくそれによつて協同的安全、競争的勤勉及び絶えざる努力は促進されざるを得なかつた。都市の壙壁内の狭き場所に當時、發明、勤勉、市民の自由、財政、警察及び秩序を覺醒し而して之を形成することの出來たすべてのものが集つた。多くの都市の法律は市民的叙知の模範である。上流も下層も共に之によつて最初の共同的自由、市民權を享樂した。伊太利に於いては、その貿易によつて、アテンとスバルタとが嘗て到達したよりも更に廣大なる共和國が出生した。アルプス山の此方には、嘗に個々の都市が勤勉と貿易とによつて、出來したのみならず、個々の都市の同盟も出來た、否、結局黒海、地中海、大西洋以外、北海及び東海以外にも及んだ商業國家が出來た。その主權者がリウベックであるこれらの都市は、獨逸に和蘭に、北方諸國に即ち、波蘭に、普魯西に、露西亞にリブランドに散在してゐた。而して英吉利、佛蘭西、葡萄牙、西班牙及び伊太利の大商業地はこれらの都市と相結んだ。恐らくこれは世界に未だ曾てなき最も有効なる同盟であつたであらう。この同盟はすべての十字軍や羅馬の習俗よりも更に歐羅巴を自治團體たらしめたのである。何則、この同盟は宗教の區別や國民の區別を超越し而してすべての國家の結合を相互の利益、競争的勤勉、誠實と秩序とに基けたからである。都市は統治者、僧侶及び貴族が完成することが出來

ず、また完成することを欲しなかつたものを完成した。即ち、諸々の都市は協同的に働く歐羅巴を創造したのである。

(二)すべての都市に於ける組合は、それは如何に屢々當局、否、生長しつゝある藝術にすら厄介なものになつたにしても、各人がすべての人に對し、すべての人が各人に對する協同團體とし、結合體として、誠實なる商業支持の爲に、藝術の一層善良な仕上げの爲に、最後に藝術家其人の尊敬と榮譽との爲に其の當時にあつては欠くべからざるものであつた。是等の都市によつて歐羅巴は、世界のあらゆる産物の製作者となり、而してこれによつて、最小にして最貧なる大陸としてあらゆる大陸に對する覇權を握るに至つた。歐羅巴は、羊毛と亞麻とから大麻と生糸とから、毛髪と皮とから、膠と土とから、石、金屬、植物、汁液と色彩とから、灰、鹽、襪襪及び雜草から驚くべきものが造り出され、而してこの驚くべきものが再び他の驚くべきものとして用ゐられたし、又役立つであらうといふことに就いては、藝術家の勤勉に負うてゐるのである。もし發明の歴史が人間精神の最大なる讚美であるとするれば、組合と結社とはその學校である。と云ふのは、藝術の孤立と學習の規則正しい秩序とによつて、多くのものの相互の競争によつて、又好ましき貧窮によつて、君主及び國家の恩恵が殆んぎ之を知らず、殆んど促進したり、或は酬ひたりすることもなく、又殆んぎ決して喚覺もしなかつた事柄が生み出されたからである。それは平和な都市支配の陰に於いて、訓練と秩序とに由つて生じて來たのである。最も趣味ある藝術が手工から、組合から成立した。而して組合の衣裳を、彼等は殊にアルプスの此方に於いては、長く附けて

ゐて自から害ふやうなことをしなかつた。それで、吾々はかやうなすべての實踐的秩序の形式や教授階段を嘲笑したり、憐んだりしてはならない。それに於いて藝術の本質と藝術家の共同榮譽が保存せられた。僧侶と騎士とは、全組合制度が云はゞその者の作業の價値を保證した所によく働く職工が教授階段を必要とした程、それを必要としなかつた。蓋し藝術であるすべてのものに取つて、不手際、親方の名譽の感情の缺乏程反對してゐるものはない。而してそれを以つて藝術そのものは没落するのである。

それで吾々にとつて、藝術及び職業たるすべてのものに就いて都市の功績を證明する所の中世の傑作は尊敬すべきものである。もし共和政治と、伽藍と議事堂とを有する富める商業都市が、恰も彫像と寺院とを有する希臘の都市が嘗て競争したやうに、競争しなかつたならば、ゴシック建築術は決して榮えはしなかつたであらう。その各に於いて、吾々は、彼等の趣味は何處からその模範をとつたか、而してその交通は當時何處へ向ひしかを知る。ヴェニスとビザとは最も古い建築に於いて、フロオレンスやミランとは異なる建築様式を持つてゐる。アルプスの此方の都市は或は此の模範に従ひ或は彼の模範に従つた。然し大體に於いて、すぐれたゴシック建築術は最も多く都市の制度と時代精神とから説明することが出来る。蓋し人間は思惟し、生活するやうに、建築し、住居するものであるからである。あらゆる鳥は形體と生活法とによつて、その巢を造營するものであるから、人間は唯その流儀に従つて外で見た模範を應用することが出来るに止まるのである。修道院及び騎士の堡塞に於いては、最も大膽にして最も優美なゴシック建築術は決して用ゐられなかつたであらう。かゝる建築術は公共の華麗なる